

IBM DB2 Everyplace



インストールおよびユーザズ・ガイド

バージョン 8.1.4

IBM DB2 Everyplace



インストールおよびユーザズ・ガイド

バージョン 8.1.4

ご注意

本書の情報およびそれによってサポートされる製品を使用する前に、119 ページの『特記事項』に記載する一般情報をお読みください。

本書は、DB2 Everyplace のバージョン 8.1 (プロダクト番号 5724-D04) に適用されます。また、新しい版で特に断りがない限り、これ以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションにも適用されます。

本書は SC88-9478-00 の改訂版です。

本書には、IBM の専有情報が含まれています。その情報は、使用許諾条件に基づき提供され、著作権により保護されています。本書に記載される情報には、いかなる製品の保証も含まれていません。また、本書で提供されるいかなる記述も、製品保証として解釈すべきではありません。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本マニュアルに関するご意見やご感想は、次の URL からお送りください。今後の参考にさせていただきます。

<http://www.ibm.com/jp/manuals/main/mail.html>

なお、日本 IBM 発行のマニュアルはインターネット経由でもご購入いただけます。詳しくは

<http://www.ibm.com/jp/manuals/> の「ご注文について」をご覧ください。

(URL は、変更になる場合があります)

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原 典： SC18-7184-01
IBM DB2 Everyplace
Installation and User's Guide
Version 8.1.4

発 行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担 当： ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 2003.10

この文書では、平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、および平成角ゴシック体™W7を使用しています。この(書体*)は、(財)日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注* 平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、
平成角ゴシック体™W5、平成角ゴシック体™W7

© Copyright International Business Machines Corporation 1999,2003. All rights reserved.

© Copyright IBM Japan 2003

目次

本書について	v
本書の対象読者	v
本書の構成	v
本書で使用する用語と規則	vi

第 1 部 概要 1

第 1 章 DB2 Everyplace 製品の概要 . . . 3

DB2 Everyplace の紹介	3
DB2 Everyplace ソリューションのコンポーネント	3
DB2 Everyplace モバイル・データベース	4
DB2 Everyplace 同期サーバー	4
DB2 Everyplace 同期クライアント	5
DB2 Everyplace Mobile Application Builder	5
DB2 Everyplace のサンプル・アプリケーション	6
DB2 Everyplace のサンプル・シナリオ	6

第 2 部 DB2 Everyplace のインストール 9

第 2 章 DB2 Everyplace のインストール 11

バージョン 8.1.4 でのマイグレーションに関する考慮事項	11
DB2 Everyplace のインストール要件	12
DB2 Everyplace Express のインストール要件	13
サーバーへのインストール	15
プリインストール作業	15
サーバーへのインストール	17
サーバーへのインストール (Windows の場合)	17
UNIX のサーバーへのインストール	22
サーバーへの DB2 Everyplace Express のインストール (Windows の場合)	26
サーバーへの DB2 Everyplace Express のインストール (Linux の場合)	29
モバイル・デバイスへのインストール	31
モバイル・デバイスのインストール	32
Install on Mobile Devices ツールを使用したインストール	32
モバイル・デバイスへの手動によるインストール	34
Update Tool を使用した同期クライアント・ソフトウェアの更新	48
サーバーでのインストール後の作業	54
UNIX での DB2 Everyplace インスタンスの作成	54
中間層サーバーへのソース・データベースのマッピング	54
レプリケーションの使用可能化	55
サンプルのデータベースとアプリケーションのセットアップ	56
同期サーバーのサブプレットのテスト	56

IBM WebSphere Application Server で使用する同期サーバーの構成	58
WebSphere Application Server バージョン 5.0 での DB2 Everyplace の構成およびインストール	60
複数サーバー環境の構成	72
モバイル・デバイスでのインストール後の作業	78

第 3 部 同期セットアップ 81

第 3 章 モバイル・デバイスを同期するためのセットアップ 83

Palm モバイル・デバイスまたはエミュレーターを同期するためのセットアップ	83
Palm OS モバイル・デバイスを同期するためのセットアップ	83
Palm OS モバイル・デバイスまたはエミュレーターのセットアップ	84
Palm OS モバイル・デバイスまたはエミュレーターへのファイルのインストール	85
Palm OS モバイル・デバイスまたはエミュレーターのデータの同期および検査	87
Symbian OS v6.0 モバイル・デバイスを同期するためのセットアップ	88
Symbian OS V6.0 モバイル・デバイスを同期するためのセットアップおよび構成	88
ワークステーションでの m-Router Connect の構成	89
デバイスでの m-Router Connect の構成	90
デバイスでの ISync の構成	90
Symbian OS V6.0 デバイスでのデータの同期	91

第 4 部 サンプル・アプリケーション 93

第 4 章 DB2 Everyplace サンプル・アプリケーションの概要 95

第 5 章 IBM Sync アプリケーション . . . 99

IBM Sync の概要	99
IBM Sync for Palm OS の構成	100
IBM Sync のメニュー・オプション	101
IBM Sync を使用したデータの同期化	103

第 6 章 CLP アプリケーション 105

CLP アプリケーションの概要	105
CLP コマンド	106
CLP を使用した SQL ステートメントの入力と実行	108
CLP を使用したデータのインポートとエクスポート	109

第 7 章 Visiting Nurse (巡回医療サービス) サンプル・アプリケーション . . .	113
Visiting Nurse (巡回医療サービス) サンプル・アプリケーションの概要	113
Visiting Nurse (巡回医療サービス) アプリケーションの実行	114
Visiting Nurse (巡回医療サービス) サンプル・アプリケーション表	117
特記事項	119

商標	122
用語集	123
索引	127
弊社へのお問い合わせ	129
製品情報	129

本書について

本書では、IBM DB2 Everyplace のインストール方法と使用方法について説明しています。本書は、以下のことを説明しています。

- DB2 Everyplace コンポーネントのワークステーションへのインストール
- DB2 Everyplace データベースおよびサンプル・アプリケーションの、モバイル・デバイス、組み込みデバイス、あるいはエミュレーターへのインストール
- DB2 Everyplace サンプル・アプリケーションの使用
- コマンド行プロセッサの使用
- QBE (例示照会)の使用
- IBM Sync の使用

本書では、DB2 Everyplace を使用したアプリケーション開発に関しては記載していません。アプリケーション開発については、「*DB2 Everyplace アプリケーション開発ガイド*」を参照してください。

本書では DB2 Everyplace 同期サーバーの構成および管理については説明していません。同期サーバーの構成および管理に関しては、「*DB2 Everyplace 同期サーバー管理ガイド*」を参照してください。

本書の対象読者

本書は、DB2 Everyplace を使用するアプリケーションの開発および展開に携わるアプリケーション開発者、システム管理者、あるいは情報技術 (IT) 関連の担当者を対象としています。

サポートするプラットフォームのいずれかで DB2 Everyplace をインストールまたは使用する場合には、本書を参照してください。

本書では、DB2 Everyplace を使用する際に必要となるモバイル・デバイスや組み込みデバイスの基本的な操作については、説明していません。それらの操作に関する説明は、モバイル・デバイスや組み込みデバイスに付属の資料を参照してください。DB2 Everyplace を使用するには、モバイル・デバイスまたは組み込みデバイスの使用方法についての基本的な知識が必要です。

本書の構成

本書の構成は以下のとおりです。

- **第 1 部**では、DB2 Everyplace およびモバイル・コンピューティングにおける DB2 Everyplace ソリューションについて簡単に紹介します。
- **第 2 部**では、DB2 Everyplace を Windows ワークステーションにインストールする方法、ならびに DB2 Everyplace アプリケーションおよびサンプルをモバイル・デバイスにインストールする方法について説明します。

- **第 3 部**では モバイル・デバイスまたはエミュレーターをセットアップおよび構成する方法、ならびに DB2 Everyplace に組み込まれているサンプル・アプリケーションの使用方法について説明します。
- **第 4 部**では、DB2 Everyplace ライブラリー、モバイル・デバイスの言語イネーブラー、サンプル・アプリケーション表、用語集、および IBM への連絡方法について記載します。

本書で使用する用語と規則

本書では、下記の強調表示規則を使用します。

表 1. 強調表示規則

テキストの特性	定義
太字	システムによって名前があらかじめ定義されているコマンド、キーワード、およびその他の項目を示します。
イタリック体	以下のいずれかを示します。 <ul style="list-style-type: none"> • 新しい用語の紹介 • ユーザーが提供する必要がある名前または値 (変数) • 別の情報ソースの参照 • 一般的な強調
モノスペース	以下のいずれかを示します。 <ul style="list-style-type: none"> • ファイルとディレクトリー • コマンド・プロンプトまたはウィンドウで入力を指示される情報 • 特定のデータ値の例 • システムが画面に表示するテキストの例 • システム・メッセージの例

第 1 部 概要

第 1 章 DB2 Everyplace 製品の概要	3
DB2 Everyplace の紹介	3
DB2 Everyplace ソリューションのコンポーネント	3
DB2 Everyplace モバイル・データベース	4
DB2 Everyplace 同期サーバー	4
DB2 Everyplace 同期クライアント	5
DB2 Everyplace Mobile Application Builder	5
DB2 Everyplace のサンプル・アプリケーション	6
DB2 Everyplace のサンプル・シナリオ	6

第 1 章 DB2 Everyplace 製品の概要

このセクションでは、DB2 Everyplace の概要、DB2 Everyplace ソリューションを構成するコンポーネントの説明、および一般的な DB2 Everyplace シナリオの例を説明します。本セクションには、以下のトピックが含まれています。

- 『DB2 Everyplace の紹介』
- 『DB2 Everyplace ソリューションのコンポーネント』
 - 4 ページの『DB2 Everyplace モバイル・データベース』
 - 4 ページの『DB2 Everyplace 同期サーバー』
 - 5 ページの『DB2 Everyplace 同期クライアント』
 - 5 ページの『DB2 Everyplace Mobile Application Builder』
 - 6 ページの『DB2 Everyplace のサンプル・アプリケーション』
- 6 ページの『DB2 Everyplace のサンプル・シナリオ』

DB2 Everyplace の紹介

DB2 Everyplace は、パーベイシブ・コンピューティングにおける IBM ソリューションの一部です。DB2 Everyplace を使用することによって、モバイル環境を利用する職業に従事しているユーザー (営業担当者、調査官、監査員、フィールド・サービス技術者、医師、不動産業者、および保険査定員など) は、オフィスを離れている場合でも、必要な重要データにアクセスすることができます。

会社などの組織の DB2 エンタープライズ・データをモバイルおよび組み込みデバイスに配布することが可能になりました。DB2 Everyplace で、モバイル・デバイス上のデータベースにアクセスしたり更新することができます。DB2 Everyplace 同期サーバーを使用すれば、モバイル・デバイスのデータを自社内の他のデータ・ソースと同期させることができます。また、ファイル・アダプター機能を使用すると、ファイルやアプリケーションをモバイル・ユーザーに配布できます。

DB2 Everyplace データベースは、モバイル・デバイス上にあるリレーショナル・データベースです。モバイル・デバイスにあるデータにアクセスするために、ラピッド・アプリケーション開発ツール、サポートされている DB2 コール・レベル・インターフェース (CLI) 関数セット、Java Database Connectivity (JDBC) メソッド、または ADO.NET メソッドを使用してアプリケーションを作成することができます。

DB2 Everyplace ソリューションのコンポーネント

DB2 Everyplace ソリューションの主要なフィーチャーおよびコンポーネントは次のとおりです。

- DB2 Everyplace モバイル・データベース。
- DB2 Everyplace 同期サーバー。
- DB2 Everyplace 同期クライアント。

- DB2 Everyplace Mobile Application Builder。
- DB2 Everyplace サンプル・アプリケーション。

DB2 Everyplace モバイル・データベース

このデータベースは、モバイル・デバイスに配置されます。モバイル・データベースは、DB2 Everyplace Database Edition、DB2 Everyplace Enterprise Edition、および DB2 Everyplace Software Development Kit に同梱されています。モバイル・データベースに関連したコンポーネントには、他に以下のものがあります。

- サンプル・アプリケーション (エンジン・サイド)

DB2 Everyplace モバイル・データベースは、以下のオペレーティング・システムで使用できます。

- Palm OS
- Symbian OS
- Windows CE/Pocket PC
- Win32 (Windows[®] 95、Windows[®] 98、Windows[®] NT[®]、Windows[®] 2000[®]、および Windows[®] XP[®])
- QNX Neutrino、Linux、および組み込み Linux デバイス

DB2 Everyplace は MIDP データベースを使用する MIDP モバイル・デバイスもサポートしています。

DB2 Everyplace 同期サーバー

DB2 Everyplace 同期サーバーは、DB2 Everyplace Enterprise Edition に同梱されています。同期サーバーに関連したその他の重要なコンポーネントには以下のものがあります。

- DB2 Everyplace モバイル・デバイス管理センター
- サンプル・アプリケーション (サーバー・サイド)

DB2 Everyplace 同期サーバーと DB2 Everyplace 同期クライアントを使用して、DB2 Everyplace モバイル・デバイスとエンタープライズ・データ・ソースとの間でデータやアプリケーションを同期させることができます。

データ同期は、両方向か、または単一方向にすることができます。データは DB2 Everyplace モバイル・デバイスでも、エンタープライズ・データベースでも更新できます。例えば、DB2 for z/OS データベースのデータのサブセットをモバイル・デバイスの DB2 Everyplace データベースにダウンロードし、データを表示して、変更を加えてから、変更済みのデータを z/OS サーバーに同期させることができます。DB2 Everyplace 同期サーバーは、競合を解決するためのメカニズムも備えています。

DB2 Everyplace 同期サーバーには、似たようなデータ同期のニーズを持つユーザーのグループを対象とする同期サービスを管理し提供するうえで役立つ管理ツールが用意されています。モバイル・デバイス管理センターの詳細については、「DB2 Everyplace 同期サーバー 管理ガイド」を参照してください。

DB2 Everyplace 同期サーバーは、リレーショナル・データと、DB2 Universal Database などの JDBC インターフェースを持つ任意のデータ・ソースとの同期をサポートします。

DB2 Everyplace 同期サーバーは、リレーショナル・データと以下のデータ・ソースとの同期をサポートします。

- DB2 Universal Database for z/OS
- DB2 Universal Database for iSeries
- DB2 Universal Database for Linux, UNIX、および Windows
- JDBC インターフェースを持つすべてのデータ・ソース

DB2 Everyplace 同期クライアント

DB2 Everyplace 同期クライアントは、DB2 Everyplace Enterprise Edition に同梱されています。

モバイル・デバイスで実行される DB2 Everyplace 同期クライアントは、DB2 Everyplace 同期サーバーと共に稼働する複数のアプリケーションで構成されています。このクライアントは、エンタープライズ・リレーショナル・データと、モバイル・デバイス上の DB2 Everyplace モバイル・データベースとの双方向同期を処理します。このモバイル・デバイスは、デバイスへのモバイル・アプリケーションの配布を容易にするために、ファイル・サブスクリプション関連の操作も管理するほか、DB2 データベースに保管されているストアド・プロシージャも実行することができます。

同期クライアントは、以下のオペレーティング・システムで使用できます。

- Palm OS
- Symbian OS
- Windows CE/Pocket PC
- Win32 (Windows® 95、Windows® 98、Windows® NT®、Windows® 2000®、および Windows® XP®)
- QNX Neutrino、Linux、および組み込み Linux デバイス

同期クライアントで用意されているアプリケーション・プログラミング・インターフェース (API) の詳細については、「*DB2 Everyplace アプリケーション開発ガイド*」を参照してください。

DB2 Everyplace Mobile Application Builder

DB2 Everyplace Mobile Application Builder は、Software Development Kit に同梱されています。また、IBM の Web サイトからダウンロードすることもできます。

DB2 Everyplace Mobile Application Builder を使用すると、Palm OS、WinCE、Symbian OS、およびユーザー・インターフェースと Java 仮想マシンをサポートするその他のプラットフォームで、DB2 Everyplace アプリケーションを開発することができます。Mobile Application Builder を使用することで、1 行もコードを書くことなくアプリケーションを作成することができます。Mobile Application Builder の入手方法については、DB2 Everyplace の Web サイトを参照してください。

その他の開発ツールとしては、WebSphere Studio Device Developer、Visual Age Micro Edition、Metrowerks CodeWarrior、および GNU Software Developer's Kit などがあります。

DB2 Everyplace のサンプル・アプリケーション

DB2 Everyplace を使用したアプリケーションの例を示す、サンプル・アプリケーションが用意されています。Visiting Nurse (巡回医療サービス) サンプル・アプリケーションを使用することによって、モバイル・データベースと同期サーバーとの間の双方向同期を素早くテストすることができます。このサンプル・アプリケーションは、同期サーバー上で稼働する部分とモバイル・データベース上で稼働する部分の 2 つの部分から構成されます。このモバイル・データベースのサンプル・アプリケーションは、独立型環境におけるデータベース・エンジンの機能性を実際に示すためのものです。同期サーバーのサンプル・アプリケーションとデータベース・エンジンのサンプル・アプリケーションを共に用いると、DB2 Everyplace の全コンポーネントを呼び出す完全なアプリケーションとして機能します。

IBM Sync も、MDAC に定義されているサブスクリプションの表と同期をとるために DB2 Everyplace 同期クライアント API を使用する方法を示すサンプル・アプリケーションです。

コマンド行プロセッサは、アプリケーション開発ツールです。このツールは、コマンド行インターフェースを持つプラットフォーム上の DB2 Everyplace を使用したサンプル・アプリケーションとして提供されます。コマンド行プロセッサは、モバイル・デバイス上の DB2 Everyplace データベースで使用されます。これは同期サーバーでは使用しません。

DB2 Everyplace がサポートする SQL ステートメントを使用することで、ユーザーは表および索引の作成やドロップ、表の行の削除、挿入、および更新を行うことができます。

サポートされる SQL ステートメントの詳細については、「*DB2 Everyplace アプリケーション開発ガイド*」を参照してください。

DB2 Everyplace のサンプル・シナリオ

保険査定員は、保険金請求の申し立てをした顧客の所有物について損害査定する責任をもちます。多くの保険会社では、保険査定員が請求者の所有資産を実地検分し、所定の用紙に記入して請求が妥当であるか否かを判定し、請求者に支払われる損害額を査定します。保険査定員は、後でオフィスに戻ってから、用紙に記入した内容を会社のコンピューター・システムに手作業で入力しますが、これでは時間と費用がかかります。

DB2 Everyplace アプリケーションが使えるモバイル・デバイスを査定員に持たせることにより、この処理を大幅に合理化できます。モバイル・デバイスを使用することによって、査定員はどこにいても査定のスケジュールや手順、および請求者の保険契約情報にアクセスできます。また、モバイル・デバイス上で査定用紙に記入することも可能です。保険査定員はオフィスに戻った後、自分のモバイル・デバイスにある新しい査定用紙データを会社のエンタープライズ・データベースにアップロードして、会社のコンピューター・システムと同期させることができます。また、

社外にいるときに情報が必要になった場合には、モデムを介して直ちにモバイル・デバイス上のデータを会社のコンピューター・システムと同期させることができます。請求査定プロセスが紙をまったく使用せずに行えるようになるため、保険会社はコストを大幅に削減できます。保険査定員は会社のエンタープライズ・データベースに即時にアクセスできるため、請求も迅速に処理できます。

第 2 部 DB2 Everyplace のインストール

第 2 章 DB2 Everyplace のインストール	11
バージョン 8.1.4 でのマイグレーションに関する考 慮事項	11
DB2 Everyplace のインストール要件	12
DB2 Everyplace Express のインストール要件	13
サーバーへのインストール	15
プリインストール作業	15
Linux でのオペレーティング・システム・パラ メーターの調整	15
Solaris でのオペレーティング・システム・パ ラメーターの調整	16
AIX でのオペレーティング・システム・パラ メーターの調整	17
サーバーへのインストール	17
サーバーへのインストール (Windows の場合)	17
UNIX のサーバーへのインストール	22
サーバーへの DB2 Everyplace Express のインス トール (Windows の場合)	26
サーバーへの DB2 Everyplace Express のインス トール (Linux の場合)	29
モバイル・デバイスへのインストール	31
モバイル・デバイスのインストール	32
Install on Mobile Devices ツールを使用したイン ストール	32
モバイル・デバイスへの手動によるインストール 34	
手作業での DB2 Everyplace ファイルのインス トール	34
Palm OS デバイスへの DB2 Everyplace ファ イルのインストール	34
Windows CE デバイスへのファイルのインスト ール	36
Symbian OS バージョン 6 デバイスへのファ イルのインストール	38
Symbian OS バージョン 7 デバイスへのファ イルのインストール	39
Symbian OS バージョン 7 デバイス・インス トールの検査	40
QNX Neutrino または組み込み Linux モバイ ル・デバイスへのファイルのインストール	41
Sharp Zaurus デバイスへのファイルのインスト ール	43
MIDP をサポートするデバイスへのファイルの インストール	43
Windows 32 ビット版へのファイルのインスト ール	46
Update Tool を使用した同期クライアント・ソフ トウェアの更新	48
DB2 Everyplace Update Tool を使用した同期ク ライアント・ソフトウェアの更新	48
同期サーバーでの DB2 Everyplace Update Tool のセットアップ	49

モバイル・デバイスへの DB2 Everyplace Update Tool のインストール	50
DB2 Everyplace Update Tool エラー・メッセー ジ	52
サーバーでのインストール後の作業	54
UNIX での DB2 Everyplace インスタンスの作成 54	
中間層サーバーへのソース・データベースのマッ ピング	54
レプリケーションの使用可能化	55
サンプルのデータベースとアプリケーションのセ ットアップ	56
同期サーバーのサブレットのテスト	56
IBM WebSphere Application Server で使用する同 期サーバーの構成	58
WebSphere Application Server バージョン 5.0 で の DB2 Everyplace の構成およびインストール	60
WebSphere Application Server バージョン 5.0 での DB2 Everyplace の構成およびインストー ール	61
構成情報の収集	61
WAS インストール・スクリプト	62
インストールおよび構成の概要	63
アプリケーション・サーバーの作成およびイン ストール	64
クラスター環境の作成	65
サーバー・ノードの追加	66
クラスターの作成	67
クラスターへの新規サーバーの追加	67
管理タスク	68
WAS からの DB2 Everyplace のアンインスト ール	69
DB2 Everyplace アプリケーション・サーバー の開始と停止	69
クラスターの削除	70
Web サーバー・プラグインの再生成	71
複数サーバー環境の構成	72
複数サーバー環境の構成	72
サーバー・グループおよびクローン	73
計画の考慮事項およびヒント	74
アプリケーション・サーバーのクローンを作成 するためのセットアップ	74
アプリケーション・サーバーのクローンの作成 構成後のタスク	77
モバイル・デバイスでのインストール後の作業	78

第 2 章 DB2 Everyplace のインストール

この章では、DB2 Everyplace のインストールについての情報を提供します。以下のトピックを扱います。

- 『バージョン 8.1.4 でのマイグレーションに関する考慮事項』
- 12 ページの『DB2 Everyplace のインストール要件』
- 13 ページの『DB2 Everyplace Express のインストール要件』
- 15 ページの『サーバーへのインストール』
- 31 ページの『モバイル・デバイスへのインストール』
- 54 ページの『サーバーでのインストール後の作業』
- 78 ページの『モバイル・デバイスでのインストール後の作業』

バージョン 8.1.4 でのマイグレーションに関する考慮事項

このセクションでは、バージョン 8.1.4 でのマイグレーション問題について説明し、DB2 Everyplace 同期サーバーおよび同期クライアントについて必要な説明を行います。

- 同期サーバーの場合は次のとおりです。

DB2 Everyplace 8.1.4 では、JDBC サブスクリプションの複製をサポートするインフラストラクチャーが異なります。DB2 Everyplace 8.1.4 が正しく機能するには、DB2 Everyplace の前のバージョンで作成した JDBC サブスクリプションをマイグレーションする必要があります。このマイグレーションは、新しくインストールした DB2 Everyplace 同期サーバーを開始する前に行う必要があります。既存の DB2 Everyplace のインストールを DB2 Everyplace 8.1.4 にアップグレードする前に、すべてのミラー・データベースを複製してください。インストールの直前にミラー・データベースの複製を行い、インストールの直後にマイグレーションを行った場合、マイグレーションにはそれほど時間はかかりません。それ以外の場合は、マイグレーションが完了するまでに長い時間がかかる場合があります。DB2 Everyplace 8.1.4 をインストールする前に、すべてのソース・データベース、ミラー・データベース、および DSYCTLDB データベースをバックアップしておくことを強くお勧めします。インストール後、マイグレーションを実行するときに、JDBC サブスクリプション内のソース表はすべて、休止状態にする必要があります。表に対するアクティビティは、マイグレーションが完了すれば、再開してかまいません。

前提条件:

- JDBC サブスクリプション内で参照されるすべてのソース・データベースの JDBC ドライバーが CLASSPATH に確実に含まれていることを確認してください。
- JDBC サブスクリプションに組み込まれているすべての表が休止状態にあることを確認してください。

手順:

この作業は、DB2 Everyplace のインストール中に実行させることができます。インストール・セットアップ・ウィザードでこの作業を実行しないことを選択した場合には、DB2 Everyplace のインストール後に、以下のステップを行う必要があります。

1. 以下のようにして、マイグレーション・ユーティリティを起動します。
 - Windows の場合、`%DSYINSTDIR%\Server\bin\dsyjdbcmigration.bat` を実行する。
 - UNIX の場合、`$DSYINSTDIR/Server/bin/dsyjdbcmigration.sh` を実行する。
2. `%DSYINSTDIR%\Server\logs` または `$DSYINSTDIR/Server/logs` にあるログ・ファイル `dsyjdbcmigration.log` でエラーをチェックします。
3. エラーがあった場合には、エラーを訂正し、ステップ 1 および 2 を繰り返します。問題が解消しない場合は、IBM 担当員にお問い合わせください。

- 同期クライアントの場合は次のとおりです。

手順:

Linux または QNX Neutrino の同期クライアントを使用して以前に同期を行っている場合は、ターゲット・ディレクトリーにある `migrate.sh` を実行して、同期クライアント構成をマイグレーションする必要があります。ターゲット・ディレクトリーは、同期クライアント構成ファイル (`CONFIG1`、`MISC1` など) が保管されている場所です。スクリプトは、単純にファイル名を小文字に変更します。ファイル `migrate.sh` は `/bin` ディレクトリーの中にあります。Linux または QNX Neutrino 8.1.4 の同期クライアントと前の構成ファイル (すべて大文字) を使用して同期を試みると、API 関数 `iscConfigOpen()` は `ISCRTN_Failed` を戻します。

関連したタスク:

- 17 ページの『サーバーへのインストール (Windows の場合)』

DB2 Everyplace のインストール要件

前提条件:

ハードウェア要件:

DB2 Everyplace を使用するためには、システムが以下のハードウェア要件を満たしていなければなりません。

- Intel Pentium III または同等のプロセッサ
- 512 MB のメモリー
- 300 MB の空きディスク・スペース
- 700 MB の空きディスク・スペース (DB2 Universal Database がインストールされていない場合)

ソフトウェア要件:

DB2 Everyplace 同期サーバーを使用するためには、以下のソフトウェアがインストールされている必要があります。

- DB2 Everyplace は、DB2 Universal Database バージョン 7 のフィックスパック 3、フィックスパック 4、フィックスパック 5、フィックスパック 6、フィックス

パック 7、およびフィックスパック 8 をサポートします。Windows、AIX、および Linux の場合は、フィックスパック 5 以降をお勧めします。Solaris の場合は、フィックスパック 7 以降をお勧めします。Windows で DB2 Universal Database がインストールされていない場合、限定された機能を持つ組み込みコピーがインストールされます。

- DB2 Everyplace は、DB2 Universal Database バージョン 8 のフィックスパック 1 からフィックスパック 4 までをサポートします。
- Java Servlet API 2.0 をサポートする Web サーバー。実動用として、IBM WebSphere Application Server バージョン 4.0 フィックスパック 4 以降 (IBM WebSphere Application Server 5.0 を含む。WAS 5.0 を使用している場合にはフィックスパック 2 のインストールが必須) が必要です。DB2 Everyplace のインストール時に、Application Server - Express の限定使用ライセンスがご使用のマシンにインストールされます。
- Palm HotSync などの、ワークステーションとモバイル・デバイス間の接続ソフトウェア
- JDK 1.3.1 (Solaris のみ)

オペレーティング・システム要件:

DB2 Everyplace は以下のオペレーティング・システムで実行することができます。

- DB2 Everyplace 同期サーバーの場合は以下のとおりです。
 - Microsoft Windows 2000、Windows NT、または Windows XP
 - Redhat Linux バージョン 7.3 以降
 - Mandrake バージョン 8.2 以降
 - Solaris バージョン 8
- クライアントの場合は以下のとおりです。
 - Win32 モバイル・デバイス
 - Palm OS モバイル・デバイス
 - Symbian6 および Symbian7 モバイル・デバイス
 - WinCE / PocketPC モバイル・デバイス
 - QNX Neutrino モバイル・デバイス
 - 7.0 Windows CE バージョン 3.0、4.0
 - Linux with GCC 3.2.1 および GLib 2.2 for x86
 - Monta Vista Linux 2.1 および 3.0 for ARM

関連したタスク:

- 11 ページの『バージョン 8.1.4 でのマイグレーションに関する考慮事項』
- 56 ページの『同期サーバーのサブレットのテスト』

DB2 Everyplace Express のインストール要件

前提条件:

ハードウェア要件:

DB2 Everyplace を使用するためには、システムが以下のハードウェア要件を満たしていなければなりません。

- Intel Pentium III または同等のプロセッサ (Windows および Linux)
- 512 MB のメモリー (IBM WebSphere Application Server を使用している場合は 1 GB のメモリーを推奨します)
- 300 MB の空きディスク・スペース (ご使用のコンピューターに DB2 Universal Database がインストールされていない場合は、700 MB の空きディスク・スペース)

ソフトウェア要件:

DB2 Everyplace 同期サーバーを使用するためには、以下のソフトウェアがインストールされている必要があります。

- DB2 Everyplace は、DB2 Universal Database バージョン 7.2 フィックスパック 5 以降をサポートします。

注: DB2 Universal Database がインストールされていない場合、DB2 Everyplace 8.1.4 セットアップ・ウィザードによって、DB2 Universal Database Express Edition の組み込みバージョンが DB2 Everyplace で使用するためにインストールされます。

- Java Servlet API 2.0 をサポートする Web サーバー。DB2 Everyplace をインストールするときに、Application Server - Express の組み込みバージョンがシステムにインストールされます。WebSphere Application Server バージョン 5 環境で DB2 Everyplace をアプリケーション・サーバーとして実行する場合は、フィックスパック 2 をインストールする必要があります。
- ワークステーションとモバイル・デバイス間の接続ソフトウェア (Palm HotSync など)。この接続ソフトウェアは、モバイル・デバイスでの DB2 Everyplace データベース・エンジンおよび同期クライアントのインストールに必要です。

オペレーティング・システム要件:

DB2 Everyplace は以下のオペレーティング・システムで実行することができます。

- DB2 Everyplace 同期サーバーの場合は以下のとおりです。
 - Microsoft Windows 2000、Windows NT、または Windows XP
 - Redhat Linux バージョン 7.3 以降
 - Mandrake バージョン 8.2 以降
- クライアントの場合は以下のとおりです。
 - Win32 モバイル・デバイス
 - Palm OS モバイル・デバイス
 - Symbian6 および Symbian7 モバイル・デバイス
 - WinCE / PocketPC モバイル・デバイス
 - Linux モバイル・デバイス
 - QNX Neutrino モバイル・デバイス

関連したタスク:

- 56 ページの『同期サーバーのサーブレットのテスト』

サーバーへのインストール

この章では、DB2 Everyplace をサーバーにインストールするための情報を提供します。以下のトピックを扱います。

- 『プリインストール作業』
- 17 ページの『サーバーへのインストール (Windows の場合)』
- 22 ページの『UNIX のサーバーへのインストール』
- 26 ページの『サーバーへの DB2 Everyplace Express のインストール (Windows の場合)』
- 29 ページの『サーバーへの DB2 Everyplace Express のインストール (Linux の場合)』

プリインストール作業

この章では、DB2 Everyplace をサーバーにインストールする前に実行する必要があるプリインストール・ステップについての情報を提供します。以下のトピックを扱います。

- 『Linux でのオペレーティング・システム・パラメーターの調整』
- 16 ページの『Solaris でのオペレーティング・システム・パラメーターの調整』
- 17 ページの『AIX でのオペレーティング・システム・パラメーターの調整』

Linux でのオペレーティング・システム・パラメーターの調整

DB2 Everyplace で最も効率良く作動するようにするには、DB2 Universal Database 内のシステム・パラメーターを調整する必要があります。このシステム・パラメーターの調整を行わないと、Linux 上のデータベースに新規の接続を作成できなくなる場合があります。カーネル・パラメーターの調整を行うことをお勧めします。

注: 32 ビットの DB2 Universal Database インスタンスのみがサポートされます。

前提条件:

ログイン・プロファイルを変更して、以下を組み込みます。

```
export DISPLAY=<workstation>:0.0
```

ここで、<workstation> は、モバイル・デバイス管理センターを使用しようとしている UNIX ワークステーションです。

手順:

カーネル 2.4 以降を実行している Linux システムでは、コマンド行で以下のコマンドを root ユーザーとして発行します。

- `sysctl -w kernel.msgmni=2048`
- `sysctl -w kernel.shmmax=1073741824`
- `sysctl -w fs.file-max=32768`
- `sysctl -w kernel.sem="512 32000 32 1024"`
- `sysctl -w kernel.threads-max=20480`

上記のコマンドを自動的に実行するには、ファイル `/etc/rc.d/rc.local` を編集し、上記のコマンドをファイルの末尾に置きます。これ以降、システムをブートするたびに、値が自動的に設定されます。追加の推奨される設定については、実行しているフィックスパックの Linux 7.2 リリース情報を参照してください。

関連したタスク:

- 54 ページの『UNIX での DB2 Everyplace インスタンスの作成』
- 『Solaris でのオペレーティング・システム・パラメーターの調整』
- 17 ページの『AIX でのオペレーティング・システム・パラメーターの調整』

Solaris でのオペレーティング・システム・パラメーターの調整

DB2 Everyplace で最も効率良く作動するようにするには、DB2 Universal Database 内のシステム・パラメーターを調整する必要があります。このシステム・パラメーターの調整を行わないと、予期しない中断が起きる可能性があります。カーネル・パラメーターの調整を行うことをお勧めします。

注: 32 ビットの DB2 Universal Database インスタンスのみがサポートされます。

前提条件:

ログイン・プロファイルを変更して、以下を組み込みます。

```
export DISPLAY=<workstation>:0.0
```

ここで、`<workstation>` は、モバイル・デバイス管理センターを使用しようとしている UNIX ワークステーションです。

手順:

Solaris システムの場合、デフォルトのシステム・カーネル・パラメーターでは DB2 Universal Database および DB2 Everyplace を実行するには不十分です。これらの値は、ファイル `/etc/system` で追加または編集することができます。

上記の値を設定する形式は、以下のとおりです。

```
set parameter_name = value
```

以下の DB2 Universal Database のパラメーターは、さらに調整を行って、最小値を組み込む必要があります。

- `set shmsys:shminfo_shmseg = 256`
- `set semsys:seminfo_semume = 256`

カーネル・パラメーターを変更した後、システムをリブートしてカーネルの設定を有効にしてください。

関連したタスク:

- 54 ページの『UNIX での DB2 Everyplace インスタンスの作成』
- 15 ページの『Linux でのオペレーティング・システム・パラメーターの調整』
- 17 ページの『AIX でのオペレーティング・システム・パラメーターの調整』

AIX でのオペレーティング・システム・パラメーターの調整

DB2 Everyplace で最も効率良く作動するようにするには、DB2 Universal Database 内のシステム・パラメーターを調整する必要があります。このシステム・パラメーターの調整を行わないと、データベースに新規の接続を作成できなくなる場合があります。拡張共用メモリー・セグメントを使用可能にしてください。

注: 32 ビットの DB2 Universal Database インスタンスのみがサポートされます。

前提条件:

ログイン・プロファイルを変更して、以下を組み込みます。

```
export DISPLAY=<workstation>:0.0
```

ここで、<workstation> は、モバイル・デバイス管理センターを使用しようとしている UNIX ワークステーションです。

手順:

DB2 Everyplace を実行しているそれぞれの DB2 インスタンスごとに、以下のようになります。

1. ログイン・プロファイル (ほとんどの場合 /home/<username>/.&profile) を変更して、以下を組み込みます。

```
export EXTSHM=0N
```
2. ユーザー・シェルを終了します。
3. ユーザーとしてログインし (変更内容を有効にするため)、新規のシェルをオープンします。
4. シェル・プロンプトから、以下のコマンドを実行します。

```
db2set DB2ENVLIST=EXTSHM
```
5. DB2 Universal Database インスタンスを再始動します。

関連したタスク:

- 54 ページの『UNIX での DB2 Everyplace インスタンスの作成』
- 15 ページの『Linux でのオペレーティング・システム・パラメーターの調整』
- 16 ページの『Solaris でのオペレーティング・システム・パラメーターの調整』

サーバーへのインストール

DB2 Everyplace は、サーバーと、サーバーに接続する各モバイル・デバイスまたはエミュレーターにインストールする必要があります。

関連したタスク:

- 32 ページの『モバイル・デバイスのインストール』

サーバーへのインストール (Windows の場合)

以下のステップに従って、DB2 Everyplace を Windows サーバーにインストールします。

手順:

1. セットアップ・プログラムを実行します。

CD-ROM からインストールしている場合は、以下を行います。

- Windows の場合、CD-ROM ドライブに DB2 Everyplace CD-ROM を挿入します。DB2 Everyplace インストーラーがオープンします。DB2 Everyplace インストーラーがオープンしない場合は、DB2 Everyplace CD-ROM にある DB2Everyplace.exe ファイルをダブルクリックしてインストールを開始してください。

DB2 Everyplace Web サイトからインストールしている場合は、以下を行います。

- Windows の場合、DB2Everyplace.exe を実行します。
「ようこそ (Welcome)」パネルがオープンします。
2. 「次へ」をクリックして、「インストールの注意事項 (Install Notes)」を表示します。「インストールの注意事項 (Install Notes)」を読んだ後、「次へ」をクリックして「プログラムのご使用条件」を表示します。「ご使用条件」に同意する場合は、「次へ」をクリックして「宛先ディレクトリー (Destination directory)」パネルをオープンします。
 3. DB2 Everyplace をインストールしたいディレクトリーを入力するか、「ブラウズ」をクリックしてディレクトリーを選択します。宛先ディレクトリーを選択して「次へ」をクリックします。「インストール・タイプの選択 (Select the installation type)」パネルがオープンします。
 4. 以下のインストール・セットアップ・タイプを選択します。
 - 標準 (Typical): デフォルト値を使用する標準構成を使用して、ほとんどの機能およびフィーチャーと共に DB2 Everyplace をインストールしたい、ほとんどのユーザーの場合。
 - カスタム (Custom): インストールするフィーチャーを選択したい上級ユーザーの場合。
 - 複数サーバー (Multiple Server): 高可用性およびロード・バランシング環境用に、DB2 Everyplace を複数のサーバーにインストールする場合。
 - 制御データベースのみ (Control Database only): DB2 Everyplace 制御データベースのみをインストールする場合。
 - DB2 Everyplace 同期サーバーのみ (DB2 Everyplace Sync Server only): DB2 Everyplace 同期サーバーのみをインストールする場合。「次へ」をクリックします。
 5. 「標準 (Typical)」を選択した場合、DB2 Everyplace セットアップ・ウィザードは、以下のことを行います。
 - インストール中に応答ファイルを作成しません。
 - DB2 Everyplace サンプル・データベースとサーバー・サンプル・アプリケーションを作成し、同期のデモンストレーションのために事前構成された Windows クライアント・アプリケーションをインストールします。
 - インストールの終わりに、DB2 Everyplace 同期サーバーの「ウィンドウ・サービス (Windows Service)」を開始します。ステップ 10 (20 ページ) に進みます。
 6. 「カスタム (Custom)」インストール・セットアップ・タイプを選択した場合は、以下を行います。

- a. インストールしたいフィーチャーを選択できるパネルがオープンします。「次へ」をクリックします。「インストール・アクションの選択 (Select install actions)」パネルがオープンします。
- b. 使用可能にしたいインストール・アクションの横にあるチェック・ボックスを選択します。両方のオプションを選択できますが、少なくとも 1 つは選択する必要があります。インストール・アクションを選択しないと、エラーを受け取ります。セットアップ・ウィザードを使用して DB2 Everyplace をコンピューターにインストールするか、または応答ファイルを生成するかを指定します。応答ファイルは、対話式インストールで必要になるユーザー応答を記録するために使用されます。これは、別のコンピューター上でインストールを自動化するために使用できます。適切なインストール・アクションを選択して「次へ」をクリックします。「サンプル・アクションの選択 (Select sample actions)」パネルがオープンします。
- c. 使用可能にしたいサンプル・アクションの横にあるチェック・ボックスを選択します。セットアップ・ウィザードを使用して、DB2 Everyplace サンプル・データベースおよび Visiting Nurse サンプル・アプリケーションを作成するか、または DB2 Everyplace 同期サーバーとの同期のデモンストレーション用に事前構成された Windows クライアントをインストールするかを指定できます。「次へ」をクリックします。「サービス・アクションの選択 (Select Service action)」パネルがオープンします。
- d. インストールの終了時に、セットアップ・ウィザードで DB2 Everyplace 同期サーバーの「ウィンドウ・サービス (Windows Service)」を開始したい場合は、チェック・ボックスを選択します。「次へ」をクリックします。

ステップ 10 (20 ページ) に進みます。

7. 「複数サーバー (Multiple server)」を選択した場合は、以下を行います。
 - a. インストールしたいフィーチャーを選択できるパネルがオープンします。「次へ」をクリックしてください。「インストール・アクションの選択 (Select Installation actions)」パネルがオープンします。
 - b. 使用可能にしたいインストール・アクションの横にあるチェック・ボックスを選択します。両方のオプションを選択できますが、少なくとも 1 つは選択する必要があります。インストール・アクションを選択しないと、エラーを受け取ります。セットアップ・ウィザードを使用して DB2 Everyplace をコンピューターにインストールするか、または応答ファイルを生成するかを指定します。応答ファイルは、対話式インストールで必要になるユーザー応答を記録するために使用されます。これは、別のコンピューター上でインストールを自動化するために使用できます。適切なインストール・アクションを選択して「次へ」をクリックします。「サンプル・アクションの選択 (Select sample actions)」パネルがオープンします。
 - c. 使用可能にしたいサンプル・アクションの横にあるチェック・ボックスを選択します。セットアップ・ウィザードを使用して、DB2 Everyplace サンプル・データベースおよび Visiting Nurse サンプル・アプリケーションを作成するか、または DB2 Everyplace 同期サーバーとの同期のデモンストレーション用に事前構成された Windows クライアントをインストールするかを指定できます。「次へ」をクリックしてください。「制御データベースの選択 (Select Control database)」アクション・パネルがオープンします。

- d. パネルがオープンし、セットアップ・ウィザードを使用してこのコンピューターに制御データベースを作成するかどうかを選択できます。「はい」または「いいえ」を選択して、「次へ」をクリックします。このサーバーに制御データベースを作成しないことを選択した場合は、「リモート制御データベース情報 (Remote Control database information)」パネルがオープンします。このサーバー上に制御データベースを作成することを選択した場合は、ステップ 10 に進みます。
 - e. リモート制御データベースが存在するマシンのホスト名、DB2 インスタンスの接続ポート、リモート制御データベースをカタログするためにローカル・ノード・ディレクトリー内に作成されるノードの名前、リモート制御データベースに接続するためのユーザー名とパスワードを入力します。「次へ」をクリックしてください。ステップ 10 に進みます。
8. 「制御データベースのみ (Control Database only)」を選択した場合は、以下を行います。

ステップ 13 (21 ページ) に進みます。
 9. 「DB2 Everyplace 同期サーバーのみ (DB2 Everyplace Sync Server only)」を選択した場合は、以下を行います。
 - a. インストールしたいフィーチャーを選択できるパネルがオープンします。「次へ」をクリックします。「インストール・アクションの選択 (Select install actions)」パネルがオープンします。
 - b. 使用可能にしたいインストール・アクションの横にあるチェック・ボックスを選択します。両方のオプションを選択できますが、少なくとも 1 つは選択する必要があります。インストール・アクションを選択しないと、エラーを受け取ります。セットアップ・ウィザードを使用して DB2 Everyplace をコンピューターにインストールするか、または応答ファイルを生成するかを指定します。応答ファイルは、対話式インストールで必要になるユーザー応答を記録するために使用されます。これは、別のコンピューター上でインストールを自動化するために使用できます。適切なインストール・アクションを選択して「次へ」をクリックします。「サービス・アクションの選択 (Select service action)」パネルがオープンします。
 - c. インストールの終了時に、セットアップ・ウィザードで DB2 Everyplace 同期サーバーの「ウィンドウ・サービス (Windows Service)」を開始したい場合は、チェック・ボックスを選択します。「次へ」をクリックします。「リモート制御データベース情報 (Remote Control database information)」パネルがオープンします。
 - d. リモート制御データベースが存在するマシンのホスト名、DB2 インスタンスの接続ポート、リモート制御データベースをカタログするためにローカル・ノード・ディレクトリー内に作成されるノードの名前、およびリモート制御データベースに接続するためのユーザー名とパスワードを入力します。「次へ」をクリックします。14 (21 ページ) に進みます。
 10. コンピューターに DB2 Universal Database がインストールされていない場合、通知パネルがオープンします。DB2 Universal Database がすでにコンピューターにインストールされている場合は、ステップ 11 (21 ページ) に進みます。
 - a. DB2 Universal Database の組み込みバージョンをインストールしたいディレクトリーを指定する必要があります。ディレクトリー名を入力するか、また

は「ブラウズ」をクリックしてディレクトリー名を選択します。ディレクトリーの指定後、「次へ」をクリックします。

- b. DB2 UDB Database Administration Server のユーザー情報を指定する必要があります。既存の管理ユーザーを使用するか、またはご使用のコンピューターで作成する新規ユーザーを指定できます。DB2 Everyplace 同期サーバーと同じ認証情報を使用する場合は、チェック・ボックスを選択してください。「次へ」をクリックします。チェック・ボックスを選択した場合、ステップ 14 に進みます。
11. 「JDBC マイグレーション (JDBC migration)」パネルがオープンします。DB2 Everyplace のインストールの終わりに JDBC サブスクリプションのマイグレーションを行いたい場合は「はい」を選択します。マイグレーション・プロセスでは、データベースが JDBC サブスクリプションで使ったソース・データベースがマイグレーション・プロセス中にアクティブである必要があります。さらに、11 ページの『バージョン 8.1.4 でのマイグレーションに関する考慮事項』にリストされたステップを実行する必要があります。「いいえ」を選択した場合、DB2 Everyplace 同期サーバーを始動する前に JDBC サブスクリプションのマイグレーションを行う必要があります。「次へ」をクリックします。「ユーザー・リセット・アクションの選択 (Select the user reset action)」パネルがオープンします。
12. このパネルには、終了していない同期セッションまたは取り消された同期を持つユーザーがリストされています。DB2 Everyplace がメッセージ保管表のマイグレーションを行うと、この表内のデータは削除されます。終了していない同期セッションを持つユーザーは、DB2 Everyplace がバージョン 8.1.4 にマイグレーションされた後に再び同期化を試みると、エラーを受け取ります。このエラーを回避するには、ユーザーをリセットする必要があります。インストールの終わりにユーザーをリセットしたい場合には、「はい」を選択してください。「次へ」をクリックします。
13. 「DB2 UDB ログイン情報 (DB2 UDB login information)」パネルがオープンします。DB2 Everyplace 同期サーバーが DB2 UDB DAS にログオンするために使用する認証情報を入力してください。必要な情報を指定して「次へ」をクリックします。
14. 「プリインストール・サマリー (Pre-Install summary)」パネルがオープンし、コンピューターにインストールされるフィーチャーと DB2 Everyplace 同期サーバーの構成情報がリストされます。組み込み Application Server の構成情報もリストされます。このパネルにリストされたサーバー・ポートと SSL ポートは、DB2 Everyplace 同期サーバーとの同期化のために、クライアントによって使用されます。プリインストール・サマリーを読んだ後、「次へ」をクリックします。
15. インストールが開始され、インストールの進行状況が進行状況表示バーで表示されます。

注: 以下のリストは、標準インストール・タイプにのみ適用されます。その他のインストール・タイプでは、インストール・セットアップ・ウィザードがこれらのタスクのサブセットを実行します。

標準インストール・タイプのインストールでは、インストール・セットアップ・ウィザードが以下を行います。

- 以下をインストールします。

- DB2 Universal Database の組み込みバージョン (DB2 UDB がインストールされていない場合)。インストールが正常に完了しなかった場合、セットアップ・ウィザードはエラー・ログをオープンして打ち切られます。DB2 UDB の組み込みバージョンのインストールが正常終了した場合、セットアップ・ウィザードは続行されます。
 - DB2 Everyplace。このインストール中に、選択されたセットアップ・タイプとフィーチャーのファイルが、事前に指定された宛先ディレクトリーにコピーされます。
 - Application Server の組み込みバージョン。
 - ポストインストール構成タスクを実行します。これには以下が含まれます。
 - モバイル・デバイス管理センターのクラスパスの更新 (DB2 Universal Database バージョン 8 を使用している場合)
 - DB2 Everyplace 同期サーバー制御データベースの作成
 - DB2 Everyplace サンプル・データベースの作成
 - サーバー・サンプル・アプリケーションの作成
 - DB2 Everyplace 同期サーバーの「ウィンドウ・サービス (Windows Service)」を開始します。
 - 「ポストインストール・サマリー (post-install summary)」パネルがオープンします。このパネルには、ポストインストール検査についての指示が含まれています。インストールした DB2 Everyplace 同期サーバーと同期する方法も提示されます。情報を読んだ後、「完了」をクリックします。
16. おめでとうございます! これで、DB2 Everyplace が正常にインストールされました。

関連したタスク:

- 11 ページの『バージョン 8.1.4 でのマイグレーションに関する考慮事項』
- 56 ページの『同期サーバーのサブレットのテスト』

UNIX のサーバーへのインストール

以下のステップに従って、UNIX サーバーに DB2 Everyplace をインストールします。

手順:

1. セットアップ・プログラム DB2Everyplace.bin を root ユーザーとして実行します。「ようこそ (Welcome)」パネルがオープンします。
2. 「次へ」をクリックして、「インストールの注意事項 (Install Notes)」を表示します。「インストールの注意事項 (Install Notes)」を読んだ後、「次へ」をクリックして「プログラムのご使用条件」を表示します。ご使用条件に同意する場合は、「次へ」をクリックして「インストール・タイプの選択 (Select the installation type)」をオープンします。
3. 以下のインストール・セットアップ・タイプを選択します。
 - 標準 (Typical): デフォルト値を使用する標準構成を使用して、ほとんどの機能およびフィーチャーと共に DB2 Everyplace をインストールしたい、ほとんどのユーザーの場合。

- カスタム (Custom): インストールするフィーチャーを選択したい上級ユーザーの場合。
- 複数サーバー (Multiple Server): 高可用性およびロード・バランシング環境用に、DB2 Everyplace を複数のサーバーにインストールする場合。
- 制御データベースのみ (Control Database only): DB2 Everyplace 制御データベースのみをインストールする場合。
- DB2 Everyplace 同期サーバーのみ (DB2 Everyplace Sync Server only): DB2 Everyplace 同期サーバーのみをインストールする場合。

「次へ」をクリックします。

4. 「標準 (Typical)」を選択した場合、DB2 Everyplace セットアップ・ウィザードは、以下のことを行います。

- インストール中に応答ファイルを作成しません。
- DB2 Everyplace 同期サーバー・インスタンスを作成し、DB2 Everyplace サンプル・データベースとサーバー・サンプル・アプリケーションを作成します。

ステップ 10 (25 ページ) に進みます。

5. 「カスタム (Custom)」インストール・セットアップ・タイプを選択した場合は、以下を行います。

- a. インストールしたいフィーチャーを選択できるパネルがオープンします。「次へ」をクリックします。「インストール・アクションの選択 (Select install actions)」パネルがオープンします。
- b. 使用可能にしたいインストール・アクションの横にあるチェック・ボックスを選択します。両方のオプションを選択できますが、少なくとも 1 つは選択する必要があります。インストール・アクションを選択しないと、エラーを受け取ります。セットアップ・ウィザードを使用して DB2 Everyplace をコンピューターにインストールするか、または応答ファイルを生成するかを指定します。応答ファイルは、対話式インストールで必要になるユーザー応答を記録するために使用されます。これは、別のコンピューター上でインストールを自動化するために使用できます。適切なインストール・アクションを選択して「次へ」をクリックします。「UNIX ポストインストール・アクションの選択 (Select UNIX post install actions)」パネルがオープンします。
- c. 使用可能にしたいポストインストール・アクションの横にあるチェック・ボックスを選択します。セットアップ・ウィザードで、DB2 Everyplace 同期サーバー・インスタンスを作成するか、または DB2 Everyplace サンプル・データベースおよび Visiting Nurse (巡回医療サービス) サーバー・サンプル・アプリケーションを作成するかどうかを指定できます。「次へ」をクリックします。

6. 「複数サーバー (Multiple server)」を選択した場合は、以下を行います。

- a. インストールしたいフィーチャーを選択できるパネルがオープンします。「次へ」をクリックします。「インストール・アクションの選択 (Select install actions)」パネルがオープンします。
- b. 使用可能にしたいインストール・アクションの横にあるチェック・ボックスを選択します。両方のオプションを選択できますが、少なくとも 1 つは選択する必要があります。インストール・アクションを選択しないと、エラーを受け取ります。セットアップ・ウィザードを使用して DB2 Everyplace を

コンピューターにインストールするか、または応答ファイルを生成するかを指定します。応答ファイルは、対話式インストールで必要になるユーザー応答を記録するために使用されます。これは、別のコンピューター上でインストールを自動化するために使用できます。適切なインストール・アクションを選択して「次へ」をクリックします。「UNIX ポストインストール・アクションの選択 (Select UNIX post install actions)」パネルがオープンします。

- c. 使用可能にしたいポストインストール・アクションの横にあるチェック・ボックスを選択します。セットアップ・ウィザードで、DB2 Everyplace 同期サーバー・インスタンスを作成するかどうかを指定できます。また、この DB2 Everyplace 同期サーバー・インスタンスに対して制御データベースをセットアップ・ウィザードで作成するかどうかも指定できます。さらに、作成中の DB2 Everyplace 同期サーバー・インスタンスに対して DB2 Everyplace サンプル・データベースおよび Visiting Nurse (巡回医療サービス) サーバー・サンプル・アプリケーションをセットアップ・ウィザードで作成するかどうかも指定できます。適切なインストール後アクションを選択して「次へ」をクリックします。
 - d. DB2 Everyplace 同期サーバー・インスタンスに対して DB2 Everyplace 同期サーバー制御データベースを作成しないことを選択した場合は、「リモート制御データベース情報 (Remote control database information)」パネルがオープンします。制御データベースのホストとなるリモート・マシンのホスト名、DB2 インスタンスの接続ポート、およびリモート制御データベースをカタログするために作成するローカル・ノードの名前を入力してください。「次へ」をクリックして、ステップ 9 (25 ページ) に進みます。
7. 「制御データベースのみ (Control Database only)」を選択した場合は、以下を行います。
- ステップ 11 (25 ページ) に進みます。
8. 「DB2 Everyplace 同期サーバーのみ (DB2 Everyplace Sync Server only)」を選択した場合は、以下を行います。
- a. インストールしたいフィーチャーを選択できるパネルがオープンします。「次へ」をクリックすると、「インストール・アクションの選択 (Select install actions)」パネルがオープンします。
 - b. 使用可能にしたいインストール・アクションの横にあるチェック・ボックスを選択します。両方のオプションを選択できますが、少なくとも 1 つは選択する必要があります。インストール・アクションを選択しないと、エラーを受け取ります。セットアップ・ウィザードを使用して DB2 Everyplace をコンピューターにインストールするか、または応答ファイルを生成するかを指定します。応答ファイルは、対話式インストールで必要になるユーザー応答を記録するために使用されます。これは、別のコンピューター上でインストールを自動化するために使用できます。適切なインストール・アクションを選択して「次へ」をクリックします。「UNIX ポストインストール・アクションの選択 (Select UNIX post install actions)」パネルがオープンします。
 - c. 使用可能にしたいポストインストール・アクションの横にあるチェック・ボックスを選択します。セットアップ・ウィザードで、DB2 Everyplace 同期サーバー・インスタンスを作成するかどうかを指定できます。「次へ」をクリックします。

- d. 「DB2 Everyplace 同期サーバー・インスタンス所有者のユーザー情報を設定 (Set the user information for the DB2 Everyplace Sync Server instance owner)」パネルがオープンします。ユーザー名、パスワード、および DB2 Everyplace 同期サーバー・インスタンスのロケールを入力します。必要な情報を指定して「次へ」をクリックします。「リモート制御データベース情報 (Remote Control database information)」パネルがオープンします。
 - e. リモート制御データベースが存在するマシンのホスト名、DB2 インスタンスの接続ポート、リモート制御データベースをカタログするためにローカル・ノード・ディレクトリー内に作成されるノードの名前、リモート制御データベースに接続するためのユーザー名とパスワードを入力します。「次へ」をクリックして、ステップ 12 (26 ページ) に進みます。
9. コンピューターに DB2 Universal Database がインストールされていない場合、通知パネルがオープンします。DB2 Universal Database をコンピューターにすでにインストールしている場合は、ステップ 6 に進みます。
- a. DB2 Database Administration Server インスタンスのユーザー情報を指定する必要があります。ユーザー名、パスワード、1 次グループ名、およびユーザーのホーム・ディレクトリーを入力してください。「次へ」をクリックします。
 - b. DB2 インスタンス所有者のユーザー情報を指定する必要があります。ユーザー名、パスワード、1 次グループ名、およびユーザーのホーム・ディレクトリーを入力してください。「次へ」をクリックします。
 - c. DB2 fenced ユーザーのユーザー情報を指定する必要があります。ユーザー名、パスワード、1 次グループ名、およびユーザーのホーム・ディレクトリーを入力してください。「次へ」をクリックします。
10. 「同期サーバー・インスタンスのマイグレーション (Sync Server instance migration)」パネルがオープンします。セットアップ・ウィザードで既存の DB2 Everyplace 同期サーバー・インスタンスの JDBC サブスクリプションをマイグレーションしたい場合は、「はい」を選択します。インストールの終了時にセットアップ・ウィザードでユーザーをリセットしたい場合は、「はい」を選択します。
- このように選択する理由は、以下のとおりです。
- DB2 Everyplace インスタンスに定義された JDBC サブスクリプションは、DB2 Everyplace 同期サーバーを開始する前に移行する必要があります。詳しくは、11 ページの『バージョン 8.1.4 でのマイグレーションに関する考慮事項』を参照してください。
 - DB2 Everyplace がメッセージ保管表のマイグレーションを行うと、この表内のデータは削除される。同期セッションが完了していないユーザーが、DB2 Everyplace がバージョン 8.1.4 にマイグレーションされた後で再び同期化しようとする、エラーを受け取ります。このエラーを回避するには、ユーザーをリセットする必要があります。
11. 「DB2 Everyplace 同期サーバー・インスタンス所有者のユーザー情報を設定 (Set the user information for the DB2 Everyplace Sync Server instance owner)」パネルがオープンします。ユーザー名、パスワード、および DB2 Everyplace 同期サーバー・インスタンスのロケールを入力してください。必要な情報を指定して「次へ」をクリックします。

12. 「プリインストール・サマリー (Pre-Install summary)」パネルがオープンし、コンピュータにインストールされるフィーチャーと DB2 Everyplace 同期サーバーの構成情報がリストされます。また、組み込み Application Server - Express の構成情報もリストされます。このパネルにリストされたサーバー・ポートと SSL ポートは、DB2 Everyplace 同期サーバーとの同期化のために、クライアントによって使用されます。プリインストール・サマリーを読んだ後、「次へ」をクリックします。
13. インストールが開始され、インストールの進行状況が進行状況表示バーで表示されます。インストール時に、インストール・セットアップ・ウィザードでは、以下のことを行います。
 - 以下をインストールします。
 - DB2 Universal Database の組み込みバージョン (DB2 UDB がインストールされていない場合)。インストールが正常に完了しなかった場合、セットアップ・ウィザードはエラー・ログをオープンして打ち切られます。DB2 Universal Database の組み込みバージョンのインストールが正常終了した場合、セットアップ・ウィザードは続行されます。
 - DB2 Everyplace。このインストール中に、選択されたセットアップ・タイプとフィーチャーのファイルが、事前に指定された宛先ディレクトリーにコピーされます。
 - Application Server - Express の組み込みバージョン。
 - ポストインストール構成タスクを実行します。これには以下が含まれます。
 - モバイル・デバイス管理センターのクラスパスの更新 (DB2 Universal Database バージョン 8 を使用している場合)
 - DB2 Everyplace 同期サーバー制御データベースの作成
 - DB2 Everyplace サンプル・データベースの作成
 - サーバー・サンプル・アプリケーションの作成
 - 「ポストインストール・サマリー (post-install summary)」パネルがオープンします。このパネルには、ポストインストール検査についての指示が含まれています。インストールした DB2 Everyplace 同期サーバーと同期する方法も提示されます。情報を読んだ後、「完了」をクリックします。
14. おめでとうございます! これで、DB2 Everyplace が正常にインストールされました。

関連したタスク:

- 11 ページの『バージョン 8.1.4 でのマイグレーションに関する考慮事項』
- 56 ページの『同期サーバーのサブレットのテスト』

サーバーへの DB2 Everyplace Express のインストール (Windows の場合)

以下のステップに従って、DB2 Everyplace Express を Windows サーバーにインストールします。

手順:

1. セットアップ・プログラムを実行します。

CD-ROM からインストールしている場合は、以下を行います。

- Windows の場合、CD-ROM ドライブに DB2 Everyplace CD-ROM を挿入します。DB2 Everyplace インストーラーがオープンします。DB2 Everyplace インストーラーがオープンしない場合は、DB2 Everyplace CD-ROM にある DB2Everyplace.exe ファイルをダブルクリックしてインストールを開始してください。

DB2 Everyplace Web サイトからインストールしている場合は、以下を行います。

- Windows の場合、DB2Everyplace.exe を実行します。
2. 「次へ」をクリックして、「インストールの注意事項 (Install Notes)」を表示します。「インストールの注意事項 (Install Notes)」を読んだ後、「次へ」をクリックして「プログラムのご使用条件」を表示します。「ご使用条件」に同意する場合は、「次へ」をクリックして「宛先ディレクトリー (Destination directory)」パネルをオープンします。
 3. DB2 Everyplace Express をインストールしたいディレクトリーを入力するか、または「ブラウズ」をクリックしてディレクトリーを選択します。宛先ディレクトリーを選択して「次へ」をクリックします。「インストール・タイプの選択 (Select the installation type)」ウィンドウがオープンします。
 4. 以下のインストール・セットアップ・タイプを選択します。
 - 標準 (Typical): デフォルト値を使用する標準構成を使用して、ほとんどの機能およびフィーチャーと共に DB2 Everyplace Express Edition をインストールしたい、ほとんどのユーザーの場合。
 - カスタム (Custom): インストールするフィーチャーを選択したい上級ユーザーの場合。「次へ」をクリックします。
 5. 「カスタム (Custom)」インストール・セットアップ・タイプを選択した場合は、以下を行います。
 - a. インストールしたいフィーチャーを選択できるパネルがオープンします。「次へ」をクリックします。「インストール・アクションの選択 (Select install actions)」パネルがオープンします。
 - b. 使用可能にしたいインストール・アクションの横にあるチェック・ボックスを選択します。両方のオプションを選択できますが、少なくとも 1 つは選択する必要があります。インストール・アクションを選択しないと、エラーを受け取ります。セットアップ・ウィザードを使用して DB2 Everyplace Express をコンピューターにインストールするか、または応答ファイルを生成するかを指定します。応答ファイルは、対話式インストールで必要になるユーザー応答を記録するために使用されます。これは、別のコンピューター上でインストールを自動化するために使用できます。適切なインストール・アクションを選択して「次へ」をクリックします。「サンプル・アクションの選択 (Select sample actions)」パネルがオープンします。
 - c. 使用可能にしたいサンプル・アクションの横にあるチェック・ボックスを選択します。セットアップ・ウィザードを使用して、DB2 Everyplace サンプル・データベースおよび Visiting Nurse サンプル・アプリケーションを作成するか、または DB2 Everyplace 同期サーバーとの同期のデモンストレーション用に事前構成された Windows クライアントをインストールするかを指

- 定できます。「次へ」をクリックします。「サービス・アクションの選択 (Select Service action)」パネルがオープンします。
- d. インストールの終了時に、セットアップ・ウィザードで DB2 Everyplace 同期サーバーの「ウィンドウ・サービス (Windows Service)」を開始したい場合は、チェック・ボックスを選択します。「次へ」をクリックします。ステップ 7 に進みます。
6. 「標準 (Typical)」を選択した場合、DB2 Everyplace セットアップ・ウィザードは、以下のことを行います。
 - インストール中に応答ファイルを作成しません。
 - DB2 Everyplace サンプル・データベースとサーバー・サンプル・アプリケーションを作成し、同期のデモンストレーションのために事前構成された Windows クライアント・アプリケーションをインストールします。
 - インストールの終わりに、DB2 Everyplace 同期サーバーの「ウィンドウ・サービス (Windows Service)」を開始します。ステップ 7 に進みます。
 7. コンピューターに DB2 Universal Database がインストールされていない場合、通知パネルがオープンします。DB2 Universal Database がすでにコンピューターにインストールされている場合は、ステップ 8 に進みます。
 - a. DB2 Universal Database - Express の組み込みバージョンをインストールするディレクトリーを指定する必要があります。ディレクトリー名を入力するか、「ブラウズ」をクリックしてディレクトリー名を選択してください。ディレクトリーの指定後、「次へ」をクリックします。
 - b. DB2 UDB Database Administration Server のユーザー情報を指定する必要があります。既存の管理ユーザーを使用するか、またはご使用のコンピューターで作成する新規ユーザーを指定できます。DB2 Everyplace 同期サーバーと同じ認証情報を使用する場合は、チェック・ボックスを選択してください。「次へ」をクリックします。チェック・ボックスを選択した場合は、ステップ 9 に進みます。
 8. 「DB2 UDB ログイン情報 (DB2 UDB login information)」パネルがオープンします。DB2 Everyplace 同期サーバーが DB2 UDB DAS にログオンするために使用する認証情報を入力してください。必要な情報を指定して「次へ」をクリックします。
 9. 「プリインストール・サマリー (Pre-Install summary)」パネルがオープンし、コンピューターにインストールされるフィーチャーと DB2 Everyplace 同期サーバーの構成情報がリストされます。また、組み込み Application Server Express の構成情報もリストされます。このパネルにリストされたサーバー・ポートと SSL ポートは、DB2 Everyplace 同期サーバーとの同期化のために、クライアントによって使用されます。プリインストール・サマリーを読んだ後、「次へ」をクリックします。
 10. インストールが開始され、インストールの進行状況が進行状況表示バーで表示されます。インストール時に、インストール・セットアップ・ウィザードでは、以下のことを行います。
 - 以下をインストールします。
 - DB2 Express の組み込みバージョン (DB2 UDB がインストールされていない場合)。インストールが正常に完了しなかった場合、セットアップ・ウ

ウィザードはエラー・ログをオープンして打ち切られます。DB2 Express の組み込みバージョンのインストールが正常終了した場合は、セットアップ・ウィザードは続行されます。

- DB2 Everyplace Express。このインストール中に、選択されたセットアップ・タイプとフィーチャーのファイルが、事前に指定された宛先ディレクトリにコピーされます。
 - Application Server Express の組み込みバージョン。
 - ポストインストール構成タスクを実行します。これには以下が含まれます。
 - モバイル・デバイス管理センターのクラスパスの更新 (DB2 Universal Database バージョン 8 を使用している場合)
 - DB2 Everyplace 同期サーバー制御データベースの作成
 - DB2 Everyplace サンプル・データベースの作成
 - サーバー・サンプル・アプリケーションの作成
 - DB2 Everyplace 同期サーバーの「ウィンドウ・サービス (Windows Service)」を開始します。
 - 「ポストインストール・サマリー (post-install summary)」パネルがオープンします。このパネルには、ポストインストール検査についての指示が含まれています。インストールした DB2 Everyplace 同期サーバーと同期する方法も提示されます。情報を読んだ後、「完了」をクリックします。
11. おめでとうございます! これで、DB2 Everyplace Express は正常にインストールされました。

関連したタスク:

- 56 ページの『同期サーバーのサブレットのテスト』

サーバーへの DB2 Everyplace Express のインストール (Linux の場合)

以下のステップに従って、DB2 Everyplace Express を Linux サーバーにインストールします。

手順:

1. セットアップ・プログラム DB2Everyplace.bin を root ユーザーとして実行します。「ようこそ (Welcome)」パネルがオープンします。
 2. 「次へ」をクリックして、「インストールの注意事項 (Install Notes)」を表示します。「インストールの注意事項 (Install Notes)」を読んだ後、「次へ」をクリックして「プログラムのご使用条件」を表示します。ご使用条件に同意する場合は、「次へ」をクリックして「インストール・タイプの選択 (Select the installation type)」をオープンします。
 3. 以下のインストール・セットアップ・タイプを選択します。
 - 標準 (Typical): デフォルト値を使用する標準構成を使用して、ほとんどの機能およびフィーチャーと共に DB2 Everyplace Express Edition をインストールしたい、ほとんどのユーザーの場合。
 - カスタム (Custom): インストールするフィーチャーを選択したい上級ユーザーの場合。
- 「次へ」をクリックします。

4. 「カスタム (Custom)」 インストール・セットアップ・タイプを選択した場合は、以下を行います。
 - a. インストールしたいフィーチャーを選択できるパネルがオープンします。「次へ」をクリックします。「インストール・アクションの選択 (Select install actions)」パネルがオープンします。
 - b. 使用可能にしたいインストール・アクションの横にあるチェック・ボックスを選択します。両方のオプションを選択できますが、少なくとも 1 つは選択する必要があります。インストール・アクションを選択しないと、エラーを受け取ります。セットアップ・ウィザードを使用して DB2 Everyplace Express をコンピューターにインストールするか、または応答ファイルを生成するかを指定します。応答ファイルは、対話式インストールで必要になるユーザー応答を記録するために使用されます。これは、別のコンピューター上でインストールを自動化するために使用できます。適切なインストール・アクションを選択して「次へ」をクリックします。「UNIX ポストインストール・アクションの選択 (Select UNIX post install actions)」パネルがオープンします。
 - c. 使用可能にしたいポストインストール・アクションの横にあるチェック・ボックスを選択します。セットアップ・ウィザードで、DB2 Everyplace 同期サーバー・インスタンスを作成するか、または DB2 Everyplace サンプル・データベースおよび Visiting Nurse (巡回医療サービス) サーバー・サンプル・アプリケーションを作成するかどうかを指定できます。「次へ」をクリックします。ステップ 6 に進みます。
5. 「標準 (Typical)」を選択した場合、DB2 Everyplace セットアップ・ウィザードは、以下のことを行います。
 - インストール中に応答ファイルを作成しません。
 - DB2 Everyplace 同期サーバー・インスタンスを作成し、DB2 Everyplace サンプル・データベースとサーバー・サンプル・アプリケーションを作成します。ステップ 6 に進みます。
6. コンピューターに DB2 Universal Database がインストールされていない場合、通知パネルがオープンします。DB2 Universal Database をコンピューターにすでにインストールしている場合は、ステップ 6 に進みます。
 - a. DB2 Database Administration Server インスタンスのユーザー情報を指定する必要があります。ユーザー名、パスワード、1 次グループ名、およびユーザーのホーム・ディレクトリーを入力してください。「次へ」をクリックします。
 - b. DB2 インスタンス所有者のユーザー情報を指定する必要があります。ユーザー名、パスワード、1 次グループ名、およびユーザーのホーム・ディレクトリーを入力してください。「次へ」をクリックします。
 - c. DB2 fenced ユーザーのユーザー情報を指定する必要があります。ユーザー名、パスワード、1 次グループ名、およびユーザーのホーム・ディレクトリーを入力してください。「次へ」をクリックします。
7. 「DB2 Everyplace 同期サーバー・インスタンス所有者のユーザー情報を設定 (Set the user information for the DB2 Everyplace Sync Server instance owner)」

パネルがオープンします。ユーザー名、パスワード、および DB2 Everyplace 同期サーバー・インスタンスのロケールを入力します。必要な情報を指定して「次へ」をクリックします。

8. 「プリインストール・サマリー (Pre-Install summary)」パネルがオープンし、コンピューターにインストールされるフィーチャーと DB2 Everyplace 同期サーバーの構成情報がリストされます。また、組み込み Application Server Express の構成情報もリストされます。このパネルにリストされたサーバー・ポートと SSL ポートは、DB2 Everyplace 同期サーバーとの同期化のために、クライアントによって使用されます。プリインストール・サマリーを読んだ後、「次へ」をクリックします。
9. インストールが開始され、インストールの進行状況が進行状況表示バーで表示されます。インストール時に、インストール・セットアップ・ウィザードでは、以下のことを行います。
 - 以下をインストールします。
 - DB2 Express の組み込みバージョン (DB2 UDB がインストールされていない場合)。インストールが正常に完了しなかった場合、セットアップ・ウィザードはエラー・ログをオープンして打ち切られます。DB2 Express の組み込みバージョンのインストールが正常終了した場合は、セットアップ・ウィザードは続行されます。
 - DB2 Everyplace Express。このインストール中に、選択されたセットアップ・タイプとフィーチャーのファイルが、事前に指定された宛先ディレクトリーにコピーされます。
 - Application Server Express の組み込みバージョン。
 - ポストインストール構成タスクを実行します。これには以下が含まれます。
 - モバイル・デバイス管理センターのクラスパスの更新 (DB2 Universal Database バージョン 8 を使用している場合)
 - DB2 Everyplace 同期サーバー制御データベースの作成
 - DB2 Everyplace サンプル・データベースの作成
 - サーバー・サンプル・アプリケーションの作成
 - 「ポストインストール・サマリー (post-install summary)」パネルがオープンします。このパネルには、ポストインストール検査についての指示が含まれています。インストールした DB2 Everyplace 同期サーバーと同期する方法も提示されます。情報を読んだ後、「完了」をクリックします。
10. おめでとうございます! これで、DB2 Everyplace Express は正常にインストールされました。

関連したタスク:

- 56 ページの『同期サーバーのサブレットのテスト』

モバイル・デバイスへのインストール

このセクションでは、DB2 Everyplace のインストールに関して説明します。以下のトピックを扱います。

- 32 ページの『モバイル・デバイスのインストール』
- 32 ページの『Install on Mobile Devices ツールを使用したインストール』

- 34 ページの『モバイル・デバイスへの手動によるインストール』
- 48 ページの『Update Tool を使用した同期クライアント・ソフトウェアの更新』

モバイル・デバイスのインストール

クライアント・デバイスにファイルを転送するにはいくつかの方法があります。以下を行うことができます。

- Install on Mobile Devices ツールを使用する
- 手動でインストールする
- Update Tool を使用する

関連したタスク:

- 17 ページの『サーバーへのインストール』
- 48 ページの『DB2 Everyplace Update Tool を使用した同期クライアント・ソフトウェアの更新』

Install on Mobile Devices ツールを使用したインストール

Install on Mobile Devices ツールは、DB2 Everyplace の SDK バージョンでのみ使用可能です。

Windows ワークステーション用の Install on Mobile Devices ツールは、以下のオペレーティング・システムを使用するモバイル・デバイスをサポートします。

- Palm OS 3.5 以上 (Palm OS 4.0 以上には最小 16M が必要)
- Windows CE
- Symbian OS バージョン 6 およびバージョン 7

前提条件:

DB2 Everyplace のライブラリーとサンプル・アプリケーションをインストールする前に、以下のことを行っておく必要があります。

1. Windows ワークステーションで、モバイル・デバイスに付属している接続ソフトウェアのインストールと構成を行います。
2. モバイル・デバイスを Windows ワークステーションに接続します。デバイスの資料を参照して、デバイスが正しく接続されているか確認してください。

JDBC DB2 インターフェースまたは ISync4J API を使用する場合、DB2 Everyplace をインストールする前に Java 仮想マシンをモバイル・デバイスにインストールする必要があります。このプロセスはすべてのクライアント・プラットフォームに適用されます。

手順:

インストール用のツールを使用して DB2 Everyplace のライブラリーとサンプル・アプリケーションをインストールするには、以下のことを行います。

1. 「スタート」->「プログラム」->「IBM DB2 Everyplace」->「Install on Mobile Device」とクリックします。Install on Mobile Devices ツールが開きます。
2. 「Select a Mobile Device Platform」ウィンドウでモバイル・デバイスのオペレーティング・システムを選択し、「OK」をクリックします。

3. Palm OS モバイル・デバイスの場合、DB2 Everyplace をインストールさせたいユーザーを選択します。
4. Palm OS モバイル・デバイスの場合、モバイル・デバイスにカラー・ディスプレイが付いている場合は、「**Check this if this device displays colors**」チェック・ボックスを選択します。
5. インストールしたい DB2 Everyplace コンポーネントを選択します。
6. DB2 Everyplace 同期サーバーがインストールされていて、それをこのモバイル・デバイスで使用する予定の場合には、そのデバイスにインストールしたい DB2 Everyplace 同期サーバー・コンポーネントを選択します。
7. 「**OK**」をクリックします。
8. 必要なファイルがインストールされていることを確認します。

Symbian モバイル・デバイスの場合

このツールはモバイル・デバイスの接続ソフトウェアを使用して、必要なファイルを自動的にインストールします。「**OK**」をクリックします。その後、接続ソフトウェアから他のファイルをインストールするかどうかを尋ねられたときに「**Finish (完了)**」をクリックします。

Palm OS および Windows CE の各モバイル・デバイスの場合

ファイルをモバイル・デバイスに転送するためには、以下の同期機能を実行する必要があります。

- Palm OS を使用する場合、HotSync 操作を実行してモバイル・デバイスにファイルを転送します。
- Palm OS エミュレーターを使用する場合、HotSync インストール・ディレクトリーからエミュレーターにファイルをドラッグ・アンド・ドロップすることができます。ファイルが含まれるディレクトリーの名前は以下のようになります。

Palm の場合

Palm desktop *directory*¥username¥install

workpad の場合

Workpad *directory*¥username¥install

Windows CE モバイル・デバイスの場合には、ファイルをモバイル・デバイスに転送するために同期機能を実行します。

9. DB2 Everyplace Visiting Nurse (巡回医療サービス) サンプル・アプリケーションを使用して、DB2 Everyplace が Palm または WinCE モバイル・デバイスに正常にインストールされていることを確認します。

サンプル・アプリケーションの詳しい使用方法については、「DB2 Everyplace アプリケーション開発ガイド」の『Visiting Nurse サンプル・アプリケーションの概要』に関するセクションを参照してください。

関連したタスク:

- 78 ページの『モバイル・デバイスでのインストール後の作業』
- 49 ページの『同期サーバーでの DB2 Everyplace Update Tool のセットアップ』
- 34 ページの『手作業での DB2 Everyplace ファイルのインストール』

関連した解説:

- 52 ページの『DB2 Everyplace Update Tool エラー・メッセージ』

モバイル・デバイスへの手動によるインストール

このセクションでは、DB2 Everyplace をモバイル・デバイスに手動でインストールするための情報を提供します。以下のトピックを扱います。

- 『手作業での DB2 Everyplace ファイルのインストール』
- 『Palm OS デバイスへの DB2 Everyplace ファイルのインストール』
- 36 ページの『Windows CE デバイスへのファイルのインストール』
- 38 ページの『Symbian OS バージョン 6 デバイスへのファイルのインストール』
- 39 ページの『Symbian OS バージョン 7 デバイスへのファイルのインストール』
- 40 ページの『Symbian OS バージョン 7 デバイス・インストールの検査』
- 41 ページの『QNX Neutrino または組み込み Linux モバイル・デバイスへのファイルのインストール』
- 43 ページの『Sharp Zaurus デバイスへのファイルのインストール』
- 43 ページの『MIDP をサポートするデバイスへのファイルのインストール』
- 46 ページの『Windows 32 ビット版へのファイルのインストール』

手作業での DB2 Everyplace ファイルのインストール

DB2 Everyplace のライブラリーおよびサンプル・アプリケーションを手作業でモバイル・デバイスにインストールすることができます。このタイプのインストールをサポートするオペレーティング・システムは、以下のとおりです。

- Palm OS
- Windows CE
- Symbian OS
- QNX Neutrino および組み込み Linux
- MIDP
- Win32

関連したタスク:

- 32 ページの『Install on Mobile Devices ツールを使用したインストール』
- 48 ページの『DB2 Everyplace Update Tool を使用した同期クライアント・ソフトウェアの更新』
- 78 ページの『モバイル・デバイスでのインストール後の作業』

Palm OS デバイスへの DB2 Everyplace ファイルのインストール

このセクションでは、DB2 Everyplace のライブラリーおよびサンプル・アプリケーションを手作業で Palm OS モバイル・デバイスにインストールする方法について説明します。

前提条件:

ライブラリーおよびサンプル・アプリケーションをインストールする前に、以下のことを行っておく必要があります。

1. Windows ワークステーションで、Palm OS デバイスに付属している HotSync 接続ソフトウェアのインストールと構成を行います。
2. Palm OS モバイル・デバイスを Windows ワークステーションに接続します。モバイル・デバイスの資料を参照して、デバイスが正しく接続されているか確認してください。

手順:

DB2 Everyplace ライブラリーとサンプル・アプリケーション・ファイルを手作業でインストールするには以下のことを行います。

1. ワークステーションで、Palm OS モバイル・デバイスに含まれる HotSync 接続ソフトウェアのインストール・ツールを使用して、以下のファイルをインストールします。サンプルの .prc ファイルは実動時にはオプションであるため、必要がなくなった場合には削除して構いません。表 2 に、Palm OS のデータベースおよびサンプル・ファイルを記載します。これらのファイルは ¥DB2everyplace¥Clients にあります。次の表で、lang は言語コードを表します。

表 2. Palm OS のデータベースおよびサンプル・ファイル

ファイル名	説明
PalmOS¥database¥DB2eCat.prc	DB2 Everyplace データベース・エンジン
PalmOS¥database¥DB2eCLI.prc	DB2 Everyplace データベース・エンジン
PalmOS¥database¥DB2eComp.prc	DB2 Everyplace データベース・エンジン
PalmOS¥database¥DB2eRunTime.prc	DB2 Everyplace データベース・エンジン
PalmOS¥database¥DB2eDMS.prc	DB2 Everyplace データベース・エンジン
PalmOS¥database¥PBSPkcs11.prc	暗号化ライブラリー
utilities¥lang¥DB2eImport	DB2 Everyplace インポート・ツール
PalmOS¥database¥Samples¥lang¥SampleCLP¥DB2eCLP.prc	DB2 Everyplace コマンド行プロセッサ
PalmOS¥database¥Samples¥lang¥Phone¥Phone.prc	Phonebook (電話帳) サンプル・プログラム
PalmOS¥database¥Samples¥lang¥Nurse¥Nurse.prc	Visiting Nurse (巡回医療サービス) サンプル・プログラム
PalmOS¥database¥Samples¥lang¥NurseInit¥NurseInit.prc	Visiting Nurse (巡回医療サービス) 初期設定プログラム
PalmOS¥database¥JDBC¥c1dc¥sample¥DB2eApp1.prc	J9 CLDC で使用するサンプル JDBC アプリケーション
PalmOS¥database¥JDBC¥xtr¥sample¥DB2eApp1.prc	J9 XTREME で使用するサンプル JDBC アプリケーション

サンプル・アプリケーションが入っている場所については、95 ページの『第 4 章 DB2 Everyplace サンプル・アプリケーションの概要』を参照してください。

2. DB2 Everyplace 同期サーバーを使用する場合は、次の同期クライアント・ファイルをインストールします。36 ページの表 3 には Palm OS の同期クライアント・ファイルが記載されています。これらのファイルは

¥DB2Everyplace¥Clients¥PalmOS¥Sync¥ にあります。

表3. Palm OS の同期クライアント・ファイル

ファイル名	説明
dsyagent.prc	IBM Sync Remote Stored Procedure アダプター
imsaconfig.prc	IBM Sync Configuration アダプター
imsadb2e.prc	IBM Sync DB2 Everyplace アダプター
imsafile.prc	IBM Sync File アダプター
isyncconf.prc	IBM Sync エンジン
isyncore.prc	IBM Sync エンジン
isyncui.prc	IBM Sync インターフェース
wbxmllib.prc	IBM Sync WBXML ライブラリー
iUpgrade.prc	IBM Sync Auto Deploy
isyncxpt.prc	IBM Sync トランスポート・ライブラリー
SSLlib.prc	IBM Sync SSL ライブラリー

暗号化は、Palm OS 3.5 以降のデバイスでのみサポートされます。Palm OS モバイル・デバイスと DB2 Everyplace 同期サーバーの間で暗号化を使用するには、PBSPkcs11.prc ファイルをインストールしなければなりません。

- HotSync 機能を実行して、DB2 Everyplace ライブラリーとアプリケーション・ファイルの Palm OS モバイル・デバイスへのインストールを完了させます。

関連したタスク:

- 32 ページの『Install on Mobile Devices ツールを使用したインストール』
- 34 ページの『手作業での DB2 Everyplace ファイルのインストール』
- 78 ページの『モバイル・デバイスでのインストール後の作業』
- 49 ページの『同期サーバーでの DB2 Everyplace Update Tool のセットアップ』

関連した解説:

- 52 ページの『DB2 Everyplace Update Tool エラー・メッセージ』

Windows CE デバイスへのファイルのインストール

このセクションでは、DB2 Everyplace のライブラリーおよびサンプル・アプリケーションを Windows CE モバイル・デバイスにインストールする方法について説明します。

前提条件:

ファイルをインストールする前に、以下のことを行っておく必要があります。

- Windows ワークステーションで、Windows CE モバイル・デバイスに付属している Windows CE サービス・ソフトウェア (最近のバージョンでは ActiveSync と呼ばれます) のインストールと構成を行います。
- Windows CE モバイル・デバイスを Windows ワークステーションに接続します。デバイスの資料を参照して、デバイスが正しく接続されているか確認してください。

手順:

DB2 Everyplace ライブラリーとサンプル・アプリケーション・ファイルを手作業でインストールするには以下のことを行います。

1. Windows CE デバイスに付属している Windows CE Service 接続ソフトウェア (または ActiveSync) のインストール・ツールを使用して、以下のファイルをインストールします。表 4 に Windows CE のデバイス・ファイルを記載します。これらのファイルは ¥DB2Everyplace¥Clients¥WinCE¥database にあります。以下の表で、

devtype は Windows CE のデバイス・タイプです。

proc はプロセッサのタイプです。

表 4. Windows CE のデバイス・ファイル

ファイル名	説明
wce300¥proc¥db2e.dll	DB2 Everyplace データベース・エンジン
wce300¥proc¥CryptoPlugin.dll	データ暗号化のための DB2 Everyplace データベース・エンジン
wce300¥proc¥db2ejdbc.dll	DB2 Everyplace JDBC ドライバー
jdbc¥db2ejdbc.jar	DB2 Everyplace JDBC ドライバー

サンプル・ファイルが入っている場所については、95 ページの『第 4 章 DB2 Everyplace サンプル・アプリケーションの概要』を参照してください。

2. DB2 Everyplace 同期サーバーを使用する場合は、以下の同期クライアント・ファイルをインストールしてください。表 5 に同期クライアント・ファイルを記載します。これらのファイルは ¥DB2Everyplace¥Clients¥WinCE¥Sync¥lang¥ver¥proc にあります。

ここで、*lang* は言語コード、*ver* は WinCE のバージョン、*proc* はプロセッサ・タイプを示します。

表 5. Windows CE の同期クライアント・ファイル

ファイル名	説明
dsyagent.dll	IBM Sync Remote Stored Procedure アダプター
imsaconfig.dll	IBM Sync Configuration アダプター
imsadb2e.dll	IBM Sync DB2 Everyplace アダプター
imsafile.dll	IBM Sync File アダプター
isynconf.dll	IBM Sync エンジン
isyncore.dll	IBM Sync エンジン
isyncxpt.dll	IBM Sync トランスポート・ライブラリー
isync4j.dll	IBM Sync Java アダプター
isync4j.jar	IBM Sync Java
isyncui.exe	IBM Sync インターフェース
wbxml1lib.dll	IBM Sync WBXML ライブラリー
upgrade¥iupgrade.exe	IBM Sync Auto Deploy

3. 同期機能を実行して DB2 Everyplace ライブラリーとアプリケーション・ファイルの Windows CE モバイル・デバイスへのインストールを完了させます。

注: 以下の表は、さまざまなエミュレーター用の同期クライアント・ライブラリーのある場所を示しています。

表 6. エミュレーター用の同期クライアント・ライブラリー

ファイル名	説明
¥Clients¥WinCE¥sync¥lang¥wce300¥X86EMRe1	Pocket PC エミュレーター
¥Clients¥WinCE¥sync¥lang¥wce300¥X86Re1	Pocket PC 2002 エミュレーター
¥Clients¥WinCE¥sync¥lang¥wce400¥emulatorRe1	WinCE .NET エミュレーター

Pocket PC 2000 の暗号化は、Microsoft High Encryption Pack for Pocket PC V1.0 を使用した場合のみサポートされます。これは www.microsoft.com/mobile/pocketpc/downloads/ssl128.asp から入手できます。Pocket PC 2002 の暗号化サポートは、¥Windows CE Tools¥wce300¥Pocket PC 2002¥support¥EnhancedCrypto の下の Pocket PC 2002 SDK で使用できます。Windows CE または Pocket PC モバイル・デバイスと DB2 Everyplace 同期サーバーの間で暗号化を行うには、Microsoft High Encryption Pack for Pocket PC をインストールしなければなりません。

関連したタスク:

- 32 ページの『Install on Mobile Devices ツールを使用したインストール』
- 34 ページの『手作業での DB2 Everyplace ファイルのインストール』
- 78 ページの『モバイル・デバイスでのインストール後の作業』
- 49 ページの『同期サーバーでの DB2 Everyplace Update Tool のセットアップ』

関連した解説:

- 52 ページの『DB2 Everyplace Update Tool エラー・メッセージ』

Symbian OS バージョン 6 デバイスへのファイルのインストール

このセクションでは、DB2 Everyplace のライブラリーおよびサンプル・アプリケーションを Symbian OS バージョン 6 のモバイル・デバイスにインストールする方法について説明します。

前提条件:

インストールを行う前に、以下のことを行っておく必要があります。

1. Windows ワークステーションで、Symbian OS バージョン 6 のモバイル・デバイスに付属している接続ソフトウェアのインストールと構成を行います。
2. Symbian OS モバイル・デバイスをワークステーションに接続します。モバイル・デバイスの資料を参照して、デバイスが正しく接続されているか確認してください。

手順:

DB2 Everyplace ライブラリーとサンプル・アプリケーションを手操作でインストールするには、Symbian OS バージョン 6 のモバイル・デバイスに付属している接続ソフトウェアのインストール・ツールを使用します。以下のファイルをインストールします。39 ページの表 7 に、DB2 Everyplace のライブラリーおよびサンプル・アプリケーション・ファイルを記載します。これらのファイルは ¥DB2Everyplace¥Clients¥Symbian6¥database にあります。次の表で、lang は言語コードを表します。

表 7. DB2 Everyplace のライブラリーおよびサンプル・アプリケーション・ファイル

ファイル名	説明
armi¥DB2e.sis	DB2 Everyplace データベース・エンジン
armi¥DB2eJDBC.sis	DB2 Everyplace JDBC ドライバー
install¥lang¥Crystal¥armi¥DB2e_Symbian6.sis	DB2 Everyplace パッケージ (上記のすべてが単一パッケージに含まれています)
IBM 同期クライアント ISync.sis は、以下の場所にあります。 %DSYINSTDIR¥Clients¥Symbian6¥Sync¥lang¥proc¥	IBM 同期クライアント

サンプル・アプリケーションが入っている場所については、95 ページの『第 4 章 DB2 Everyplace サンプル・アプリケーションの概要』を参照してください。

関連したタスク:

- 32 ページの『Install on Mobile Devices ツールを使用したインストール』
- 34 ページの『手作業での DB2 Everyplace ファイルのインストール』
- 78 ページの『モバイル・デバイスでのインストール後の作業』
- 49 ページの『同期サーバーでの DB2 Everyplace Update Tool のセットアップ』

関連した解説:

- 52 ページの『DB2 Everyplace Update Tool エラー・メッセージ』

Symbian OS バージョン 7 デバイスへのファイルのインストール

このセクションでは、DB2 Everyplace のライブラリーおよびサンプル・アプリケーションを Symbian OS バージョン 7 のモバイル・デバイスにインストールする方法について説明します。

前提条件:

インストールを行う前に、以下のステップを実行する必要があります。

1. Windows ワークステーションで、Symbian OS バージョン 7 のモバイル・デバイスに付属している接続ソフトウェアのインストールと構成を行います。
2. Symbian OS モバイル・デバイスをワークステーションに接続します。モバイル・デバイスの資料を参照して、デバイスが正しく接続されているか確認してください。

手順:

DB2 Everyplace ライブラリーおよびサンプル・アプリケーションを手作業でインストールするには、Symbian OS バージョン 7 のモバイル・デバイスに付属している接続ソフトウェアのインストール・ツールを使用します。インストールする必要があるファイルは、『データベースのための DB2 Everyplace ライブラリーおよびサンプル・アプリケーション・ファイル』および『IBM 同期クライアント・ライブラリー』の表にリストされています。DB2 Everyplace ライブラリーおよびサンプル・アプリケーション・ファイルは、¥DB2Everyplace¥Clients¥Symbian7¥database にあります。次の表で、lang は言語コードを表します。

表 8. データベースのための DB2 Everyplace ライブラリーおよびサンプル・アプリケーション・ファイル

ファイル名	説明
armi¥DB2e.sis	DB2 Everyplace データベース・エンジン

表 8. データベースのための DB2 Everyplace ライブラリーおよびサンプル・アプリケーション・ファイル (続き)

ファイル名	説明
armi¥DB2eJDBC.sis	DB2 Everyplace JDBC ドライバー
samples¥lang¥SampleCLP¥UIQ¥armi¥SampleCLP.sis	コマンド行プロセッサ (デバイスの場合)
samples¥lang¥SampleCLP¥UIQ¥wins¥SampleCLP.sis	コマンド行プロセッサ (エミュレーターの場合)
samples¥lang¥PersonList¥UIQ¥armi¥PersonList.sis	サンプル・アプリケーション (デバイスの場合)
samples¥lang¥PersonList¥UIQ¥wins¥PersonList.sis	サンプル・アプリケーション (エミュレーターの場合)
install¥lang¥NurseInit¥UIQ¥wins¥NurseInit.sis	サンプル・アプリケーション (デバイスの場合)
install¥lang¥UIQ¥armi¥DB2e_Symbian7.sis	DB2 Everyplace パッケージ このパッケージには以下が含まれています。 <ul style="list-style-type: none"> • DB2e.sis • DB2eJDBC.sis • SampleCLP.sis • NurseInit.sis • PersonList.sis

IBM 同期クライアント・ライブラリーは
¥DB2Everyplace¥Clients¥Symbian7¥sync¥lang¥proc¥ にあります。

表 9. IBM 同期クライアント・ライブラリー

ファイル名	説明
ISync.sis	IBM 同期クライアント
<ul style="list-style-type: none"> • upgrade¥IUpgrade.app • upgrade¥IUpgrade.rsc 	IBM Update Tool

関連したタスク:

- 34 ページの『手作業での DB2 Everyplace ファイルのインストール』

Symbian OS バージョン 7 デバイス・インストールの検査

デバイスで同期のテストを行うには、デバイスが接続ソフトウェアを使用してワークステーションに接続されていることを確認してください。

手順:

1. アプリケーション・リストから「**ISync**」を選択します。
2. 「ファイル」 → 「設定」ダイアログから、IP、ポート、ユーザー ID、およびパスワードを入力します。
3. 「ファイル」 → 「同期化」と進み、同期をテストします。

関連したタスク:

- 32 ページの『Install on Mobile Devices ツールを使用したインストール』
- 38 ページの『Symbian OS バージョン 6 デバイスへのファイルのインストール』
- 34 ページの『手作業での DB2 Everyplace ファイルのインストール』
- 78 ページの『モバイル・デバイスでのインストール後の作業』
- 49 ページの『同期サーバーでの DB2 Everyplace Update Tool のセットアップ』

関連した解説:

- 52 ページの『DB2 Everyplace Update Tool エラー・メッセージ』

QNX Neutrino または組み込み Linux モバイル・デバイスへのファイルのインストール

このセクションでは、DB2 Everyplace を QNX Neutrino または組み込み Linux のモバイル・デバイスにインストールする方法について説明します。これらのモバイル・デバイスにはさまざまな形式があります。使用するモバイル・デバイスのタイプに応じて、いくつかのインストール・オプションがあります。

- XModem または Kermit プロトコルを使用した、モバイル・デバイスとワークステーションの間のシリアル接続。
- FTP ソフトウェアを使用した、モバイル・デバイスとワークステーションの間のイーサネット接続。
- フロッピー・ディスク (モバイル・デバイスがサポートしている場合)。

モバイル・デバイスへのファイルの転送についての追加情報は、モバイル・デバイスに付属している資料を参照してください。QNX Neutrino をご使用の場合は、「QNX Neutrino Software Developer's Kit (SDK)」も参照してください。

手順:

1. DB2 Everyplace データベース・ファイルをインストールします。QNX Neutrino 用の DB2 Everyplace データベース・ファイルと組み込み Linux モバイル・デバイスは、以下のディレクトリーにあります。

```
%DSYINSTDIR%/Clients/Linux/database/proc
```

ここで、*proc* はプロセッサ・タイプを示します。

2. DB2 Everyplace 同期サーバーおよびサンプル・アプリケーション・ファイルをインストールします。DB2 Everyplace 同期サーバーを使用するには、ライブラリー・パスに含まれる DB2 Everyplace ファイルと一緒に、DB2 Everyplace 同期サーバー・ファイルをインストールする必要があります。同期サーバーおよびサンプル・アプリケーション・ファイルは、以下のディレクトリーにあります。

QNX Neutrino モバイル・デバイスの場合:

```
%DSYINSTDIR%/Clients/neutrino/sync
```

Linux モバイル・デバイスの場合:

```
%DSYINSTDIR%/Clients/linux/sync
```

3. 以下のライブラリー・ファイルおよび該当プロセッサの goISync サンプル・アプリケーションを `user¥lib¥DB2e¥` にコピーします。

```
libisyncxpt.so
libimsaconfig.so
libimsadb2e.so
libimsafile.so
libisyncore.so
libisyncconf.so
libwbxml.so
goISync
```

環境変数の設定:

環境変数 **LD_LIBRARY_PATH** を、DB2 Everyplace CLI 共用ライブラリー (`libdb2e.so`) がインストールされているパスに設定します。例えば、DB2 Everyplace CLI 共用ライブラリーが `/DB2e/database/x86` に保管されている場合に

は、次のステートメントを使用して /DB2e/database/x86 を既存の **LD_LIBRARY_PATH** に追加してください。

```
export LD_LIBRARY_PATH=$LD_LIBRARY_PATH:/DB2e/database/x86
```

暗号化サポートのセットアップ:

このセクションは、QNX Neutrino モバイル・デバイスにのみ適用されます。QNX Neutrino デバイスで暗号化を使用可能にするには、mqueue プロセスが開始されていなければなりません。

1. mqueue プロセスが実行されていることを確認するには、ps と入力します。アクティブなプロセスのリストがデバイスに表示されます。
2. mqueue がリストに含まれていることを確認します。リストに含まれていない場合には、**mqueue** コマンドを使用してプロセスを開始してください。

暗号化ライブラリーを初期化した後でアプリケーションが予期しない終了をする場合は、ライブラリーが破壊されている可能性があります。

サンプル・アプリケーションの実行:

サンプル・アプリケーションは、DB2 Everyplace データベースと DB2 Everyplace 同期サーバーのパッケージに組み込まれています。

QNX Neutrino および Linux 用の DB2 Everyplace サンプル・アプリケーションについての詳細は、95 ページの『第 4 章 DB2 Everyplace サンプル・アプリケーションの概要』を参照してください。

DB2 Everyplace 同期サーバーのサンプルである goISync は、インストールされたディレクトリーから実行できます。最初に実行した後、このディレクトリーに /data というサブディレクトリーが作成されます。

初めて goISync を立ち上げるときに、同期の設定を行ってください。設定は次のように行います。

1. goISync が最初に始動したときに、「**サーバー設定の変更 (Change server settings)**」を選択します。
2. 同期サーバーまたは同期サーバーのクライアントの Neutrino デバイスに関連した値を、「**サーバー IP (Server IP)**」、「**サーバー・ポート (Server Port)**」、「**ユーザー名 (Username)**」、および「**パスワード (Password)**」フィールドに入力します。

これで、同期をとる準備ができました。

関連したタスク:

- 32 ページの『Install on Mobile Devices ツールを使用したインストール』
- 34 ページの『手作業での DB2 Everyplace ファイルのインストール』
- 78 ページの『モバイル・デバイスでのインストール後の作業』
- 49 ページの『同期サーバーでの DB2 Everyplace Update Tool のセットアップ』

関連した解説:

- 52 ページの『DB2 Everyplace Update Tool エラー・メッセージ』

Sharp Zaurus デバイスへのファイルのインストール

このセクションでは、DB2 Everyplace ライブラリーおよびサンプル・ファイルを Sharp Zaurus デバイスにインストールする方法について説明します。

手順:

インストール・パッケージ `db2e-libs_8.1.4_arm.ipk` は、`%DSYINSTDIR%/Clients/linux/install` ディレクトリーにあります。
`db2e-libs_8.1.4_arm.ipk` ファイルには、DB2 Everyplace および同期クライアント・ライブラリーが入っています。

Zaurus Manager ソフトウェアを使用して、`db2e-libs_8.1.4_arm.ipk` をデバイスにインストールします。すべての `*.so` および `*.jar` は `/usr/lib` にインストールされます。アプリケーション (`goISync` および `SampleCLP`) は、`/usr/bin` にインストールされます。

- `goISync` - サンプル同期アプリケーション
- `SampleCLP` - DB2 Everyplace コマンド行プロセッサ

また、DB2 Everyplace エンジン・ファイルおよび同期クライアント・ファイルもデバイスにコピーすることができます。ARM の場合、ファイルは以下の場所にあります。

- DB2 Everyplace エンジン・ファイルは、以下の場所です
`%DSYINSTDIR%/Clients/linux/database/proc`
- 同期クライアント・ライブラリーは、以下の場所です。
`%DSYINSTDIR%/Clients/linux/sync`

関連したタスク:

- 41 ページの『QNX Neutrino または組み込み Linux モバイル・デバイスへのファイルのインストール』

MIDP をサポートするデバイスへのファイルのインストール

このセクションでは、DB2 Everyplace のライブラリーおよびサンプル・ファイルを MIDP をサポートするモバイル・デバイスにインストールする方法について説明します。

前提条件:

DB2 Everyplace のライブラリーおよびサンプル・ファイルをインストールする前に、ご使用のワークステーションに Web アプリケーション・サーバーをインストールする必要があります。WebSphere Application Server 5.x、IBM WebSphere® Application Server - Express V5.0 の組み込みバージョン、または Apache Tomcat を構成して、DB2 Everyplace で実行することができます。続行する前に、これらのアプリケーション・サーバーのいずれかをインストールしなければなりません。

DB2 Everyplace 用の MIDP は、RIM、Nokia、および Motorola を含むいくつかの異なるデバイスでテスト済みです。次のセクションでは、ご使用のネットワーク通信事業者が Nextel の場合のインストール方法を説明します。デバイスによっては、データ・ケーブルを介してアプリケーションをロードするものや、赤外線ポートを使用してロードするものがあります。詳細については、デバイスの製造メーカーの

資料を参照してください。これらのデバイスのいずれかに DB2 Everyplace ライブラリーおよびサンプル・ファイルをインストールする前に、ファイルを電話に転送するためのアプリケーションをダウンロードし、更新しておく必要があります。このアプリケーションをダウンロードするには、以下のようになります。

1. Nextel Developer Program の Web サイト (<http://developer.nextel.com>) を表示します。
2. Nextel Developer Program への申し込みを行います。
3. プログラムへの登録を行った後で、iDEN Update Application をダウンロードし、携帯電話にインストールします。
4. Motorola RS232 または USB データ・ケーブルでコンピューターと携帯電話を接続します。
5. iDEN WebJAL を使用して DB2 Everyplace ライブラリーおよびサンプル・ファイルを携帯電話にインストールします。
 - iDEN WebJAL アプリケーションを立ち上げて、開発者のユーザー名とパスワードを入力します。「Developer Loading Utility」という見出しが表示され、その下に一連の指示が表示されます。
 - 指示に従い、「**Continue**」をクリックします。
 - DB2e\Clients\Midp\lib を表示し、VNurse.jad ファイルを選択します。
 - 「**OK**」をクリックします。インストールが開始されます。

VNurse.jad ファイルと VNurse.jar ファイルはともに、インストール時にデバイスに送信されます。これらのファイルの名前は一致していなければなりません。ファイル名が異なっていると、インストールは正常に行えません。

手順:

DB2 Everyplace ライブラリーとサンプル・アプリケーション・ファイルをインストールするには、以下のことを行います。

MIDP をサポートするデバイスに以下のファイルをインストールします。表 10 に、DB2 Everyplace のライブラリー・ファイルを記載します。これらのファイルは %DB2Everyplace\Clients にあります。

表 10. DB2 Everyplace ライブラリー・ファイル

ファイル名	説明
Midp\lib\VNurse.jad	Visiting Nurse (巡回医療サービス) jad ファイル
Midp\lib\VNurse.jar	Visiting Nurse (巡回医療サービス) 未デバッグ jar ファイル

これらのファイルを使用して、ユーザー独自の MIDP アプリケーションを開発したり、サンプル・アプリケーションを操作したりすることができます。

- Sun Microsystem Wireless Toolkit の起動スクリプトは、%DB2Everyplace\Clients\Midp\bin\run.bat にあります。
- ISync Java 用の MIDP API。45 ページの表 11 には、ISync Java のファイルが掲載されています。これらのファイルは %DB2Everyplace\Clients\Midp\lib にあります。

表 11. ISync Java ファイル

ファイル名	説明
ISyncMidp.jar	MIDP ISync/Java API 未デバッグ・アーカイブ
ISyncMidpDebug.jar	MIDP ISync/Java API デバッグ・アーカイブ

- JAD および JAR のサンプル・ファイル。表 12 に JAD および JAR のサンプル・ファイルを記載します。これらのファイルは ¥DB2Everyplace¥Clients¥Midp¥lib にあります。

表 12. JAD および JAR のサンプル・ファイル

ファイル名	説明
Dump.jad	ダンプ・ユーティリティ jad ファイル
Dump.jar	Dump.jad ファイル用のダンプ・ユーティリティ jar ファイル
Dump1.jad	ダンプ・ユーティリティ jad ファイル
DumpDebug.jar	ダンプ・ユーティリティのデバッグ版
VNurseDebug.jad	Vistiting Nurse (巡回医療サービス) jad ファイル
VNurseDebug.jar	Vistiting Nurse (巡回医療サービス) 未デバッグ jar
VNurseDebug1.jad	user1/user1/221 デバイス ID に対応する jad ファイル
VNurseDebug2.jad	user2/user2/222 デバイス ID に対応する jad ファイル
VNurseDebug3.jad	user3/user3/223 デバイス ID に対応する jad ファイル
VNurseDebug4.jad	user4/user4/224 デバイス ID に対応する jad ファイル
VNurseDebugt5.jad	user5/user5/225 デバイス ID に対応する jad ファイル

- サンプル・ソース・コード。表 13 にサンプル・ソース・コードを記載します。これらのソース・コードは ¥DB2Everyplace¥Clients¥Midp¥samples にあります。

表 13. サンプル・ソース・コード

ファイル名	説明
com¥ibm¥mobileservices¥demo¥Dump.java	サンプル・ソース
com¥ibm¥mobileservices¥demo¥NursesAid.java	VNurse (巡回医療サービス) の援助機能
com¥ibm¥mobileservices¥demo¥VNurse.java	サンプル・ソース
ISyncSample.java	簡単な MIDP 同期の例
ISyncWorker.java	簡単な MIDP 同期の例

- フィルター・サーブレット JAR ファイルおよび Tomcat セットアップ・ファイル。46 ページの表 14 に、フィルター・サーブレット JAR ファイルおよび Tomcat セットアップ・ファイルを記載します。これらのファイルは

%DB2Everyplace%Clients%Midp% にあります。

表 14. フィルター・サーブレット・セットアップ・ファイル

ファイル名	説明
lib%FilterServlet.jar	MIDP サーブレット未デバッグ jar ファイル
lib%FilterServletDebug.jar	MIDP サーブレット・デバッグ jar ファイル
bin%dsytomcat.bat	Tomcat スタートアップ・ファイル

上記のデバッグ・ファイルは大きすぎるため、大半のデバイスに収まらず、また多くのトレース出力を表示します。これらのデバッグ・ファイルの目的は、最適の IDE で開発中にアプリケーションをデバッグすることです。番号の付いた VNurse.jad ファイルは、Sun Wireless Toolkit エミュレーター (Midp/bin/run.bat) から実行できるさまざまなユーザーとパスワードの組み合わせを定義しています。これらのファイルのうちのいずれかを電話で使用する場合は、ルート・ファイル名が JAR ファイルと一致していなければなりません。例えば、VNurse3.jad を電話回線ロードするには、その前にこのファイルを VNurse.jad という名前に変更しておく必要があります。

MidpISync.jar および組み込まれた build.bat (ANT スクリプト) ファイルを使用してユーザー独自のアプリケーションを開発したい場合には、以下のソフトウェア・プログラムをダウンロードしてインストールすることができます。

- Sun Microsystem の Java™ 2 Platform Micro Edition, Wireless Toolkit。このツールキットには、ユーザーの MIDlet コードをコンパイルおよび検査するための GUI またはコマンド行ツールが備わっています。
- Apache ANT。Wireless Toolkit から MIDlet とライブラリーをビルドするために使用されます。

関連したタスク:

- 32 ページの『Install on Mobile Devices ツールを使用したインストール』
- 34 ページの『手作業での DB2 Everyplace ファイルのインストール』
- 78 ページの『モバイル・デバイスでのインストール後の作業』
- 49 ページの『同期サーバーでの DB2 Everyplace Update Tool のセットアップ』

関連した解説:

- 52 ページの『DB2 Everyplace Update Tool エラー・メッセージ』

Windows 32 ビット版へのファイルのインストール

DB2 Everyplace 用のアプリケーション・プログラムを作成する Windows 32 ビット版クライアント上に、DB2 Everyplace クライアントをインストールすることができます。

手順:

1. 以下のファイルを、ご使用の Windows サーバーから Windows 32 ビット版クライアントのフォルダーにコピーします。以下のファイルをインストールします。47 ページの表 15 に、アプリケーション・プログラム・ファイルを記載します。これらのファイルは %DSYINSTDIR%\%Clients%\Win32%database にあります。次の表で、lang は言語コードを表します。

表 15. アプリケーション・プログラム・ファイル

ファイル名	説明
x86¥DB2e.dll	DB2 Everyplace データベース・エンジン
x86¥CryptoPlugin.dll	データ暗号化のための DB2 Everyplace データベース・エンジン
x86¥DB2eJDBC.dll	DB2 Everyplace JDBC ドライバー
jdbc¥DB2eJDBC.jar	DB2 Everyplace JDBC ドライバー
jdbc¥DB2eAppl.class	サンプル Java アプリケーション
jdbc¥DB2eJavaCLP.class	Java で作成されたコマンド行プロセッサ
samples¥lang¥sampleCLP¥Release¥SampleCLP.exe	コマンド行プロセッサ (ANSI バージョン)
samples¥lang¥sampleCLP¥ReleaseU¥SampleCLPU.exe	コマンド行プロセッサ (UNICODE バージョン)
samples¥VisualBasic¥DB2eSample.exe	Visual Basic で作成されたサンプル・アプリケーション

2. DB2 Everyplace 同期サーバーを使用する場合は、以下の同期クライアント・ファイルを上記と同じフォルダーにコピーします。表 16 に同期クライアント・ファイルを記載します。これらのファイルは ¥DB2Everyplace¥Clients¥Win32¥Sync¥lang¥ にあります。

表 16. 同期クライアント・ファイル

ファイル名	説明
dsyagent.dll	IBM Remote Stored Procedure アダプター
testisync.exe	IBM Sync インターフェース
imsaconfig.dll	IBM Sync Configuration アダプター
imsadb2e.dll	IBM Sync DB2 Everyplace アダプター
imsafile.dll	IBM Sync File アダプター
isyncconf.dll	IBM Sync Configuration アダプター
isyncore.dll	IBM Sync DB2 Everyplace アダプター
isync4j.dll	IBM Sync Java アダプター
isync4j.jar	IBM Sync Java
wbxml1lib.dll	IBM Sync WBXML ライブラリー
isyncxpt.dll	IBM トランスポート・ライブラリー

暗号化は、Microsoft Strong Encryption を使用した場合のみサポートされます。これは www.microsoft.com/TechNet/security/crypload.asp からダウンロードできます。Windows 32 ビット版クライアントと DB2 Everyplace 同期サーバーの間で暗号化を使用するには、ご使用のオペレーティング・システム用の Microsoft Strong Encryption ダウンロードをインストールする必要があります。

3. オプション: ユーザー独自の DB2 Everyplace アプリケーションを上記と同じフォルダーにインストールします。

関連したタスク:

- 32 ページの『Install on Mobile Devices ツールを使用したインストール』
- 34 ページの『手作業での DB2 Everyplace ファイルのインストール』

- 78 ページの『モバイル・デバイスでのインストール後の作業』
- 49 ページの『同期サーバーでの DB2 Everyplace Update Tool のセットアップ』

関連した解説:

- 52 ページの『DB2 Everyplace Update Tool エラー・メッセージ』

Update Tool を使用した同期クライアント・ソフトウェアの更新

このセクションでは、Update Tool を使用して同期クライアント・ソフトウェアを更新する方法について説明します。以下のトピックを扱います。

- 『DB2 Everyplace Update Tool を使用した同期クライアント・ソフトウェアの更新』
- 50 ページの『モバイル・デバイスへの DB2 Everyplace Update Tool のインストール』
- 49 ページの『同期サーバーでの DB2 Everyplace Update Tool のセットアップ』
- 52 ページの『DB2 Everyplace Update Tool エラー・メッセージ』

DB2 Everyplace Update Tool を使用した同期クライアント・ソフトウェアの更新

DB2 Everyplace Update Tool を使用すると、同期クライアント・ユーザーは容易にクライアント・ソフトウェアをアップグレードすることができます。モバイル・デバイスをサービス・ステーションに持ち込んでファイルを検索する代わりに、DB2 Everyplace Update Tool を立ち上げて新しい IBM Sync ファイルをダウンロードすることができます。このツールは、以下のプラットフォームで使用可能です。

- Palm OS
- Symbian OS
- Windows CE

前提条件:

DB2 Everyplace Update Tool を使用して同期クライアント・ソフトウェアを更新する前に、以下のステップを実行する必要があります。

1. 同期サーバーで DB2 Everyplace Update Tool をセットアップする。
2. DB2 Everyplace Update Tool をモバイル・デバイスにインストールする。

手順:

モバイル・デバイスから Update Tool を実行するには、以下のようになります。

1. 「**IBM Update**」アイコンをクリックします。「DB2 Everyplace Update Tool」ウィンドウがオープンします。
2. メニュー・バーをアクティブにして、「**設定**」を選択します。
3. 「設定」ウィンドウで、「**サーバー IP (Server IP)**」、「**ポート番号 (Port #)**」、「**ユーザー ID**」、および「**パスワード**」フィールドに記入を行います。これらのフィールドに指定する情報は、IBM Sync プログラムの設定値と整合していなければなりません。
4. 「**OK**」をクリックします。

5. 「更新」アイコンをクリックして更新処理を開始します。更新が完了すると「DB2 Everyplace Update Tool」ウィンドウに「更新が正常に終了した」ことを示すメッセージが表示されます。

Symbian オペレーティング・システムでは、更新ツールはデフォルトで、すべての IBM 同期クライアント DLL を C:%System%Libs に配置し、サンプル・アプリケーションを C:%System%Apps%ISync に配置します。これらのパスは、「**拡張 (Advanced)**」パネルで変更することができます。ファイルがサーバーから正常にダウンロードされると、最終更新プロセスの一環として新規ターゲット・ディレクトリーを指定するように求めるダイアログ・ウィンドウがオープンします。このターゲット・ディレクトリーは、バージョン 8 のクライアントで構成ファイルとデータ・ファイルが保管されるディレクトリーであり、デフォルトでは C:%System%Data%ISync になっています。IBM 同期クライアント バージョン 7 からの構成ファイルは、バージョン 8 で、この新規ターゲット・ディレクトリーにコピーされます。更新ツールでは「コントロール パネル」の「**アプリケーションの追加と削除**」で表示される DB2 Everyplace および同期サーバー・アプリケーションのバージョンは更新されません。個々の DLL をダウンロードする代わりに、サーバーにある DSYDeploy.properties ファイルを変更して、ISync.sis および DB2e.sis のみをダウンロードすることもできます。この 2 つのファイルが受信されて C:%System%Libs に配置された後で、それらを手操作でデバイスにインストールすると、正しいバージョンが反映されます。

Windows CE オペレーティング・システムの場合、更新ツールはデフォルトで、すべての IBM 同期クライアント DLL を %Windows に配置し、サンプル・アプリケーションを %Windows%Start に配置します。これらのパスは、「**拡張 (Advanced)**」パネルで変更することができます。ファイルがサーバーから正常にダウンロードされると、最終更新プロセスの一環として新規ターゲット・ディレクトリーを指定するように求めるダイアログ・ウィンドウがオープンします。このターゲット・ディレクトリーは、バージョン 8 のクライアントで構成ファイルとデータ・ファイルが保管されるディレクトリーであり、デフォルトではルート・ディレクトリー (¥) になっています。IBM 同期クライアント バージョン 7 からの構成ファイルは、バージョン 8 で、この新規ターゲット・ディレクトリーにコピーされます。

関連したタスク:

- 17 ページの『サーバーへのインストール』

関連した解説:

- 52 ページの『DB2 Everyplace Update Tool エラー・メッセージ』
- 78 ページの『モバイル・デバイスでのインストール後の作業』

同期サーバーでの DB2 Everyplace Update Tool のセットアップ

DB2 Everyplace Update Tool をインストールして実行する前に、サーバーにある DSYDeploy.properties ファイルを変更する必要があります。このプロパティー・ファイルは、サーバーに、クライアント装置に送る更新内容がある場所を通知します。

このタスクは、DB2 Everyplace Update Tool を使用して同期クライアント・ソフトウェアを更新するメインタスクの一部です。このステップを完了したら、48 ページの『DB2 Everyplace Update Tool を使用した同期クライアント・ソフトウェアの更新』に戻ります。

制約事項:

この更新ツールを使用するには、DB2 Everyplace 同期サーバーのバージョン 8.1 以降が必要です。

手順:

1. 「DB2e」->「サーバー」->「プロパティ」->「com」->「ibm」->「mobileservices」と選択して、DSYDeploy.properties ファイルをオープンします。
2. 更新したいモバイル・デバイスのタイプを表す項目を見つけます。以下はその例です。

```
PalM.M68.prc.syncserver=
```
3. サーバー上でこのファイルが入っているディレクトリーを指し示すように、その項目を更新します。以下はその例です。

```
PalM.M68.prc.syncserver=c:¥db2everyplace¥Clients¥PalM0S¥Sync¥upgrade¥iUpdate
```

iUpdate はこのディレクトリーにある .prc 拡張子の付いたファイルすべてをデバイスに送信します。
4. 変更内容を保管します。

関連したタスク:

- 17 ページの『サーバーへのインストール』
- 『モバイル・デバイスへの DB2 Everyplace Update Tool のインストール』
- 34 ページの『手作業での DB2 Everyplace ファイルのインストール』
- 78 ページの『モバイル・デバイスでのインストール後の作業』

関連した解説:

- 52 ページの『DB2 Everyplace Update Tool エラー・メッセージ』

モバイル・デバイスへの DB2 Everyplace Update Tool のインストール

DB2 Everyplace Update Tool のインストールは、サーバーおよびモバイル・デバイスに DB2 Everyplace をインストールした後で行わなければなりません。DB2 Everyplace Update Tool は手操作でインストールすることも、1 つ以上のモバイル・デバイスに同期されたファイル・サブスクリプションを作成することによってインストールすることもできます。

このタスクは、DB2 Everyplace Update Tool を使用して同期クライアント・ソフトウェアを更新するメインタスクの一部です。このステップを完了したら、48 ページの『DB2 Everyplace Update Tool を使用した同期クライアント・ソフトウェアの更新』に戻ります。

手順:

DB2 Everyplace Update Tool を手操作でインストールするには、以下のようになります。

1. ワークステーションで、モバイル・デバイスと互換性のある接続ソフトウェア・プログラムをインストールし、構成します。モバイル・デバイスにすでに接続ソフトウェアが組み込まれている場合もあります。
2. モバイル・デバイスをワークステーションに接続します。
3. モバイル・デバイスに組み込まれている接続ソフトウェア・プログラムには、インストール・ツールが含まれています。このインストール・ツールを使用して iUpgrade ファイルをモバイル・デバイスにダウンロードします。例えば、次のようになります。
 - Palm OS デバイスの場合、¥Clients¥PalmOS¥Sync¥lang¥upgrade¥iUpgrade.prc をダウンロードします。
 - WinCE デバイスの場合、¥Clients¥WinCE¥Sync¥lang¥ver¥proc¥upgrade¥iUpgrade.exe をダウンロードします。
 - Symbian6 デバイスの場合、¥Clients¥Symbian6¥Sync¥lang¥proc¥upgrade¥iUpgrade.app をダウンロードします。
 - Symbian6 デバイスの場合、¥Clients¥Symbian6¥Sync¥lang¥proc¥upgrade¥iUpgrade.rsc をダウンロードします。
 - Symbian7 デバイスの場合、¥Client¥Symbian7¥sync¥lang¥proc¥upgrade¥iUpgrade.app をダウンロードします。
 - Symbian7 デバイスの場合、¥Client¥Symbian7¥sync¥lang¥proc¥upgrade¥iUpgrade.rsc をダウンロードします。

proc はプロセッサのタイプです。

ver はユーザーのモバイル・デバイスの Windows CE のバージョン番号です。

DB2 Everyplace ファイルを Palm OS、Windows CE、および Symbian6 プラットフォームに手操作でインストールする方法については、34 ページの『手作業での DB2 Everyplace ファイルのインストール』を参照してください。

ファイル・サブスクリプションを使用して更新ツールをインストールするには、以下のようになります。

1. モバイル・デバイス管理センターを開始します。Windows の場合には、「スタート」メニューから「スタート」→「プログラム」→「DB2 Everyplace」→「同期サーバー用サーブレットの開始 (Start Servlet for Sync Server)」とクリックします。UNIX の場合には、DB2 Everyplace 同期サーバー・インスタンスの所有者としてログインし、ディレクトリー \$DSYINSTDIR/Server/bin に移動して、*dsyadmin.sh* を実行します。
2. オブジェクト・ツリーで「サブスクリプション」フォルダーを右マウス・ボタン・クリックし、ポップアップ・メニューから「作成」→「ファイル・サブスクリプション」と選択します。「ファイル・サブスクリプションの作成」ノートブックがオープンします。

3. 「ファイル・サブスクリプションの作成」ノートブックの「識別」ページで、次のことを行います。
 - ファイル・サブスクリプションの名前、記述、および暗号化レベルを指定します。
 - ソース・ファイルの名前を指定します。このソース・ファイルは、モバイル・デバイスに同期させようとしている DB2 Everyplace Update Tool 実行可能ファイルです。51ページを参照してください。
 - サブスクリプションを受け取るデバイス・タイプごとに、チェック・ボックスを選択します。
4. 「ファイル・サブスクリプションの作成」ノートブックの「サブスクリプション・セット」ページで、サブスクリプション・セットにファイル・サブスクリプションを割り当てます。
5. 「OK」をクリックします。

モバイル・デバイス管理センターをクローズする前に、新規ファイル・サブスクリプションを含むサブスクリプション・セットに正しいグループとユーザーが割り当てられていることを確認してください。

ファイル・サブスクリプションの作成に関して詳しくは、「同期サーバー 管理ガイド」を参照してください。

関連したタスク:

- 17 ページの『サーバーへのインストール』
- 49 ページの『同期サーバーでの DB2 Everyplace Update Tool のセットアップ』
- 34 ページの『手作業での DB2 Everyplace ファイルのインストール』
- 78 ページの『モバイル・デバイスでのインストール後の作業』

関連した解説:

- 『DB2 Everyplace Update Tool エラー・メッセージ』

DB2 Everyplace Update Tool エラー・メッセージ

下記の表 2 には、DB2 Everyplace Update Tool によって生成されるすべてのエラー・メッセージがリストされています。表 17 に、エラー・メッセージと、その問題の可能な対処方法を記載します。

表 17. トラブルシューティング・ガイド

エラー・メッセージ	可能な対処方法
Authentication failed (invalid encryption key) - update aborted	クライアント設定値がモバイル・デバイス管理センターで定義されたユーザーの設定値と一致していることを確認してください。
File size exceeds available memory	デバイス上の不要になったアプリケーションまたはファイルを削除し、やり直してください。
Internal server error	これは内部エラーです。トレース・ファイルを添付して IBM ソフトウェア・サポートに報告してください。

表 17. トラブルシューティング・ガイド (続き)

エラー・メッセージ	可能な対処方法
Failed to open connection	ネットワーク接続および同期サーバーをチェックしてください。ホストが接続されていること、およびサーバーが実行されていることを確認してください。
Failed to establish connection (接続の確立が失敗しました)	ネットワーク接続および同期サーバーをチェックしてください。ホストが接続されていること、およびサーバーが実行されていることを確認してください。
Failed to send request (要求の送信が失敗しました)	ネットワークのトラフィックが少ないときに同期を再び試みるか、あるいはより高速なネットワークから同期を試みてください。
Failed to receive reply (応答の受信が失敗しました)	ネットワークのトラフィックが少ないときに同期を再び試みるか、あるいはより高速なネットワークから同期を試みてください。
Timeout while receiving reply (応答の受信中にタイムアウトになりました)	より大きなタイムアウト値を指定するか、あるいはネットワークのトラフィックが少ないときに同期を再び試みてください。
Failed to receive acknowledge (確認の受信が失敗しました)	ネットワークのトラフィックが少ないときに同期を再び試みるか、あるいはより高速なネットワークから同期を試みてください。
Failed to open Net library	ネットワーク・ライブラリーがデバイス上に存在しているかどうか調べてください。ライブラリーの再インストールを試みてください。
Failed to resolve hostname	ホスト名および DNS アドレスが正しいことを確認してください。
Failed to allocate working buffer for transport	デバイス上の不要になったアプリケーションまたはファイルを削除し、やり直してください。
Unknown network error	これは内部エラーです。トレース・ファイルを添付して IBM ソフトウェア・サポートに報告してください。
Failed to create target file	ターゲット・ファイルが別のアプリケーションによって使用されていないことを確認してください。ターゲット・ファイルが使用中の場合には、アンロックしてから再び同期させてください。
No files received for update	これは、モバイル・デバイスの更新ファイルがサーバーにないことを示す通知メッセージです。

関連したタスク:

- 48 ページの『DB2 Everyplace Update Tool を使用した同期クライアント・ソフトウェアの更新』
- 49 ページの『同期サーバーでの DB2 Everyplace Update Tool のセットアップ』

- 50 ページの『モバイル・デバイスへの DB2 Everyplace Update Tool のインストール』
- 34 ページの『手作業での DB2 Everyplace ファイルのインストール』

サーバーでのインストール後の作業

このセクションでは、サーバーでの DB2 Everyplace のインストール後に実行する必要がある作業について説明します。以下のトピックを扱います。

- 『UNIX での DB2 Everyplace インスタンスの作成』
- 『中間層サーバーへのソース・データベースのマッピング』
- 55 ページの『レプリケーションの使用可能化』
- 56 ページの『サンプルのデータベースとアプリケーションのセットアップ』
- 56 ページの『同期サーバーのサブレットのテスト』
- 58 ページの『IBM WebSphere Application Server で使用する同期サーバーの構成』
- 72 ページの『複数サーバー環境の構成』

UNIX での DB2 Everyplace インスタンスの作成

インストール中に DB2 Everyplace インスタンスを作成していないか、またはインストール・プロセス外で追加のインスタンスを作成したい場合は、**dsyicreate.sh** コマンドを使用します。

注: DB2 Everyplace インスタンスは、DB2 Universal Database インスタンスでもある必要があります。そのため、DB2 インスタンスの所有者であるユーザー ID のみが DB2 Everyplace インスタンスをホスティングすることができます。

手順:

DB2 Everyplace 同期サーバー・インスタンスを作成するには、ルート・インストール・ディレクトリー (Linux および Solais の場合は /opt/DB2Everyplace81、AIX の場合は /usr/lpp/DB2Everyplace81) にある **dsyicreate.sh** コマンドを使用します。root ユーザーとして **dsyicreate.sh** コマンドを実行します。

DB2 Everyplace 同期サーバー・インスタンスを作成するために指定する必要があるパラメーターのリストが表示されます。これらのパラメーターは、DB2 Everyplace インストール中に選択したセットアップ・タイプ固有のものです。

関連したタスク:

- 15 ページの『Linux でのオペレーティング・システム・パラメーターの調整』
- 16 ページの『Solaris でのオペレーティング・システム・パラメーターの調整』
- 17 ページの『AIX でのオペレーティング・システム・パラメーターの調整』

中間層サーバーへのソース・データベースのマッピング

手順:

ソース・データベースが中間層サーバーとは別のワークステーションに存在する場合、DB2 Universal Database Control Center からソース・データベースにリンクしてください。Control Center でホスト・システムを追加し、ホスト・システムのインスタンスを作成し、必要に応じて、中間層データベースの名前の別名を使用してデータベースをホスト・システムに追加する必要があります。中間層データベースは、DB2 Universal Database コマンド行から (**db2 create db** コマンドを使用して) 作成することも、DB2 Universal Database Control Center のデータベース作成ウィザードを使用して作成することもできます。ローカル・マシンおよび同期サーバー・インスタンスに中間層データベースを作成するには、中間層データベースと同期サーバー制御データベース (DSYCTLDB) の両方が同じコード・ページを使用する必要があります。

DB2 Everyplace サーバーの詳細については、「*DB2 Everyplace 同期サーバー 管理ガイド*」を参照してください。

関連したタスク:

- 11 ページの『バージョン 8.1.4 でのマイグレーションに関する考慮事項』
- 17 ページの『サーバーへのインストール (Windows の場合)』
- 『レプリケーションの使用可能化』
- 56 ページの『サンプルのデータベースとアプリケーションのセットアップ』
- 58 ページの『IBM WebSphere Application Server で使用する同期サーバーの構成』
- 56 ページの『同期サーバーのサブレットのテスト』

レプリケーションの使用可能化

手順:

ミラーリング・サーバーと DB2 Universal Database との間でレプリカを生成するには、データベースに表サブスクリプションを作成する必要があります。同期サーバーをインストールすると、レプリケーションは自動的にセットアップされます。Data Propagator サブスクリプションの場合、ミラー・データベースをホスティングするサーバーでレプリケーションを実行する必要があります。

データの伝搬に関する詳細については、「*DB2 Universal Database レプリケーションの手引きおよび解説書*」を参照してください。

関連したタスク:

- 11 ページの『バージョン 8.1.4 でのマイグレーションに関する考慮事項』
- 17 ページの『サーバーへのインストール (Windows の場合)』
- 54 ページの『中間層サーバーへのソース・データベースのマッピング』
- 56 ページの『サンプルのデータベースとアプリケーションのセットアップ』
- 58 ページの『IBM WebSphere Application Server で使用する同期サーバーの構成』
- 56 ページの『同期サーバーのサブレットのテスト』

サンプルのデータベースとアプリケーションのセットアップ

インストール中にサンプル・データベースの作成を選択しなかった場合には、いつでもサンプル・データベースをインストールすることができます。

サンプル・アプリケーションをインストールしない場合には、「DB2 Everyplace 同期サーバー 管理ガイド」を参照して、ミラー・データベースの作成、レプリケーションの使用可能化、および同期サーバーのサブレットのテストに関する詳しい情報を参照してください。

DB2 Everyplace 同期サーバーのサンプルおよびサンプル・データベース構成には以下のものが含まれます。

- VNURSE
- M_VN2
- JDBC SUB1 という名前のサンプル JDBC サブスクリプション、SUBSCRIPTION_SET1 という名前のサンプル・サブスクリプション・セット、および GROUP1 という名前のサンプル・グループ (これには 3 つのユーザー nurse1/nurse2/nurse3 が含まれます)。

手順:

Windows オペレーティング・システムにサンプルをインストールする方法:

1. DB2 UDB コマンド・ウィンドウをオープンして、ディレクトリーを %DSYINSTDIR%\%Server%\Sample に変更します。
2. dsysample.bat と、ユーザー名およびパスワードを入力します。コマンドを実行します。

UNIX オペレーティング・システムにサンプルをインストールする方法:

1. DB2 Everyplace インスタンス所有者としてログインします。
2. シェル・ウィンドウをオープンして、ディレクトリーを \$DSYINSTDIR/Server/sample に変更します。
3. dsysample.sh db2userid db2password を実行します (ここで、db2userid は有効な DB2 Universal Database ユーザー ID であり、db2password は対応するパスワードです)。

関連したタスク:

- 11 ページの『バージョン 8.1.4 でのマイグレーションに関する考慮事項』
- 17 ページの『サーバーへのインストール (Windows の場合)』
- 54 ページの『中間層サーバーへのソース・データベースのマッピング』
- 55 ページの『レプリケーションの使用可能化』
- 58 ページの『IBM WebSphere Application Server で使用する同期サーバーの構成』
- 『同期サーバーのサブレットのテスト』

同期サーバーのサブレットのテスト

同期サーバーがクライアントと正常に通信できるようにするために、サブレットをチェックする必要があります。チェックは、クライアントがインストールされていなくても実行することができます。

手順:

- Windows でサブレットをテストするには、以下のようになります。
 1. DB2 Everyplace 同期サーバーを開始します。
 2. Web ブラウザーで `http://yourhostname.yourdomain:8080/db2e/db2erdb` をアクセスします。8080 は、デフォルトの HTTP ポート番号です。ポート 8080 を、DB2 Everyplace インストールの終了時に表示される「ポストインストール・サマリー (Post-install summary)」パネルにリストされた DB2 Everyplace 同期サーバーの正しいポート番号と置き換えます。
- UNIX でサブレットをテストするには、以下のようになります。
 1. DB2 Everyplace インスタンス所有者としてログインします。
 2. シェル・ウィンドウをオープンして、ディレクトリーを `$DSYINSTDIR/Server/bin` に変更します。
 3. `dsysync.sh` を実行します。
 4. Web ブラウザーで `http://yourhostname.yourdomain:8080/db2e/db2erdb` をアクセスします。8080 は、デフォルトの HTTP ポート番号です。ポート 8080 を、DB2 Everyplace インストールの終了時に表示される「ポストインストール・サマリー (Post-install summary)」パネルにリストされた DB2 Everyplace 同期サーバーの正しいポート番号と置き換えます。

Windows の場合にも UNIX の場合にも、以下のメッセージが表示されます。

```
DB2e SyncServer <datetime string>
```

DB2 Everyplace に付属している Application Server - Express の場合、`[DSYINSTDIR]/Server/logs/[servername]` にあるサーバー・ログ・ファイルに、そのポートがすでに他のプログラムで使用されているというメッセージが表示されることがあります。このメッセージが表示されたら、ポート番号を変更してください。

組み込み Application Server - Express は、DB2 Everyplace 8.1.2 と 8.1.4 で変更されています。サーバー名のインストール時のデフォルト値は `IBMDB2eServer` です。サーバー IP アドレスのインストール時のデフォルト値は `127.0.0.1` です。

ポート番号を変更するには、以下のようになります。

1. Windows:

```
cd [DSYINSTDIR]¥Server¥installableApps¥common
[DSYINSTDIR]¥WAS¥bin¥stopServer.bat DB2eServer
[DSYINSTDIR]¥WAS¥bin¥wsadmin.bat -conntype NONE -f dsyConfigEmbedded.jac1
DefaultNode default_host DB2eServer 127.0.0.1 [DSYINSTDIR] [new http port] [new https port]
```

2. Linux または UNIX:

```
cd [DSYINSTDIR]/Server/installableApps/common
[DSYINSTDIR]/WAS/bin/stopServer.sh DB2eServer
[DSYINSTDIR]/WAS/bin/wsadmin.sh -conntype NONE -f dsyConfigEmbedded.jac1
DefaultNode default_host DB2eServer 127.0.0.1 [DSYINSTDIR] [new http port] [new https port]
```

関連したタスク:

- 11 ページの『バージョン 8.1.4 でのマイグレーションに関する考慮事項』
- 17 ページの『サーバーへのインストール (Windows の場合)』
- 54 ページの『中間層サーバーへのソース・データベースのマッピング』
- 55 ページの『レプリケーションの使用可能化』

- 56 ページの『サンプルのデータベースとアプリケーションのセットアップ』
- 『IBM WebSphere Application Server で使用する同期サーバーの構成』

IBM WebSphere Application Server で使用する同期サーバーの構成

このセクションでは、IBM WebSphere Application Server 4.0 Advanced Edition および Advanced Single Server Edition で使用できるように DB2 Everyplace 同期サーバーを構成する方法について説明します。このセクションでは以下のトピックを採り上げます。

- WebSphere Application Server 4.0 Advanced Edition で使用する同期サーバーの構成
- WebSphere Application Server 4.0 Advanced Single Server Edition で使用する同期サーバーの構成

前提条件:

開始する前に、ワークステーションに WebSphere Application Server 4.0 フィックスパック 2 以上がインストールされていることを確認してください。フィックスパックは IBM の Web サイトからダウンロードすることができます。以下の情報も必要になります。

- WebSphere Application Server がインストールされているディレクトリー
- DB2 Everyplace (同期サーバー) をインストールする予定の WebSphere Application Server ノード名
- 同期サーバーのインスタンス名 (UNIX のみ)

WebSphere Application Server Administration Server は、デフォルト・ポート番号 900 を使用する必要があります。そのようになっていない場合には、ここで、900 を使用するように WebSphere Application Server Administration Server を構成してください。同期サーバーの構成が完了した後で、構成を元に戻すことができます。

Windows 2000、Windows NT、および Windows XP で DB2 UDB バージョン 7 を使用している場合、最初に、JDBC 2.0 を使用するように WebSphere Application Server を構成する必要があります。JDBC 2.0 を使用するように WebSphere Application Server を構成するには、以下のようにします。

1. DB2 Universal Database の JDBC アプレット・サーバー・サービスを停止します。
2. WebSphere Application Server が実行されている場合には、それを停止します。
3. 「コマンド・プロンプト」ウィンドウをオープンします。
4. ディレクトリーを %DSYSQLLIBINSTDIR%java12 に変更します。
5. usejdbc2.bat と入力します。エラー・メッセージが表示された場合には、DB2 Universal Database の JDBC アプレット・サーバー・サービスが停止していることを確認する必要があります。
6. DB2 Universal Database の JDBC アプレット・サーバー・サービスを開始します。
7. WebSphere Application Server を開始します。

また、Windows NT、Windows 2000、または Windows XP オペレーティング・システムの場合には、DB2 Universal Database 管理者権限が必要であり、UNIX オペレーティング・システムの場合には、root ユーザー権限が必要です。

手順:

WAS 4.0 Advanced Edition で使用するように同期サーバーを構成する方法:

1. IBM HTTP Server を開始します。

2. Administration Server for WAS 4.0 を開始します。

Administration Server を開始するときには、Windows NT、Windows 2000、または Windows XP オペレーティング・システムでは DB2 Universal Database 管理者としてログインする必要があり、UNIX オペレーティング・システムでは root ユーザーとしてログインする必要があります。この管理サーバーは、この時点ではデフォルトのポート番号 900 を使用する必要がありますが、後で別のポートを使用するようにサーバーを変更することができます。

3. `dsy_was40_install` スクリプトを実行します。このスクリプトは WebSphere ノードにアプリケーション・サーバーを作成し、IBM DB2 Everyplace Enterprise Application をインストールし、Web サーバー・プラグインを再生成します。スクリプトを開始するには、以下のようになります。

• Windows 2000、Windows NT、および Windows XP の場合:

- a. 「コマンド・プロンプト」ウィンドウをオープンします。
- b. ディレクトリーを `%DSYINSTDIR%\installableApps\NT` に変更します。
- c. 次のコマンドを入力します:

```
dsy_was40_install.bat "WAS_installation_directory" "WAS_node_name"  
"%DSYINSTDIR%" "%DSYSQLLIBINSTDIR%" "UDB Version number" dsyusername
```

ここで、

- `WAS_installation_directory` は、WebSphere Application Server がインストールされているディレクトリーです。
- `WAS_node_name` は、WebSphere Application Server のノード名です。
- `UDB Version Number` は、「7」または「8」です。

• UNIX オペレーティング・システムの場合:

- a. 端末ウィンドウをオープンします。
- b. 次のコマンドを入力します:

```
dsy_was40_install.sh "WAS_installation_directory" "WAS_node_name"  
"$DSYINSTDIR" "$DSYSQLLIBINSTDIR" "UDB Version number" dsyusername
```

ここで、

- `WAS_installation_directory` は、WebSphere Application Server がインストールされているディレクトリーです。
- `WAS_node_name` は、WebSphere Application Server のノード名です。
- `UDB Version Number` は、「7」または「8」です。

- c. 同期サーバー・アプリケーションのインストール先ノードと、作成する DB2 Everyplace インスタンスの名前を入力するように求められます。

WAS 4.0 Advanced Single Server Edition で使用するように同期サーバーを構成する方法:

このセクションでは、WAS 4.0 Advanced Single Server Edition で使用できるように同期サーバーを構成する方法について説明します。WAS 4.0 Advanced Single Server Edition で使用するための同期サーバーの構成は、2 つの部分からなります。デフォルト・アプリケーション・サーバーのクラスパスを更新し、IBM_DB2_Everyplace.ear ファイルを WebSphere Application Server にインストールする必要があります。

IBM DB2 Everyplace Server のクラスパスを更新する方法:

1. WebSphere Administration Domain ツリーでコンポーネント「ノード」->「ノード名」->「Application Server」->「IBM DB2 Everyplace Server」->「プロセス定義 (Process Definition)」->「JVM 設定 (JVM Settings)」と展開します。「JVM 設定 (JVM Settings)」ページがオープンします。
2. 「プロパティ」パネルでデフォルト・アプリケーション・サーバーのクラスパスを入力し、「OK」をクリックします。
3. 「JVM 設定 (JVM Settings)」ページで、「保管する必要がある構成 (Configuration needs to be saved)」リンクをクリックします。
4. 「OK」をクリックして構成を保管します。
5. WebSphere Application Server を停止します。
6. WebSphere Application Server を再始動します。WebSphere Application Server が再始動すると、新規 JVM クラスパスが有効になります。
7. WebSphere Application Server の管理コンソールを再始動します。

関連したタスク:

- 11 ページの『バージョン 8.1.4 でのマイグレーションに関する考慮事項』
- 17 ページの『サーバーへのインストール (Windows の場合)』
- 54 ページの『中間層サーバーへのソース・データベースのマッピング』
- 55 ページの『レプリケーションの使用可能化』
- 56 ページの『サンプルのデータベースとアプリケーションのセットアップ』
- 56 ページの『同期サーバーのサブレットのテスト』

WebSphere Application Server バージョン 5.0 での DB2 Everyplace の構成およびインストール

このセクションでは、WebSphere 環境で実行されるサーバー・アプリケーションとして DB2 Everyplace を構成およびインストールする方法について説明します。以下のトピックを扱います。

- 61 ページの『WebSphere Application Server バージョン 5.0 での DB2 Everyplace の構成およびインストール』
- 61 ページの『構成情報の収集』
- 63 ページの『インストールおよび構成の概要』
- 64 ページの『アプリケーション・サーバーの作成およびインストール』
- 65 ページの『クラスター環境の作成』
- 66 ページの『サーバー・ノードの追加』
- 67 ページの『クラスターの作成』
- 67 ページの『クラスターへの新規サーバーの追加』
- 68 ページの『管理タスク』

- 69 ページの『WAS からの DB2 Everyplace のアンインストール』
- 69 ページの『DB2 Everyplace アプリケーション・サーバーの開始と停止』
- 70 ページの『クラスターの削除』
- 71 ページの『Web サーバー・プラグインの再生成』

WebSphere Application Server バージョン 5.0 での DB2 Everyplace の構成およびインストール

WebSphere Application Server (WAS) に DB2 Everyplace をインストールすることで、DB2 Everyplace およびその他のアプリケーションのための堅固なランタイム環境が用意されます。DB2 Everyplace は WebSphere Application Server バージョン 5 の組み込みバージョンと一緒に出荷されます。DB2 Everyplace およびユーザー独自のアプリケーションに対する J2EE 環境のフル・サポートを希望される場合には、WebSphere Application Server をお勧めします。

このセクションでは、WebSphere 環境で実行されるサーバー・アプリケーションとして DB2 Everyplace を構成およびインストールする方法について説明します。これらの説明は、WAS バージョン 5.0 に適用されます。このトピックには以下の情報が含まれています。

- 構成情報の収集
- インストールおよび構成の概要
- アプリケーション・サーバーの作成とインストール
- クラスター環境の作成
- Web サーバー・プラグインの再生成
- 管理タスク

関連した概念:

- 62 ページの『WAS インストール・スクリプト』

構成情報の収集

手順:

このトピックでは、さまざまな構成タスク中に収集および指定する必要がある情報をリストします。

- `<was_home>` WAS のインストール・ディレクトリー。例えば、NT システムでは `C:\WebSphere\AppServer`、一部の UNIX システムでは `/opt/WebSphere`。
- `<nodename>` DB2 Everyplace がインストールする WebSphere ノードの名前。
- `<virtualhost>` システム上の既存の仮想ホスト。例えば、`default_host`
- `<servername>` 固有のサーバー名。既存のサーバー名は置き換えられ、再構成されます。サーバー名「server1」は許可されません。
- `<ipaddress>` サーバー名の IP アドレス。
- `<dsyinstidir>` DB2 Everyplace のインストール・ディレクトリー。例えば、NT システムでは `c:/DB2Everyplace`、UNIX システムでは `/home/dsyinstance/db2everyplace`。
- `<DB2 UDB version number>` バージョン番号で、整数値 7 または 8。

- `<dsysqllibstidir>` DB2 Everyplace インスタンスのインストール・ディレクトリー。
例えば、NT システムでは `c:/SQLLIB`、UNIX システムでは
`/home/dsyinstance/sqllib`。
- `<username>` JVM が実行される `dsyinstance` ユーザー名。このユーザー名は、
UNIX で WebSphere が root として開始された場合に必要となります。
- `<groupname>` ユーザーが属するグループ名であり、JVM が実行されるときにのグル
ープ名 (オプション)。

関連した概念:

- 『WAS インストール・スクリプト』

関連したタスク:

- 61 ページの『WebSphere Application Server バージョン 5.0 での DB2 Everyplace
の構成およびインストール』
- 65 ページの『クラスター環境の作成』
- 68 ページの『管理タスク』
- 67 ページの『クラスターの作成』
- 67 ページの『クラスターへの新規サーバーの追加』
- 71 ページの『Web サーバー・プラグインの再生成』
- 69 ページの『WAS からの DB2 Everyplace のアンインストール』
- 69 ページの『DB2 Everyplace アプリケーション・サーバーの開始と停止』
- 70 ページの『クラスターの削除』
- 63 ページの『インストールおよび構成の概要』
- 64 ページの『アプリケーション・サーバーの作成およびインストール』

WAS インストール・スクリプト

DB2 Everyplace には、WAS への DB2 Everyplace のインストールに役立つ、以下の 3 つのスクリプトが用意されています。

- `dsyInstallDB2e.jacl` (アプリケーション・サーバーの作成および WAS へのエン
タープライズ・アプリケーションのインストール用)。
- `dsyCreateCluster.jacl` (`dsyInstallDB2e.jacl` スクリプトで作成したサー
バーを、クラスターされた環境で使用できるサーバーに変換します)。
- `dsyCreateClusterMember.jacl` (新規サーバーをクラスターに追加します)。

WAS から DB2 Everyplace をアンインストールするために、4 つ目のスクリプト
(`dysUnInstallDB2e.jacl`) が使用可能です。スクリプト・ファイルはすべて、ディレ
クトリー `<DB2 Everyplace installation root>/Server/installableApps/common` 内か
ら実行されます。インストールおよび管理で必要となるほとんどの場合に、これら
のスクリプトでコマンド行環境を使用することをお勧めします。ケースとしては少
ないですが、WAS 管理コンソールの使用をお勧めすることがあります。

関連したタスク:

- 61 ページの『WebSphere Application Server バージョン 5.0 での DB2 Everyplace
の構成およびインストール』
- 65 ページの『クラスター環境の作成』
- 68 ページの『管理タスク』

- 67 ページの『クラスターの作成』
- 67 ページの『クラスターへの新規サーバーの追加』
- 61 ページの『構成情報の収集』
- 71 ページの『Web サーバー・プラグインの再生成』
- 69 ページの『WAS からの DB2 Everyplace のアンインストール』
- 69 ページの『DB2 Everyplace アプリケーション・サーバーの開始と停止』
- 70 ページの『クラスターの削除』
- 『インストールおよび構成の概要』

インストールおよび構成の概要

手順:

WAS バージョン 5.0 を使用して作業を行うためのシステムのセットアップに関わるメインタスクは以下のとおりです。

- 単一サーバー環境の場合:
 1. アプリケーション・サーバーの作成およびインストール
 2. Web サーバー・プラグインの再生成
 3. 管理タスク (必要に応じて)
- クラスター環境の場合:
 1. クラスターの作成 (スクリプト `dsyInstallDB2e.jacl` で作成されたサーバーを使用します)
 2. Web サーバー・プラグインの再生成
 3. 管理タスク (必要に応じて)

関連した概念:

- 62 ページの『WAS インストール・スクリプト』

関連したタスク:

- 61 ページの『WebSphere Application Server バージョン 5.0 での DB2 Everyplace の構成およびインストール』
- 65 ページの『クラスター環境の作成』
- 68 ページの『管理タスク』
- 67 ページの『クラスターの作成』
- 67 ページの『クラスターへの新規サーバーの追加』
- 61 ページの『構成情報の収集』
- 71 ページの『Web サーバー・プラグインの再生成』
- 69 ページの『WAS からの DB2 Everyplace のアンインストール』
- 69 ページの『DB2 Everyplace アプリケーション・サーバーの開始と停止』
- 70 ページの『クラスターの削除』
- 64 ページの『アプリケーション・サーバーの作成およびインストール』

アプリケーション・サーバーの作成およびインストール

DB2 Everyplace アプリケーション・サーバーは、以下のステップによって、該当する構成パラメーターを使用して作成されます。DB2 Everyplace サーバーのコピーがすでに実行されている場合、次に進む前にサーバーを停止してください。

前提条件:

UNIX 環境の場合、以下のタスクを完了してください。

- ネイティブ・コードを呼び出す JDBC ドライバー用に現行シェル環境変数 `LD_LIBRARY_PATH` をセットアップする。以下のコマンドを入力します。

```
LD_LIBRARY_PATH=JDBC_NATIVE_LIBRARY_PATH export LD_LIBRARY_PATH
```

これは、JDBC ドライバーの必要とするライブラリーが確実に使用可能であるようにするために、WebSphere の各コンポーネントを開始する前に行う必要があります。

- WebSphere Administrative Console を使用して、JDBC ドライバーを手動で JVM クラスパスに追加する。「サーバー」→「アプリケーション・サーバー (Application Servers)」に移動します。右側のワークスペースに、WAS の下で稼働しているアプリケーション・サーバーのリストが表示されます。適切なアプリケーション・サーバーをクリックして、そのサーバーの構成ページを開きます。「追加プロパティ (Additional Properties)」で「プロセス定義 (Process Definition)」をクリックして、プロセス定義ページを開きます。「追加プロパティ (Additional Properties)」で「Java 仮想マシン (Java Virtual Machine)」をクリックして、「Java 仮想マシン (Java Virtual Machine)」ページを開きます。「一般プロパティ (General Properties)」の「クラスパス (Classpath)」で、適切なクラスパスを追加します。

1 つのクラスター内または複数の DB2 Everyplace インストールなどに複数のサーバーが作成される場合は、セットアップ `jac1` ファイルを変更して自動的に JDBC クラスパスを入力するようにすると便利な場合があります。ファイルは、以下の場所にあります。

```
%DSYINSTDIR%/Server/installableApps/common/dsySetupEnv.jac1
```

次のように、セミコロンで区切られたパスとドライバー・クラスパスをエントリーに追加します。

```
set db2ejdbcdrivercp "entry1;/your/class/path/entry2"
```

Windows 環境内でもパス・エントリーにスラッシュ「/」を使用する必要があることに注意してください。

手順:

サーバーを作成するには、以下を入力します。

- NT プラットフォームの場合: `<was_home>%bin%wsadmin.bat -f dsyInstallDB2e.jac1 <nodename> <virtualhost> <servername> <ipaddress> <dsyinstdir> <dsysqllibinstdir> <UDB Version Number> <username> <groupname>`
- Linux または UNIX プラットフォームの場合: `<was_home>/bin/wsadmin.sh -f dsyInstallDB2e.jac1 <nodename> <virtualhost> <servername> <ipaddress> <dsyinstdir> <dsysqllibinstdir> <UDB Version Number> <username> <groupname>`

関連した概念:

- 62 ページの『WAS インストール・スクリプト』

関連したタスク:

- 61 ページの『WebSphere Application Server バージョン 5.0 での DB2 Everyplace の構成およびインストール』
- 『クラスター環境の作成』
- 68 ページの『管理タスク』
- 67 ページの『クラスターの作成』
- 67 ページの『クラスターへの新規サーバーの追加』
- 61 ページの『構成情報の収集』
- 71 ページの『Web サーバー・プラグインの再生成』
- 69 ページの『WAS からの DB2 Everyplace のアンインストール』
- 69 ページの『DB2 Everyplace アプリケーション・サーバーの開始と停止』
- 70 ページの『クラスターの削除』
- 63 ページの『インストールおよび構成の概要』

クラスター環境の作成

手順:

クラスター環境の場合は、以下のとおりです。

- WAS Version 5.0 で DB2 Everyplace Server Cluster を構成するには、Network Deployment マネージャーがインストール済みで、開始されている必要があります。Network Deployment は別個のパッケージとしてインストールされ、WAS の基本インストールと同じマシンにインストールする場合には、デプロイメント・マネージャーに割り当てられたポートが、既存のサーバーまたは将来的に設置するサーバーと競合しないように注意する必要があります。
- クラスターを作成する前に、そのクラスター内の各ノードに、「**複数サーバー構成 (Multiple Server Configuration)**」インストール・オプションを指定してインストールされた DB2 Everyplace のコピーが必要です。
- 続行する前に、ミラー・データベース、ソース・データベース、同期サーバー・メッセージ・データベース、および DB2 Everyplace 同期サーバー制御データベースが構成されていることを確認してください。

クラスター環境で DB2 Everyplace を作成するには、以下の 3 つのステップがあります。

- サーバー・ノードの追加
- クラスターの作成
- クラスターへの新規サーバーの追加

関連した概念:

- 62 ページの『WAS インストール・スクリプト』

関連したタスク:

- 61 ページの『WebSphere Application Server バージョン 5.0 での DB2 Everyplace の構成およびインストール』
- 68 ページの『管理タスク』

- 67 ページの『クラスターの作成』
- 67 ページの『クラスターへの新規サーバーの追加』
- 61 ページの『構成情報の収集』
- 71 ページの『Web サーバー・プラグインの再生成』
- 69 ページの『WAS からの DB2 Everyplace のアンインストール』
- 69 ページの『DB2 Everyplace アプリケーション・サーバーの開始と停止』
- 70 ページの『クラスターの削除』
- 63 ページの『インストールおよび構成の概要』
- 64 ページの『アプリケーション・サーバーの作成およびインストール』

サーバー・ノードの追加

手順:

サーバー・ノードを追加するには、以下のようにします。

1. 管理コンソールをオープンします。
2. ナビゲーション・ツリーで、「システム管理 (System Administration)」 --> 「ノード (Nodes)」 をクリックします。
3. ワークスペースで「ノードの追加 (Add Node)」をクリックし、クラスターに入れるサーバー・ノードを追加します。完全修飾名を使用して、ホスト・フィールドに追加される各ノードを指定します。ノードが見つからない場合は、WAS Deployment Manager からの構成要求のサービスを行う各ノードで、server1 が開始されているかどうかを確認してください。

ノードに対して Node Agent が開始され、<hostnameNetwork> Network という名前のネットワークにそのノードが追加されます。ノードを追加すれば、クラスターを作成できます。

関連した概念:

- 62 ページの『WAS インストール・スクリプト』

関連したタスク:

- 61 ページの『WebSphere Application Server バージョン 5.0 での DB2 Everyplace の構成およびインストール』
- 65 ページの『クラスター環境の作成』
- 68 ページの『管理タスク』
- 67 ページの『クラスターの作成』
- 67 ページの『クラスターへの新規サーバーの追加』
- 61 ページの『構成情報の収集』
- 71 ページの『Web サーバー・プラグインの再生成』
- 69 ページの『WAS からの DB2 Everyplace のアンインストール』
- 69 ページの『DB2 Everyplace アプリケーション・サーバーの開始と停止』
- 70 ページの『クラスターの削除』
- 63 ページの『インストールおよび構成の概要』
- 64 ページの『アプリケーション・サーバーの作成およびインストール』

クラスターの作成

手順:

DB2 Everyplace クラスターを作成するには、`dsyCreateCluster.jacl` スクリプトを使用します。

- NT プラットフォームの場合は、`<was_home>%bin%wsadmin.bat -f dsyCreateCluster.jacl <nodename> <virtualhost> <servername> <ipaddress> <dsyinstdir> <dsysqllibinstdir> <DB2 UDB Version><username> <groupname>` を入力します。
- Linux または UNIX プラットフォームの場合は、`<was_home>%bin%wsadmin.sh -f dsyCreateCluster.jacl <nodename> <virtualhost> <servername> <ipaddress> <dsyinstdir> <dsysqllibinstdir> <DB2 UDB Version><username> <groupname>` を入力します。

実行した後、「DB2Everyplace_Cluster」という名前の新しいクラスターが作成されます。

関連した概念:

- 62 ページの『WAS インストール・スクリプト』

関連したタスク:

- 61 ページの『WebSphere Application Server バージョン 5.0 での DB2 Everyplace の構成およびインストール』
- 65 ページの『クラスター環境の作成』
- 68 ページの『管理タスク』
- 『クラスターへの新規サーバーの追加』
- 61 ページの『構成情報の収集』
- 71 ページの『Web サーバー・プラグインの再生成』
- 69 ページの『WAS からの DB2 Everyplace のアンインストール』
- 69 ページの『DB2 Everyplace アプリケーション・サーバーの開始と停止』
- 70 ページの『クラスターの削除』
- 63 ページの『インストールおよび構成の概要』
- 64 ページの『アプリケーション・サーバーの作成およびインストール』

クラスターへの新規サーバーの追加

手順:

上記で作成したクラスターに新規の `clusterMember` を追加するには、以下のようにします。

1. 55 ページの『レプリケーションの使用可能化』の説明を参照してください。
2. 以下のコマンドを発行します。
 - NT プラットフォームの場合は、`<was_home>%bin%wsadmin.bat -f dsyCreateCluster.jacl <nodename> <virtualhost> <servername> <ipaddress> <dsyinstdir> <dsysqllibinstdir> <DB2 UDB Version><username> <groupname>` を入力します。

- Linux または UNIX プラットフォームの場合は、
`<was_home>%bin%wsadmin.sh -f dsyCreateCluster.jacl <nodename>
<virtualhost> <servername> <ipaddress> <dsyinstdir> <dsysqllibinstdir> <DB2
UDB Version><username> <groupname>` を入力します。

注: クラスタ環境に関する重要な情報については、DB2 Everyplace インストール・トピックを参照してください。

関連した概念:

- 62 ページの『WAS インストール・スクリプト』

関連したタスク:

- 61 ページの『WebSphere Application Server バージョン 5.0 での DB2 Everyplace の構成およびインストール』
- 65 ページの『クラスタ環境の作成』
- 『管理タスク』
- 67 ページの『クラスタの作成』
- 61 ページの『構成情報の収集』
- 71 ページの『Web サーバー・プラグインの再生成』
- 69 ページの『WAS からの DB2 Everyplace のアンインストール』
- 69 ページの『DB2 Everyplace アプリケーション・サーバーの開始と停止』
- 70 ページの『クラスタの削除』
- 63 ページの『インストールおよび構成の概要』
- 64 ページの『アプリケーション・サーバーの作成およびインストール』

管理タスク

以下の 3 つの管理タスクを実行することができます。

- WAS からの DB2 Everyplace のインストール
- DB2 Everyplace アプリケーション・サーバーの開始と停止
- クラスタの削除

関連した概念:

- 62 ページの『WAS インストール・スクリプト』

関連したタスク:

- 61 ページの『WebSphere Application Server バージョン 5.0 での DB2 Everyplace の構成およびインストール』
- 65 ページの『クラスタ環境の作成』
- 67 ページの『クラスタの作成』
- 67 ページの『クラスタへの新規サーバーの追加』
- 61 ページの『構成情報の収集』
- 71 ページの『Web サーバー・プラグインの再生成』
- 69 ページの『WAS からの DB2 Everyplace のアンインストール』
- 69 ページの『DB2 Everyplace アプリケーション・サーバーの開始と停止』
- 70 ページの『クラスタの削除』

- 63 ページの『インストールおよび構成の概要』
- 64 ページの『アプリケーション・サーバーの作成およびインストール』

WAS からの DB2 Everyplace のアンインストール

手順:

DB2 Everyplace アプリケーションをアンインストールするには、以下のコマンドを発行します。

- `<was_home>% wsadmin.bat -f dsyUnInstallDB2e.jacl <nodename> <servername>`

除去された DB2 Everyplace アプリケーション・サーバー

db2everyplaceapplication に関連付けられたポートが、このアプリケーション・サーバーがアンインストールされた後でも仮想ホストにまだ残っている場合があります。これらの残ったポートは、安全に除去することができます。

関連した概念:

- 62 ページの『WAS インストール・スクリプト』

関連したタスク:

- 61 ページの『WebSphere Application Server バージョン 5.0 での DB2 Everyplace の構成およびインストール』
- 65 ページの『クラスター環境の作成』
- 68 ページの『管理タスク』
- 67 ページの『クラスターの作成』
- 67 ページの『クラスターへの新規サーバーの追加』
- 61 ページの『構成情報の収集』
- 71 ページの『Web サーバー・プラグインの再生成』
- 『DB2 Everyplace アプリケーション・サーバーの開始と停止』
- 70 ページの『クラスターの削除』
- 63 ページの『インストールおよび構成の概要』
- 64 ページの『アプリケーション・サーバーの作成およびインストール』

DB2 Everyplace アプリケーション・サーバーの開始と停止

DB2 Everyplace サーバーを開始および停止するには、2 つの方法があります。コマンド・プロンプトを使用することができます。Network Deployment 環境で実行している場合は、管理コンソールの使用をお勧めします。

前提条件:

コマンドを発行する前に、サーバーを開始するコマンドを発行するシェルで DISPLAY 環境変数を設定する必要があります。例えば、`export DISPLAY=:0.0` というようにします。

手順:

コマンド・プロンプトを使用して DB2 Everyplace アプリケーション・サーバーを開始および停止するには、以下のコマンドを入力します。

- Windows プラットフォームの場合: `<was_home>%bin%dsysync.bat <servername>`

- LINUX または UNIX プラットフォームの場合: `<was_home>/bin/dsync.sh`
`<servername>`

サーバー名は、作成したサーバーの正確なストリング・マッチです。stopServer コマンドはサーバーを停止します。

クラスター環境では、作成したクラスターの開始および停止、またはそれ以外の場合のクラスターの操作は、管理コンソールで非常に簡単になります。クラスターを開始および停止するには、<ご使用のネットワーク> --> 「サーバー」 --> 「クラスター」と進みます。クラスター名の左側にあるチェック・ボックスをクリックしてクラスターを選択してから、「開始」または「停止」をクリックします。

クラスター・メンバーがコンソールに使用不可としてリストされた場合は、ノード・エージェントがノード上で開始されていること、およびノード構成がデプロイメント・マネージャー構成と同期していることを確認してください。ノードの同期状況は、「システム管理」 -> 「ノード」で表示することができます。

関連した概念:

- 62 ページの『WAS インストール・スクリプト』

関連したタスク:

- 61 ページの『WebSphere Application Server バージョン 5.0 での DB2 Everyplace の構成およびインストール』
- 65 ページの『クラスター環境の作成』
- 68 ページの『管理タスク』
- 67 ページの『クラスターの作成』
- 67 ページの『クラスターへの新規サーバーの追加』
- 61 ページの『構成情報の収集』
- 71 ページの『Web サーバー・プラグインの再生成』
- 69 ページの『WAS からの DB2 Everyplace のアンインストール』
- 『クラスターの削除』
- 63 ページの『インストールおよび構成の概要』
- 64 ページの『アプリケーション・サーバーの作成およびインストール』

クラスターの削除

手順:

クラスターを削除するには、以下のようにします。

1. 管理コンソールをオープンします。
2. <ご使用のネットワーク> --> 「アプリケーション」 --> 「エンタープライズ・アプリケーション」をナビゲートして、DB2 Everyplace エンタープライズ・アプリケーションを停止して除去します。
3. アプリケーション・サーバー名の左にあるチェック・ボックスをクリックします。「サーバーの停止 (Stop servers)」をクリックして、DB2 Everyplace クラスターのクラスター・メンバーである実行中のサーバーを停止します。

4. <ご使用のネットワーク> --> 「サーバー」 --> 「クラスター」 をナビゲートして、停止された DB2 Everyplace クラスターを除去します。サーバー・クラスター名の左にあるチェック・ボックスを選択して、「削除」をクリックします。

関連した概念:

- 62 ページの『WAS インストール・スクリプト』

関連したタスク:

- 61 ページの『WebSphere Application Server バージョン 5.0 での DB2 Everyplace の構成およびインストール』
- 65 ページの『クラスター環境の作成』
- 68 ページの『管理タスク』
- 67 ページの『クラスターの作成』
- 67 ページの『クラスターへの新規サーバーの追加』
- 61 ページの『構成情報の収集』
- 『Web サーバー・プラグインの再生成』
- 69 ページの『WAS からの DB2 Everyplace のアンインストール』
- 69 ページの『DB2 Everyplace アプリケーション・サーバーの開始と停止』
- 63 ページの『インストールおよび構成の概要』
- 64 ページの『アプリケーション・サーバーの作成およびインストール』

Web サーバー・プラグインの再生成

WebSphere プラグイン構成ファイルは、WebSphere で実行されている適切なアプリケーション・サーバーに要求をリダイレクトするときの構成情報を提供します。

手順:

DB2 Everyplace の Web サーバー・プラグイン構成を更新するには、以下のコマンドを発行します。

- NT プラットフォームの場合: `<was_home>%bin%GenPluginCfg.bat`
- LINUX または UNIX プラットフォームの場合:
`<was_home>/bin/GenPluginCfg.sh`

注: LINUX および UNIX の場合、円記号 (¥) ではなく、スラッシュ (/) を使用してください。

新規のプラグイン構成ファイルを生成した後、Web サーバーの場所によっては、このファイルをほかの場所にコピーしなければならない場合があります。フロントエンド HTTP サーバーが (WAS のインストール場所以外の) 別のサーバーにある場合は、それが構成された適切なサーバーに必ずコピーしてください。生成されたプラグイン構成ファイルは通常、`<was_home>/config/cells/plugin-cfg.xml` にあります。WebSphere Network Deployment 構成を実行している場合、プラグイン・ファイルは `[ND home]/config/cells/plugin-cfg.xml` としてネットワーク・デプロイメント・ディレクトリーに入っています。

注: また、このプラグインを管理コンソールで再生成することもできます。<ご使用のネットワーク> 「環境」 --> 「Web サーバー・プラグインの更新」 にナビゲートします。「OK」をクリックします。

関連した概念:

- 62 ページの『WAS インストール・スクリプト』

関連したタスク:

- 61 ページの『WebSphere Application Server バージョン 5.0 での DB2 Everyplace の構成およびインストール』
- 65 ページの『クラスター環境の作成』
- 68 ページの『管理タスク』
- 67 ページの『クラスターの作成』
- 67 ページの『クラスターへの新規サーバーの追加』
- 61 ページの『構成情報の収集』
- 69 ページの『WAS からの DB2 Everyplace のアンインストール』
- 69 ページの『DB2 Everyplace アプリケーション・サーバーの開始と停止』
- 70 ページの『クラスターの削除』
- 63 ページの『インストールおよび構成の概要』
- 64 ページの『アプリケーション・サーバーの作成およびインストール』

複数サーバー環境の構成

このセクションでは、複数サーバー環境の構成に関して説明します。以下のトピックを扱います。

- 『複数サーバー環境の構成』
- 73 ページの『サーバー・グループおよびクローン』
- 74 ページの『計画の考慮事項およびヒント』
- 74 ページの『アプリケーション・サーバーのクローンを作成するためのセットアップ』
- 76 ページの『アプリケーション・サーバーのクローンの作成』
- 77 ページの『構成後のタスク』

複数サーバー環境の構成

複数サーバー環境では、DB2 Everyplace は WebSphere Application Server (WAS) テクノロジーを活用することで、異なるサーバー間で負荷を分散させ、サーバー間のユーザー負荷を動的に管理します。着信作業要求はアプリケーション・サーバー、およびその要求を最も効率よく処理できるその他のオブジェクトに分散されます。WAS はサーバー・グループおよびクローンを使用してワークロード管理をインプリメントします。

前提条件:

複数サーバー環境を使用するためには、以下のソフトウェアがインストールされている必要があります。

- DB2 ユニバーサル・データベース バージョン 7.2.1 (フィックスパック 5)、JDBC 2.0 対応
- DB2 Everyplace バージョン 8.1
- WebSphere Application Server バージョン 4.0 (フィックスパック 2 およびフィックスパック 3 以降)

手順:

1. アプリケーション・サーバー・クローンを作成するようにセットアップします。
2. アプリケーション・サーバー・クローンを作成します。
3. 構成後のタスクを完了させます。

関連した概念:

- 『サーバー・グループおよびクローン』
- 74 ページの『計画の考慮事項およびヒント』

サーバー・グループおよびクローン

サーバー・グループには、アプリケーション・サーバー (およびその内容) のテンプレートが含まれています。これは、ユーザーがセットアップしたサーバーに基づいたもので、そのサーバーのコピーを作成およびするために使用されます。これらのコピーはクローンと呼ばれます。クローンを作成する作業はクローン作成と呼ばれます。

クローン作成は、アプリケーション・サーバーのパフォーマンスと可用性を向上させるための高度な技法です。クローン作成を行うことにより、ワークロード管理システムは、サーバー・グループ内のクローン間でアプリケーション・サーバーのワークロードを透過的に平衡させ、失敗したアプリケーション・インスタンスからアクティブなクローンに、サービスを中断させることなくユーザーを自動的に切り替えられるようになります。クローン作成はユーザーが意識することなく行われるため、効率と信頼性の高い実稼働環境を維持するために、きわめて重要な技法となります。

サーバー・グループとは、アプリケーション・サーバーを論理的に表したものです。サーバー・グループは実際のアプリケーション・サーバーと同じ構造および属性を備えています。しかし、どのノードとも関連付けられておらず、また、いかなるノードで実行されるいかなる実際のサーバー・プロセスとも対応していません。これに対して、サーバー・グループから作成されるクローンは、実ノードで実行される実際のアプリケーション・サーバーを表します。

クローンは、作成元のサーバー・グループと同一であり、同一のアプリケーション・サーバーを作成することができます。サーバー・リソースに対する要求はどのサーバー・クローンでも処理できるため、これらのコピーを使用してワークロード管理を行うことができます。サーバー・グループを開始または停止させると、サーバー・クローンは自動的に開始または停止します。サーバー・グループに対して行った変更は、そのサーバー・グループが再始動したときに、対応するクローンに伝搬されます。

詳細については、「*IBM WebSphere V4.0 Advanced Edition Scalability and Availability*」を参照してください。この Redbook およびその他の Redbooks は、<http://www.redbooks.ibm.com/> で検索することができます。

関連した概念:

- 74 ページの『計画の考慮事項およびヒント』

関連したタスク:

- 『アプリケーション・サーバーのクローンを作成するためのセットアップ』
- 76 ページの『アプリケーション・サーバーのクローンの作成』
- 77 ページの『構成後のタスク』

計画の考慮事項およびヒント

サーバー・グループにおけるロード・バランシングの効果を活用するためには、この複雑な環境をどのようにセットアップするのかを十分に考慮することが重要です。以下の事項について考慮してください。

- ソース・データベース、DB2 Everyplace の制御データベース (DSYCTLDB) およびメッセージ・データベース (DSYMSGDB)、および WebSphere Application Server のデータベース・リポジトリ (WAS40) を、リモート・サーバーにインストールする。これらのデータベースのうちの 1 つ以上を別個のサーバーで実行すると、Single Point of Failure を避けることができます。
- WebSphere Application Server および DB2 Everyplace をインストールする前に、DB2 Everyplace 制御データベースおよびメッセージ・データベース、ならびに WebSphere Application Server データベース・リポジトリをカタログする。事前にこれを行っておくと、余分な構成タスクを回避できます。
- DPropR がレプリケーションのために使用できるように、各ミラー・データベースをローカル・データベースとしてカタログする。
- セキュリティー対策用に、HTTP サーバーを別の物理マシンにインストールする。これを簡単に行う方法としては、ローカル WAS データベース以外に何も含まないサーバーに WAS をインストールし、すべてのセットアップが終わった後にプラグイン構成を WebSphere にコピーする方法があります。

関連した概念:

- 73 ページの『サーバー・グループおよびクローン』

関連したタスク:

- 『アプリケーション・サーバーのクローンを作成するためのセットアップ』
- 76 ページの『アプリケーション・サーバーのクローンの作成』
- 77 ページの『構成後のタスク』

アプリケーション・サーバーのクローンを作成するためのセットアップ

このトピックでは、サーバー・グループからサーバーのクローンを作成する前に行っておく必要のあるセットアップ作業について説明します。

このタスクは、複数サーバー環境の構成のメインタスクの一部です。このステップを完了したら、72 ページの『複数サーバー環境の構成』に戻ります。

手順:

1. サーバー・グループ内のすべてのサーバーに、完全修飾されたホスト名を使用し、静的 IP アドレスが割り当てられているようにします。
2. DB2 ユニバーサル・データベース バージョン 7.2.1 をインストールします。
 - a. 各物理サーバーに DB2 ユニバーサル・データベース バージョン 7.2.1 をインストールします。

- b. サーバーをリブートした後で、フィックスパック 5 をインストールします。可能な場合には、デフォルトをそのまま受け入れてください。
 - c. すべての DB2 サービスを停止します。
Windows NT ワークステーションを使用している場合には、JDBC レベルを 2.0 に切り替えてください。¥Program Files¥java12 ディレクトリー内の usejdbc2.bat ファイルを変更してください。
 - d. DB2 サービスを再始動します。
3. WebSphere Application Server バージョン 4.0 (FixPak 2 および FixPak 3) をインストールします。
 4. 各物理サーバーに IBM DB2 Everyplace をインストールします。インストール・タイプとして「複数サーバー環境 (Multiple Server Environment)」を選択してください。
 5. サーバー・グループ内の他の各物理サーバーごとにステップ 1 ~ 5 を繰り返します。
 6. WAS サーバーを選択し、選択した WAS サーバーに IBM_DB2_Everyplace.ear ファイルをインストールします。

- a. スクリプトを実行します。
 - WAS サーバーが UNIX プラットフォームにある場合には、
\${DSYINSTDIR}/Server/installableApps/unix にあるスクリプトを実行します。

```
dsy_was40_install.sh "$(WebSphere Application Server installation home)" adminnodename "$DSYINSTDIR" "$DSYQLLIBINSTDIR"
```

- WAS サーバーが Windows プラットフォームにある場合には、
%DSYINSTDIR%\Server¥installableApps¥nt にあるスクリプトを実行します。

```
dsy_was40_install.bat "WebSphere Application Server installation home" adminnodename "%DSYINSTDIR%" "%DSYQLLIBINSTDIR%"
```

このコマンドは、DB2 Everyplace 上にアプリケーション・サーバーを作成し、DB2 Everyplace EAR ファイルをインストールします。さらに、サブレット・リダイレクターが要求の経路指定に使用するプラグイン構成を再生成し、DB2 Everyplace 同期サーバーを開始します。

- b. Web ブラウザーをオープンして、DB2 Everyplace EAR ファイルがインストールされていることを検査します。 <http://hostname/db2e/db2erdb> と入力してください。サーバーが実行されている場合には、サブレット名およびその他の関連情報を含むメッセージが戻されます。

関連した概念:

- 73 ページの『サーバー・グループおよびクローン』
- 74 ページの『計画の考慮事項およびヒント』

関連したタスク:

- 76 ページの『アプリケーション・サーバーのクローンの作成』
- 77 ページの『構成後のタスク』

アプリケーション・サーバーのクローンの作成

このセクションには、サーバー・グループおよびクローンの作成方法に関する概要が含まれています。

注: サーバーをレプリケーション目的のみに使用している場合には、DB2 Everyplace サーバー・グループにクローンを追加しないことをお勧めします。同期要求がレプリケーション・サーバーに送信された場合でも、レプリケーション・サーバーはクライアントに応答しません。

このタスクは、複数サーバー環境の構成のメインタスクの一部です。このステップを完了したら、72 ページの『複数サーバー環境の構成』に戻ります。

前提条件:

アプリケーション・サーバーのクローンを作成する前に、74 ページの『アプリケーション・サーバーのクローンを作成するためのセットアップ』で説明されているように、いくつかのセットアップ作業を実行しなければなりません。

手順:

アプリケーション・サーバーのクローンを作成するには、以下のようになります。

- クローンを作成するアプリケーション・サーバーを停止します。
 - WebSphere 管理コンソールをオープンし、「**WebSphere 管理可能ドメイン**」→「**ノード**」→「**ドメイン名**」→「**アプリケーション・サーバー**」→「**IBM DB2 Everyplace アプリケーション・サーバー**」と選択します。
 - アプリケーション・サーバーを右マウス・ボタンでクリックし、「**停止**」を選択します。
- アプリケーション・サーバーを右マウス・ボタンでクリックし、「**サーバー・グループの作成 (Create Server Group)**」を選択して、新規サーバー・グループを作成します。「**サーバー・グループの作成 (Create Server Group)**」ウィンドウで、新規サーバー・グループの名前 (DB2 Everyplace Server Group など) を入力します。「**OK**」をクリックします。

これで、サーバー・グループが作成され、オリジナルのアプリケーション・サーバーがそのサーバー・グループ内のクローンとなりました。
- 管理コンソールによってプロンプトが出された場合に、展開された EAR ファイルを他のアプリケーション・サーバーにコピーします。
- 各ノードを右マウス・ボタンでクリックし、「**プラグイン構成の再生成 (Regenerate Plugin Config)**」を選択して、システムが各クローンを認識するようにします。
- 1 つのノードを選択し、`$WAS_HOME/config/plugin-cfg.xml` ファイルをユーザーのフロントエンド IBM HTTP サーバーにコピーします。
- 各クローンごとに異なるサーバー・ポートを指定します。
 - 「**ノード**」→「**ノード名 (nodename)**」→「**アプリケーション・サーバーのクローン名**」と選択します。
 - 右側のペインで「**サービス (Services)**」に進み、「**Web コンテナ (Web Container)**」を選択します。「**編集**」をクリックします。

- c. プロパティ・ウィンドウで「**トランスポート (Transport)**」タブをクリックし、ポート番号をメモします。
 - d. 右側のペインで「**システム・プロパティ (System Properties)**」に進み、アプリケーション・サーバー・クローンの名前の値の組 `DSYGdflt.Server.Port, transport_port_number` を入力します。
 - e. サーバーがすでに実行されている場合には、それを停止します。
複数サーバー環境のトポロジーが階層状になっている場合には、各サーバーについて、そのサーバーのプロパティに以下の固有値を定義する必要があります。
 - `DSYGdflt.Trace.Path = log_directory`
 - `DSYGdflt.Server.Name = UniqueName` (スペースを含まない固有の名前を入力してください)
7. 複数の異なる Web グループをサポートするために仮想ホストを使用している場合には、仮想ホストのリストに同じポート番号を追加する必要があります。
 - a. 「**WebSphere 管理可能ドメイン**」->「**仮想ホスト**」と選択します。
 - b. 右側のペインで、「**追加**」をクリックして、事前に調べたポート番号を入力します。
 - c. 「**適用**」をクリックします。
 8. 各ノードを右マウス・ボタンでクリックし、「**プラグイン構成の再生成 (Regenerate Plugin Config)**」を選択して、システムが各クローンを認識するようにします。
 9. 1 つのノードを選択し、`$WAS_HOME/config/plugin-cfg.xml` ファイルをユーザーのフロントエンド IBM HTTP サーバーにコピーします。

上記の作業を完了後に、複数サーバー環境を開始することができます。

複数サーバー環境を開始するには、新規サーバー・グループを右マウス・ボタンでクリックして、「**開始 (Start)**」を選択してください。そのサーバー・グループに属するすべてのクローンが開始し、サブレット・リダイレクターを備えたフロントエンド HTTP サーバーがすべての要求の受信を開始します。

関連した概念:

- 73 ページの『サーバー・グループおよびクローン』
- 74 ページの『計画の考慮事項およびヒント』

関連したタスク:

- 74 ページの『アプリケーション・サーバーのクローンを作成するためのセットアップ』
- 『構成後のタスク』

構成後のタスク

このトピックでは、複数サーバー環境の管理に役立つ構成後のタスクについて説明します。

このタスクは、複数サーバー環境の構成のメインタスクの一部です。このステップを完了したら、72 ページの『複数サーバー環境の構成』に戻ります。

手順:

- 各サーバーにあるそれぞれのミラー・データベース、制御データベース、およびソース・データベースについて、データベース接続の数を構成します。ソース・データベースにおける JDBC データベース接続の数が、制御データベースおよびミラー・データベースにおけるすべてのデータベース接続の合計よりも少ない場合には、ソース・データベースはデータベース要求を拒否し始めます。

- 各ソース・データベースごとに MAXAPPLS パラメーターを構成して、すべての同期サーバーからの接続の最大合計数よりも大きな値を指定します。同期サーバーが行う接続のデフォルト数は、

`%DSYINSTDIR%\%Server%\properties\com\ibm\mobileservices\` ディレクトリで定義されています。

- 各ソース・データベースおよび制御データベースごとに、DB2 コマンド行から次のコマンドを発行します。

```
update database configuration for database using MAXAPPLS new_value
```

- DSYGdflt.properties 値の中で、**Jdbc.MaxConnections** パラメーターの値を、前のコマンドで MAXAPPLS に設定した値を超えない値に設定します。

- MAXAGENTS パラメーターを使用して、データベース・マネージャーによって許容されるデータベース接続の全体的な最大数を構成します。

MAXAGENTS の値は、各同期サーバーが使用することを試みる MAXAPPLS (つまり、データベース接続) の合計数以上でなければなりません。

```
update dbm cfg using MAXAGENTS sum of MAXAPPLS for each mirror and source database + MAXAPPLS for dsyctldb + MAXAPPLS for DSYMSGDB
```

- HTTP サーバーのコンテンツのキャッシュが使用不可になっていることを確認します。そのためには、*IBM HTTP Server\conf\httpd.conf* ファイルで以下の設定値を変更してください。

```
#AfpEnable  
#AfpCache on  
#AfpLogFile "C:/IBMHTT~1/logs/afpalog" V-ECLF
```

関連した概念:

- 73 ページの『サーバー・グループおよびクローン』
- 74 ページの『計画の考慮事項およびヒント』

関連したタスク:

- 74 ページの『アプリケーション・サーバーのクローンを作成するためのセットアップ』
- 76 ページの『アプリケーション・サーバーのクローンの作成』

モバイル・デバイスでのインストール後の作業

このセクションでは、モバイル・デバイスのインストール後の作業について説明します。

手順:

DB2 Everyplace Mobile Application Builder のダウンロード:

DB2 Everyplace Mobile Application Builder などの既製の C/C++ および Java 開発ツールを使用して、ワークステーションで DB2 Everyplace アプリケーションを開発することができます。この開発ツールを使用すると、モバイル・デバイス用の DB2 Everyplace アプリケーションの構築およびテストを行うことができます。DB2 Everyplace Mobile Application Builder を使用する予定の場合、www.ibm.com/software/data/db2/everyplace/downloads.html の Web サイトからダウンロードすることも、Software Development Kit CD からインストールすることもできます。

DB2 Everyplace サンプル・アプリケーションのテスト:

DB2 Everyplace サンプル・アプリケーションをテストし、使用することができます。詳細については、113 ページの『Visiting Nurse (巡回医療サービス) サンプル・アプリケーションの概要』を参照してください。このトピックでは、Visiting Nurse (巡回医療サービス) サンプル・アプリケーションについて説明し、このサンプルを Palm OS モバイル・デバイスで使用方法を示します。

関連したタスク:

- 32 ページの『モバイル・デバイスのインストール』

関連した概念:

- 113 ページの『Visiting Nurse (巡回医療サービス) サンプル・アプリケーションの概要』

第 3 部 同期セットアップ

第 3 章 モバイル・デバイスを同期するためのセットアップ	83
Palm モバイル・デバイスまたはエミュレーターを同期するためのセットアップ	83
Palm OS モバイル・デバイスを同期するためのセットアップ	83
Palm OS モバイル・デバイスまたはエミュレーターのセットアップ	84
Palm OS モバイル・デバイスまたはエミュレーターへのファイルのインストール	85
Palm OS モバイル・デバイスまたはエミュレーターのデータの同期および検査	87
Symbian OS v6.0 モバイル・デバイスを同期するためのセットアップ	88
Symbian OS V6.0 モバイル・デバイスを同期するためのセットアップおよび構成	88
ワークステーションでの m-Router Connect の構成	89
デバイスでの m-Router Connect の構成	90
デバイスでの ISync の構成	90
Symbian OS V6.0 デバイスでのデータの同期	91

第 3 章 モバイル・デバイスを同期するためのセットアップ

この章では、モバイル・デバイスを同期するためのセットアップについて説明します。以下のトピックを扱います。

- 『Palm モバイル・デバイスまたはエミュレーターを同期するためのセットアップ』
- 88 ページの『Symbian OS v6.0 モバイル・デバイスを同期するためのセットアップ』

Palm モバイル・デバイスまたはエミュレーターを同期するためのセットアップ

このセクションでは、Palm モバイル・デバイスまたはエミュレーターを同期するためのセットアップについて説明します。以下のトピックを扱います。

- 『Palm OS モバイル・デバイスを同期するためのセットアップ』
- 84 ページの『Palm OS モバイル・デバイスまたはエミュレーターのセットアップ』
- 85 ページの『Palm OS モバイル・デバイスまたはエミュレーターへのファイルのインストール』
- 87 ページの『Palm OS モバイル・デバイスまたはエミュレーターのデータの同期および検査』

Palm OS モバイル・デバイスを同期するためのセットアップ

このセクションでは、Palm OS モバイル・デバイスを同期するためのセットアップ、構成、および同期に関係するステップについて説明します。

手順:

Palm OS モバイル・デバイスを同期するためにセットアップするには、以下のようになります。

1. Palm OS モバイル・デバイスまたはエミュレーターをセットアップおよび構成します。
2. Palm OS モバイル・デバイスまたはエミュレーターにファイルをインストールします。
3. Palm OS モバイル・デバイスまたはエミュレーターのデータの同期および検査を行います。

関連したタスク:

- 88 ページの『Symbian OS V6.0 モバイル・デバイスを同期するためのセットアップおよび構成』

Palm OS モバイル・デバイスまたはエミュレーターのセットアップ

このトピックでは、Palm OS モバイル・デバイスまたはエミュレーターを同期するためのセットアップ方法および構成について説明します。

このタスクは、Palm OS モバイル・デバイスを同期するためのセットアップのメインタスクの一部です。このステップを完了したら、83 ページの『Palm OS モバイル・デバイスを同期するためのセットアップ』に戻ります。

手順:

Palm OS モバイル・デバイス:

Palm OS デバイスを使用して同期をテストする前に、このデバイスへの TCP/IP 接続を行う必要があります。TCP/IP 接続のセットアップは、Windows リモート・アクセス・サービス、またはシェアウェア・ユーティリティの Mocha W32 PPP を使用して行うことができます。Palm OS デバイスで TCP/IP 接続を確立するときには、ワークステーションで Windows リモート・アクセス・サービス、または Mocha W32 PPP が実行されている必要があります。

Palm OS デバイスには、HotSync Manager アプリケーションが付属しています。このアプリケーションは、連絡先や処理待ちリストなどの個人情報を同期させるためにユーザーのワークステーションで実行されます。ほとんどの Palm OS デバイスは、COM ポートを介してワークステーションと接続します。HotSync Manager、Mocha W32 PPP、または リモート・アクセス・サービスを正しく機能させるには、この COM ポートにアクセスさせる必要があります。競合を回避するために、リモート・アクセス・サービスまたは Mocha W32 PPP を開始する前に HotSync Manager を終了させる必要があります。同様に、HotSync Manager を使用したい場合には、リモート・アクセス・サービスまたは Mocha W32 PPP を終了させる必要があります。

Mocha WP2 PPP をインストールし、構成するには、以下のようになります。

1. W32 PPP を <http://www.mochasoft.dk/> からダウンロードします。
2. Mocha W32 PPP をワークステーションにインストールします。
3. 85 ページの『Palm OS モバイル・デバイスまたはエミュレーターへのファイルのインストール』の指示に従って Palm OS デバイスを構成します。

Palm OS エミュレーター:

Palm OS エミュレーターは、下記の Palm OS の Web サイトからダウンロードすることができます。

<http://www.palmos.com/dev/tech/tools/emulator/>

エミュレーターをダウンロードした後で、ファイルをディレクトリーに unzip してください。

Palm OS エミュレーターを実行するためには、ROM イメージ・ファイルが必要です。ROM イメージ・ファイルは、Palm の Solution Provider Program に加入して Palm から入手することも、Palm OS デバイスから ROM イメージをダウンロード

することもできます。Palm の Solution Provider Program については、www.palmos.com/dev/ を参照してください。

Palm OS デバイスから ROM イメージを転送するには、以下のようになります。

1. Palm OS デバイ스에組み込まれている、ROM Transfer.prc をインストールするためのインストール・ツールを使用して、Palm OS デバイスと同期させてこのプログラムをインストールします。ROM Transfer.prc ファイルは Palm OS エミュレーターに付属しています。
2. Emulator.exe を実行して Palm OS エミュレーターを開始します。
3. Palm OS エミュレーター・ウィンドウで「**Download**」をクリックします。
4. Palm OS エミュレーターで表示される指示に従って ROM イメージを転送します。

ROM イメージをインストールした後で、同期のテスト用にエミュレーターを構成してください。

関連したタスク:

- 『Palm OS モバイル・デバイスまたはエミュレーターへのファイルのインストール』
- 87 ページの『Palm OS モバイル・デバイスまたはエミュレーターのデータの同期および検査』
- 88 ページの『Symbian OS V6.0 モバイル・デバイスを同期するためのセットアップおよび構成』

Palm OS モバイル・デバイスまたはエミュレーターへのファイルのインストール

このトピックでは、Palm OS モバイル・デバイスまたはエミュレーターにファイルをインストールする方法について説明します。

このタスクは、Palm OS モバイル・デバイスを同期するためのセットアップのメインタスクの一部です。このステップを完了したら、83 ページの『Palm OS モバイル・デバイスを同期するためのセットアップ』に戻ります。

手順:

Palm OS モバイル・デバイス:

Palm OS デバイスが DB2 Everyplace 同期サーバーに接続されると、必要なファイルを Palm OS デバイスにインストールできるようになります。

1. DB2 Everyplace の Install on Mobile Device ツールを使用して DB2 Everyplace をインストールします。Install on Mobile Device ツールは、Windows の「スタート」メニューの「**IBM DB2 Everyplace**」フォルダーから使用できます。
2. HotSync 操作を実行して Palm OS デバイスへのファイルのインストールを完了させ、HotSync マネージャーをクローズします。
3. Palm OS の「**Prefs**」アプリケーションを開始します。
4. 「プリファレンス (Preference)」ウィンドウの右上隅にあるメニュー・タイトルをクリックし、「**ネットワーク (Network)**」を選択します。

5. 「**接続 (Connect)**」をクリックします。デバイスの接続に失敗した場合は、Mocha W32 PPP または Windows リモート・アクセス・サービスが正しく構成されていることを確認してください。
6. 「**OK**」をクリックします。「プロパティ (Properties)」ウィンドウがクローズします。

Palm OS エミュレーター:

Palm OS エミュレーターをセットアップして ROM イメージを入手した後で、DB2 Everyplace 同期クライアント、サンプル・ファイル、および IBM Sync アプリケーションを Palm OS エミュレーターにインストールしてください。Palm OS エミュレーターにファイルをインストールするには、以下のようになります。

1. Palm OS エミュレーターを開始します。
2. エミュレーターを右マウス・ボタンでクリックして「**新規**」を選択します。
3. 「**ROM ファイル (ROM File)**」プッシュボタンをクリックし、「**その他**」を選択します。入手した ROM ファイルをオープンします。
4. エミュレーターの「**デバイス (Device)**」、「**スキン (Skin)**」、および「**RAM サイズ (RAM Size)**」を選択します。「**デバイス (Device)**」のタイプは、入手した ROM イメージと互換性のあるものでなければなりません。
5. 「**OK**」をクリックします。Palm OS デバイス・エミュレーションが開始されます。
6. Palm OS エミュレーター・ウィンドウを右マウス・ボタンでクリックして、「**アプリケーション/データベースのインストール (Install Application/Database)**」->「**その他**」と選択します。あるいは、ファイルを Palm OS エミュレーター・ウィンドウにドラッグ・アンド・ドロップまたはコピー・アンド・ペーストすることもできます。
7. 34 ページの『Palm OS デバイスへの DB2 Everyplace ファイルのインストール』で説明されている方法で、DB2 Everyplace インストール・ディレクトリーからアプリケーションをインストールします。
8. Palm OS エミュレーターを右マウス・ボタンでクリックして「**リセット (Reset)**」を選択します。Palm OS エミュレーターがリセットされます。
9. Palm OS エミュレーターを右マウス・ボタンでクリックして「**設定 (Settings)**」->「**プロパティ (Properties)**」を選択します。
10. 「**NetLib 呼び出しのホスト TCP/IP へのリダイレクト (Redirect NetLib calls to host TCP/IP)**」を選択し、「**OK**」をクリックします。「プロパティ (Properties)」ウィンドウがクローズします。

関連したタスク:

- 84 ページの『Palm OS モバイル・デバイスまたはエミュレーターのセットアップ』
- 87 ページの『Palm OS モバイル・デバイスまたはエミュレーターのデータの同期および検査』
- 88 ページの『Symbian OS V6.0 モバイル・デバイスを同期するためのセットアップおよび構成』

Palm OS モバイル・デバイスまたはエミュレーターのデータの同期および検査

このタスクは、Palm OS モバイル・デバイスを同期するためのセットアップのメインタスクの一部です。このステップを完了したら、83 ページの『Palm OS モバイル・デバイスを同期するためのセットアップ』に戻ります。

手順:

データを同期させ、同期を検査するには、以下のようにします。

1. 同期サーバーを開始します。Windows の場合には、「スタート」メニューから「スタート」->「プログラム」->「DB2 Everyplace」->「同期サーバー用サブレットの開始 (Start Servlet for Sync Server)」とクリックします。UNIX の場合には、DB2 Everyplace 同期サーバー・インスタンスの所有者としてログインし、ディレクトリーを \$DSYINSTDIR/Server/bin に変更し、dsysync.sh を実行します。

同期サーバーが実行されていることを検査するためには、

`http://127.0.0.1:<port>/db2e/db2erdb` にアクセスして、以下のメッセージが表示されることを確認してください。

```
DB2eSyncServer<datetime string>
```

注: ポートを DB2 Everyplace 同期サーバーの実際のポートと置き換えてください。

2. モバイル・デバイスまたはエミュレーターを開始します。
3. 「IBM Sync」をクリックします。
4. 「同期化 (Synchronize)」をクリックします。同期が開始されます。同期は、「キャンセル (Cancel)」ボタンをクリックしていつでも停止させることができます。同期が終了すると、最終同期状況として次のいずれかのメッセージが表示されます。
 - 同期が成功しました
 - 同期が失敗しました
 - 同期がキャンセルされました

データ同期の詳細については、「DB2 Everyplace 同期サーバー 管理ガイド」を参照してください。

5. Palm OS エミュレーターまたはデバイスに「同期が成功しました」というメッセージが表示された場合には、QBE をオープンしてください。
6. ユーザー名およびパスワードを指定します。
7. 「表の選択 (Select Table)」メニューをクリックし、「VNMEDICALRECORD」表を選択します。表の内容が画面に表示されます。
8. モバイル・デバイス管理センター および DB2 コントロール・センターをオープンします。Windows の場合には、「スタート」->「プログラム」->「IBM DB2 Everyplace」->「モバイル・デバイス管理センターの開始」と選択します。

UNIX の場合には、DB2 Everyplace 同期サーバー・インスタンスの所有者としてログインし、ディレクトリーを \$HOME/db2everyplace81/Server/bin に移動して、dsyadmin.sh を実行します。

9. DB2 コントロール・センター でオブジェクト・ツリーを展開し、VNURSE データベースを表示させます。VNURSE データベースの「表 (Tables)」フォルダーを選択して VNURSE 表を表示させます。
10. 「VNMEDICALRECORD」表を右マウス・ボタンでクリックし、メニューから「サンプルの内容 (Sample Contents)」を選択します。
11. Palm OS エミュレーターまたはデバイスに表示された表の内容を、DB2 コントロール・センターの表のサンプルの内容を比較します。

これで、モバイル・デバイスと DB2 Everyplace 同期サーバーとの間でデータが正常に同期されました。

関連したタスク:

- 84 ページの『Palm OS モバイル・デバイスまたはエミュレーターのセットアップ』
- 85 ページの『Palm OS モバイル・デバイスまたはエミュレーターへのファイルのインストール』
- 『Symbian OS V6.0 モバイル・デバイスを同期するためのセットアップおよび構成』

Symbian OS v6.0 モバイル・デバイスを同期するためのセットアップ

このセクションでは、Symbian OS v6.0 モバイル・デバイスを同期するためのセットアップについて説明します。以下のトピックを扱います。

- 『Symbian OS V6.0 モバイル・デバイスを同期するためのセットアップおよび構成』
- 89 ページの『ワークステーションでの m-Router Connect の構成』
- 90 ページの『デバイスでの m-Router Connect の構成』
- 90 ページの『デバイスでの ISync の構成』
- 91 ページの『Symbian OS V6.0 デバイスでのデータの同期』

Symbian OS V6.0 モバイル・デバイスを同期するためのセットアップおよび構成

前提条件:

Symbian OS V6.0 デバイスで同期をテストする前に、そのデバイスへの TCP/IP 接続を行う必要があります。モバイル・デバイスから Windows 32 ビット版プラットフォームで実行されているワークステーションへの TCP/IP 接続は、Intuwave 提供の m-Router Connect を使用してセットアップすることができます。m-Router Connect のベータ版の入手に関する情報については、www.intuwave.com にある Intuwave の Web サイトに掲載されています。

m-Router Connect は、ワークステーション用の m-Router Connect とデバイス用の m-Router Connect の 2 つの部分からなります。デバイスをワークステーションに接続できるようにするためには、デバイスとワークステーションの両方に m-Router Connect をインストールする必要があります。

手順:

m-Router Connect を使用してモバイル・デバイスとワークステーションの間の接続を確立するためには、以下のようにします。

1. デバイスに付属している資料を参照して m-Router Connect をデバイスにインストールします。
2. m-Router Connect をワークステーションにインストールします。
3. ワークステーションで m-Router Connect を構成します。
4. デバイスで m-Router Connect を構成します。

セットアップおよび構成を終了するには、以下のようにします。

1. ISync を構成します。
2. 同期のテストを行って、同期サーバーが実行されていることを確認します。

関連したタスク:

- 83 ページの『Palm OS モバイル・デバイスを同期するためのセットアップ』

ワークステーションでの m-Router Connect の構成

以下に示すステップは、使用する m-Router のバージョンによって異なる可能性があります。

このタスクは、Symbian OS V6.0 モバイル・デバイスを同期するためのセットアップおよび構成のメインタスクの一部です。このステップを完了したら、88 ページの『Symbian OS V6.0 モバイル・デバイスを同期するためのセットアップおよび構成』に戻ります。

手順:

ワークステーションで m-Router Connect を構成するには、以下のようにします。

1. シリアル・ケーブルを使用して Symbian OS V6.0 デバイスをワークステーションの COM ポートに接続します。
2. ワークステーションで mRouterDeluxe.exe を開始します。デスクトップのシステム・トレイにプログラム・アイコンが表示されます。
3. そのアイコンを右マウス・ボタンでクリックします。「m-Router Overview」ウィンドウがオープンします。
4. 「m-Router Overview」ウィンドウで、デバイスが接続されている COM ポートを表すアイコンをクリックします。接続が正しく行われていて、m-Router がその接続を検出すると、そのアイコンは、ソケットに挿し込まれたプラグの形になります。
5. 「Properties of COM x」ウィンドウの「General」ページで、「Mode」リストから「serial port」を選択します。x はポート番号です。
6. 「Baud」リストから「115200」を選択します。

関連したタスク:

- 88 ページの『Symbian OS V6.0 モバイル・デバイスを同期するためのセットアップおよび構成』
- 90 ページの『デバイスでの m-Router Connect の構成』
- 90 ページの『デバイスでの ISync の構成』

- 91 ページの『Symbian OS V6.0 デバイスでのデータの同期』

デバイスでの m-Router Connect の構成

このタスクは、Symbian OS V6.0 モバイル・デバイスを同期するためのセットアップおよび構成のメインタスクの一部です。このステップを完了したら、88 ページの『Symbian OS V6.0 モバイル・デバイスを同期するためのセットアップおよび構成』に戻ります。

手順:

デバイスで m-Router Connect を構成するには、以下のようにします。

1. デバイスのキーボードの「**Extras**」ボタンを押します。「Extras」ウィンドウがオープンします。
2. リストから「**m-Router Connect**」を選択します。
3. 「**オープン (Open)**」を押します。「m-Router Connect」ウィンドウがオープンします。
4. 「**構成 (Configure)**」を押します。「設定 (Settings)」ウィンドウがオープンします。
5. 「設定 (Settings)」ウィンドウで「**ケーブル (Cable)**」を選択します。
6. 「**OK**」を押してウィンドウを終了させます。
7. 「**切断 (Disconnect)**」を押し、さらに「**終了 (Exit)**」を押して m-Router Connect を終了させます。

関連したタスク:

- 88 ページの『Symbian OS V6.0 モバイル・デバイスを同期するためのセットアップおよび構成』
- 89 ページの『ワークステーションでの m-Router Connect の構成』
- 『デバイスでの ISync の構成』
- 91 ページの『Symbian OS V6.0 デバイスでのデータの同期』

デバイスでの ISync の構成

DB2 Everyplace 同期サーバーには、サンプル同期クライアント・アプリケーション ISync が用意されています。ISync を最初に同期サーバーと同期する前に、ISync を構成する必要があります。

このタスクは、Symbian OS V6.0 モバイル・デバイスを同期するためのセットアップおよび構成のメインタスクの一部です。このステップを完了したら、88 ページの『Symbian OS V6.0 モバイル・デバイスを同期するためのセットアップおよび構成』に戻ります。

手順:

デバイスで ISync を構成するには、以下のようにします。

1. デバイスのキーボードの「**Extras**」ボタンを押します。「Extras」ウィンドウがオープンします。
2. アプリケーション・リストから「**Isync**」を選択します。

3. 「**オープン (Open)**」を押して、ISync を開始します。「ISync」ウィンドウがオープンします。
4. 「**設定 (Settings)**」を押します。「ユーザー情報 (User Info)」ウィンドウがオープンします。
5. ワークステーションの IP アドレスまたはホスト名を「**サーバー IP (Server IP)**」フィールドに入力します。
6. 「**ポート (Port)**」フィールドに 8080 と入力します。これは、同期サーバーのアプリケーション・サーバーによって使用されるデフォルトのポートです。
7. 「**ユーザー ID (User ID)**」フィールドに nurse1 と入力します。これは、同期サーバー・サンプル作成プログラムによって作成されたサンプル・ユーザーです。
8. オプション: 「**詳細ログ (Detailed Log)**」チェック・ボックスを選択すると、同期中に ISync が詳細ログを記録するようになります。詳細ログは、トラブルシューティングに役立ちます。
9. 「**パスワードの設定 (Set Password)**」を押します。「パスワードの設定 (Set Password)」ウィンドウがオープンします。
10. 「**パスワードの入力 (Enter Password)**」フィールドに nurse1 と入力します。これは、同期サーバーサンプル作成プログラムによって作成されたサンプル・パスワードです。
11. 「**OK**」を押します。「パスワードの設定 (Set Password)」ウィンドウが閉じます。
12. 「ユーザー情報 (User Info)」ウィンドウで「**OK**」を押し、変更内容を保管して終了します。

これで Symbian OS V6.0 デバイスとソフトウェアで同期を取る準備ができました。

関連したタスク:

- 88 ページの『Symbian OS V6.0 モバイル・デバイスを同期するためのセットアップおよび構成』
- 89 ページの『ワークステーションでの m-Router Connect の構成』
- 90 ページの『デバイスでの m-Router Connect の構成』
- 『Symbian OS V6.0 デバイスでのデータの同期』

Symbian OS V6.0 デバイスでのデータの同期

以下のステップを実行して、DB2 Everyplace 同期サーバーが実行されていることを確認します。

このタスクは、Symbian OS V6.0 モバイル・デバイスを同期するためのセットアップおよび構成のメインタスクの一部です。このステップを完了したら、88 ページの『Symbian OS V6.0 モバイル・デバイスを同期するためのセットアップおよび構成』に戻ります。

手順:

1. 89 ページの『ワークステーションでの m-Router Connect の構成』の指示に従って、COM ポートのプロパティ・ウィンドウの「一般 (General)」ページまでナビゲートします。
2. Symbian OS V6.0 デバイスで「Extras」を押し、「m-Router Connect」を選択して「オープン (Open)」を押します。「m-Router Connect」ウィンドウがオープンします。
3. 「接続 (Connect)」を押します。m-Router がワークステーションとの接続を確立することを試みます。
4. m-Router Connect が実行されたままの状態では、「Extras」を押し、「ISync」を選択して「OK」を押します。「ISync」画面がオープンします。
5. 「Sync」を押します。
6. ワークステーションの COM ポートのプロパティ・ウィンドウで、「モード (Mode)」リストを表示させて「シリアル・ポート (serial port)」を再び選択し、デバイスとワークステーションの間の通信を開始します。デバイスとワークステーションの間の通信が確立されると、COM ポートのプロパティ・ウィンドウに「接続された」ことを示すメッセージが表示されます。同期が開始されます。
7. 同期が終了した後で、デバイスの「メニュー (Menu)」ボタンを押し、「ファイル (File)」メニューで「クローズ (Close)」を強調表示させ、「選択 (Select)」を押して ISync を終了させます。
8. キーボードで「Extras」を押します。
9. リストから「m-Router Connect」を選択し、「オープン (Open)」ボタンを押してアプリケーションに切り替えます。
10. 「切断 (Disconnect)」を押し、さらに「終了 (Exit)」を押して m-Router Connect を終了させます。

これで、モバイル・デバイスと DB2 Everyplace 同期サーバーとの間でデータが正常に同期されました。

関連したタスク:

- 88 ページの『Symbian OS V6.0 モバイル・デバイスを同期するためのセットアップおよび構成』
- 89 ページの『ワークステーションでの m-Router Connect の構成』
- 90 ページの『デバイスでの m-Router Connect の構成』
- 90 ページの『デバイスでの ISync の構成』

第 4 部 サンプル・アプリケーション

第 4 章 DB2 Everyplace サンプル・アプリケーションの概要

DB2 Everyplace には、以下の表で示すように、それぞれのターゲット・プラットフォームごとにサンプル・アプリケーションが組み込まれています。一部のサンプルは、DB2 Everyplace の SDK バージョンにのみ組み込まれています。

表 18. ターゲット・プラットフォーム別の DB2 Everyplace サンプル・アプリケーション

ターゲット・プラットフォーム	タイプ	サンプル・アプリケーション
Palm	クライアント	<ul style="list-style-type: none">• DB2eCLP• VNurse• NurseInit• DB2eAppl• Sync GUI
Palm	MAB	<ul style="list-style-type: none">• PersonList• VNApp• VNPlus
Symbian 6	クライアント	<ul style="list-style-type: none">• DB2eCLP• VNurse• NurseInit• DB2eAppl• DB2eJavaCLP• Sync GUI• Common
Symbian 6	MAB	<ul style="list-style-type: none">• PersonList• VNApp
Symbian 7	クライアント	<ul style="list-style-type: none">• DB2eCLP• NurseInit• Sync GUI• PersonList• DB2eJavaCLP
Symbian 7	MAB	<ul style="list-style-type: none">• PersonList• VNApp
Windows CE	クライアント	<ul style="list-style-type: none">• DB2eCLP• VNurse• VNurseInit• DB2eAppl• DB2eJavaCLP• Sync GUI

表 18. ターゲット・プラットフォーム別の DB2 Everyplace サンプル・アプリケーション (続き)

ターゲット・プラットフォーム	タイプ	サンプル・アプリケーション
Windows CE	MAB	<ul style="list-style-type: none"> • PersonList • VNApp • DB2eJavaCLP
Win32	クライアント	<ul style="list-style-type: none"> • DB2eCLP • DB2eAppl • DB2eJavaCLP • Sync GUI
MIDP	クライアント	<ul style="list-style-type: none"> • DB2eCLP • VNurse • DB2eJavaCLP
Linux および Neutrino (Sharp Zaurus を含む)	クライアント	<ul style="list-style-type: none"> • Command Line CLP • NurseInit • Sync GUI • PersonList • DB2eJavaCLP
Linux および Neutrino (Sharp Zaurus を含む)	MAB	<ul style="list-style-type: none"> • PersonList • VNApp

以下の表には、DB2 Everyplace サンプル・アプリケーションが入っている場所、および各サンプルが組み込まれている DB2 Everyplace のエディションが示されています。表の中で、各エディションの省略形は、以下のとおりです。

- EE = Enterprise Edition
- DE = Database Edition
- SDK = Software Development Kit Edition

表 19. バージョン別の DB2 Everyplace サンプル・アプリケーションとそれが入っている場所

アプリケーション	説明	エディション	ディレクトリー
DB2eCLP	ユーティリティ・ファイル	EE/DE/SDK	Clients¥platform¥database¥lang¥proc¥DB2eCLP
VNurse	稼働中のサンプル、NurseInit と Nurse の組み合わせ	EE/DE/SDK	Clients¥platform¥database¥lang¥Samples¥VNurse
Sync GUI C • testisync.exe • isyncui.prc • isyncui.exe • isync.sis • goISync Java および ISync.NET • ISyncSample • goISyncConsole	稼働中の同期サンプル (パイナリー)	EE/SDK	C の場合: Clients¥platform¥sync¥lang¥proc¥ Java の場合: Clients¥clientapisample¥Java_API ISync.NET の場合: Clients¥clientapisample¥NMP

表 19. バージョン別の DB2 Everyplace サンプル・アプリケーションとそれが入っている場所 (続き)

アプリケーション	説明	エディション	ディレクトリー
Zaurus パッケージ 以下を含む • goISync • DB2eCLP	両方のサンプルを含み、さらに DB2 Everyplace および同期クライアント・ライブラリも含む。	EE/DE/SDK	Clients¥linux¥install
クライアント API サンプル C • testisync • isyncui • goISync Java および ISync.NET • ISyncSample • GoISyncConsole	同期サンプル (ソース)	SDK	C の場合: Clients¥clientapisample¥C_API Java の場合: Clients¥clientapisample¥Java_API ISync.NET の場合: Clients¥clientapisample¥NMP
Nurselnit	表の作成とデータの追加	SDK	SDK¥Samples¥platform¥language¥NurseInit
Common • DB2eEng.cpp • DB2eEng.h	Symbian 6 のコード・サンプル	SDK	SDK¥Samples¥Symbian6¥language¥Common
JDBCsample • DB2eApp1 • DB2eJavaCLP	JDBC サンプル・アプリケーション	SDK	Clients¥platform¥database¥JDBC¥lang
MIDP	MIDP サンプル・アプリケーション com.ibm.mobileserves.demo	SDK	Clients¥MIDP¥Samples¥lang
Clients クライアント内にあるすべてのサンプルのソース・コード		SDK	SDK¥Samples¥platform
PersonList	サンプル MAB アプリケーション	SDK	SDK¥ApplicationBuilder¥Projects¥Samples¥platform
VNApp	サンプル MAB アプリケーション	SDK	SDK¥ApplicationBuilder¥Projects¥Samples¥platform¥
VNPlus	サンプル MAB アプリケーション	SDK	SDK¥Samples¥platform¥

第 5 章 IBM Sync アプリケーション

この章では、IBM Sync アプリケーションについて説明します。以下のトピックが含まれています。

- 『IBM Sync の概要』
- 100 ページの『IBM Sync for Palm OS の構成』
- 101 ページの『IBM Sync のメニュー・オプション』
- 103 ページの『IBM Sync を使用したデータの同期化』

IBM Sync の概要

IBM Sync では DB2 Everyplace 同期サーバーを使用して、モバイル・デバイスと企業のデータ・ソースとの間でデータやアプリケーションを同期させることができます。IBM Sync を構成する前に、モバイル・デバイス管理センターでユーザー、グループ、サブスクリプション、およびサブスクリプション・セットを定義しておく必要があります。

これらの作業の詳細については、「*DB2 Everyplace 同期サーバー 管理ガイド*」を参照してください。

IBM Sync はグラフィック・インターフェースを持つ同期アプリケーションで、IBM 同期クライアント C-API を使用します。これは、Palm OS、Windows CE、および Symbian プラットフォームで使用できます。Win32、Neutrino、および Linux プラットフォームでの同期をテストするために、コマンド行プログラム (testisync) も備わっています。

コマンド行プログラム (testisync) を使用して、Win32、Neutrino、および Linux プラットフォームでの同期をテストできます。IBM Sync と testisync は両方とも、IBM 同期クライアント C-API の使用方法を示すサンプル・プログラムです。IBM Sync と testisync はオープン・ソースであり、DB2 Everyplace Software Development Kit から入手できます。

注: ソース・コードを使用する前に、必ず使用許諾契約書を読んでください。

IBM Sync ライブラリーの詳細については、「*DB2 Everyplace アプリケーション開発ガイド*」を参照してください。

クライアント・ソフトウェアは、同期を取るたびに、クライアントの構成 (クライアント・グループに割り当てられたサブスクリプション・セットおよびサブスクリプション) を更新すべきかどうかをチェックします。例えば、サブスクリプションで参照するファイルを最新表示する場合は、次の同期時に、サブスクライブしたすべてのユーザーに新規バージョンをダウンロードするために、サブスクリプションが変更されたことを示すフラグが設定されます。

関連した概念:

- 101 ページの『IBM Sync のメニュー・オプション』

関連したタスク:

- 『IBM Sync for Palm OS の構成』
- 103 ページの『IBM Sync を使用したデータの同期化』

IBM Sync for Palm OS の構成

前提条件:

IBM Sync アプリケーションを構成する前に、「インストールおよびユーザーズ・ガイド」の『Palm OS モバイル・デバイスまたはエミュレーターを同期するためのセットアップおよび構成』というセクションで説明されているように、Palm OS モバイル・デバイスまたはエミュレーターをセットアップし、同期に必要なファイルをすべてインストールしておく必要があります。

手順:

Palm OS モバイル・デバイスまたはエミュレーターで IBM Sync を構成するには、以下のようにします。

1. Palm OS モバイル・デバイスまたはエミュレーターにある IBM Sync アプリケーションを見つけます。
2. 「**IBM Sync**」をクリックします。
3. 「**メニュー (Menu)**」をクリックして、メニューから「**設定 (Settings)**」を選択します。
4. ワークステーションの IP アドレスまたはホスト名を「**サーバー IP (Server IP)**」フィールドに入力します。
5. 「**ポート番号 (Port #)**」フィールドで同期サーバーのポート番号を入力します。同期サーバーの基本アプリケーション・サーバーが使用するデフォルトのポートは、8080 です。
6. 「**ユーザー ID (user ID)**」フィールドにユーザー ID を入力します。このユーザー ID は、同期サーバー管理者が DB2 Everyplace モバイル・デバイス管理センターで作成したものです。
7. 「**パスワード (Password)**」フィールドにパスワードを入力します。ユーザーのパスワードは、同期サーバー管理者が DB2 Everyplace モバイル・デバイス管理センターで作成したものです。
8. 「**OK**」をクリックします。

関連した概念:

- 99 ページの『IBM Sync の概要』
- 101 ページの『IBM Sync のメニュー・オプション』

関連したタスク:

- 103 ページの『IBM Sync を使用したデータの同期化』

IBM Sync のメニュー・オプション

IBM Sync をセットアップした後で、その他の IBM Sync メニュー・オプションを構成することができます。クライアント・デバイスに DB2 Everyplace がインストールされていること、およびクライアント・デバイスまたはエミュレーターでネットワーク接続がセットアップされていることを確認してください。

「IBM Sync」ダイアログの左上隅にある「**IBM Sync**」メニューをクリックしてください。以下のオプションを含むドロップダウン・メニューが表示されます。

- **Subs Sets**
- サーバー設定
- クライアント設定
- ネットワーク設定
- **IBM Sync** について

Subs Sets (サブスクリプション・セット):

メニューから「サブスクリプション・セット」オプションを選択することで、同期クライアントがサブスクライブするサブスクリプション・セットを表示できます。サブスクリプション・パネルで、サブスクリプションの横にあるチェック・ボックスは、そのサブスクリプション・セットが同期に使用可能になっているかどうかを示します。そのため、関心があるサブスクリプション・セットでの同期を、チェック・ボックスのチェックマークを外すことによって使用不可にできます。パネル内のすべてのコマンド・ボタンとそのアクションについて、以下で説明します。

OK サブスクリプションの同期オプションを変更した後に、「**OK**」ボタンをクリックして変更を保管できます。

キャンセル

変更を破棄したい場合は、「キャンセル」ボタンをクリックします。

詳細 「詳細」ボタンをクリックすると、「詳細」パネルに、選択したサブスクリプション・セットについての詳しい情報 (例えば、サブスクリプション・セットの完全な名前、最新の同期の状況など) が表示されます。さらに、クライアント・データを破棄して、サブスクリプション・セットの最新表示を実行する場合、「リセット」チェック・ボックスを選択するだけです。これで、次回に同期を行ったときに、同期クライアントがそのサブスクリプション・セットに対して最新表示を実行します (クライアント・データをドロップし、サーバーからソース・データを再度取り出す)。

ページ このボタンによって、現行サブスクリプション・セット情報がドロップされます。次回に同期を行ったときに、同期クライアントがサブスクリプション・セット情報を最新表示し、さらに各サブスクリプション・セットを最新表示します。

注: ローカル表に対する変更を行っても、変更内容をソースに同期させていない場合は、ページ操作を実行した後の最新表示によって、それらの変更内容は失われます。

サーバー設定:

「**サーバー設定**」メニュー・オプションをクリックすると、「設定値」ダイアログがオープンします。このダイアログで、いくつかの IBM Sync 設定値を構成することができます。構成できる設定は次のとおりです。

URL 「URL」の横にあるドロップダウン・リストをタップして、「**-入力- (-enter-)**」を選択し、同期サーバーの URL (例えば **http://127.0.0.1**) を入力します。80 以外 (例えば 8080) のポートで同期サーバーが構成されている場合、ポート番号を URL に指定する必要があります (例えば **http://127.0.0.1:8080**)。入力した新しいサーバー URL はそれぞれ、ドロップダウン・リストに保管されるため、次回に同期を行うときは、簡単にリストからサーバー URL を選択できます。

ユーザー

「ユーザー ID」フィールドにユーザー名を入力してください。入力するユーザー名は、DB2 Everyplace モバイル・デバイス管理センターで定義されたものでなければなりません。モバイル・デバイス管理センターにおけるユーザーの作成に関する詳細については、「同期サーバー 管理ガイド」を参照してください。

パスワード

「パスワード」フィールドにパスワードを入力してください。入力するパスワードは、DB2 Everyplace モバイル・デバイス管理センターで定義されたものでなければなりません。モバイル・デバイス管理センターにおけるユーザーの作成に関する詳細については、「同期サーバー 管理ガイド」を参照してください。今後のためにパスワードを保管する場合、「**パスワードの保管**」チェック・ボックスを選択してください。

クライアント設定:

メニューから「**クライアント設定**」を選択してクライアント特有の設定を構成できます。構成可能なクライアント設定は、以下のとおりです。

トレース

同期中に問題が生じたときにサービス用の詳しいトレース情報を生成するには、「**トレース**」の横にあるドロップダウン・リストをタップし、「**詳細**」を選択します。

メモリー・スロット

「**メモリー・スロット**」の横にあるドロップダウン・リストをタップして、クライアント情報および同期されたデータを保管するターゲット・メモリー拡張カードを選択します (メモリー拡張カードがある場合。デフォルトの「**デバイス**」設定は、モバイル・デバイス上のメイン・メモリーです。「**デバイス**」以外メモリー・スロットを選択した場合、「**ターゲット・パス**」フィールド (デフォルトはルート) に、その他のターゲット・パスを指定することもできます。

ネットワーク設定:

メニューから「**ネットワーク設定**」を選択してネットワーク特有の設定を構成できます。構成可能なネットワーク設定は、以下のとおりです。

タイムアウト

このドロップダウン・リストで、同期がタイムアウトになるまでの所要時間

を指定することができます。サーバーがビジーになる場合、または同期を取るデータの量が多い場合には、より長い所要時間を選択する必要があります。同期中にタイムアウトのエラー・メッセージが頻繁に出る場合は、システム管理者に連絡して適切な設定値を確認してください。デフォルトでは 1 分に設定されています。

ネットワーク速度

「ネットワーク速度」の横にあるドロップダウン・リストをタップして、適切なネットワーク速度を選択します。この設定によって、同期クライアントは、最良のネットワーク・パフォーマンスを獲得するために、同期サーバーとの通信時に実際のメッセージ・サイズを調整できます。

プロキシの使用

ご使用のシステムがプロキシ・サーバーを使用する場合、「プロキシの使用」チェック・ボックスを選択して、プロキシ・サーバーの IP およびポート番号を入力する必要があります。

IBM Sync について:

「IBM Sync について」を選択すると、DB2 Everyplace クライアントのバージョン番号とビルド日付、およびデバイス ID を含むデバイス情報を表示できます。

関連した概念:

- 99 ページの『IBM Sync の概要』

関連したタスク:

- 100 ページの『IBM Sync for Palm OS の構成』
- 『IBM Sync を使用したデータの同期化』

IBM Sync を使用したデータの同期化

データ同期の詳細については、「DB2 Everyplace 同期サーバー 管理ガイド」を参照してください。

前提条件:

IBM Sync アプリケーションを使用する前に、100 ページの『IBM Sync for Palm OS の構成』で説明されているように、IBM Sync アプリケーションを構成する必要があります。

手順:

データを同期化するには、次のようにします。

1. モバイル・デバイスを開始します。
2. IBM Sync アプリケーションを開始します。IBM Sync のメイン・ウィンドウが表示されます。
3. 「同期化」をクリックします。同期が開始されます。パネルには、同期の状況および進捗が表示されます。同期は、「キャンセル」ボタンをクリックしていつでも停止させることができます。同期が終了すると、以下のメッセージが表示され、それぞれ、同期の成功、失敗、またはキャンセルを示します。
 - 同期が成功しました

- 同期が失敗しました
- 同期がキャンセルされました

同期が失敗した場合は、「ログ」ボタンをクリックして、失敗の原因 (エラー) を確認することができます。同期が成功した場合は、続行して、同期されたデータが正しいことを検査することができます。

データを検証するには、次のようにします。

- クライアントで以下を行います。
 1. モバイル・デバイスで DB2eCLP を開始します。
 2. 最後に同期化を行った表からすべてのレコード (例えば VNMEDICALRECORD) を選択する SQL ステートメントを入力します。
- データ・ソースで以下を行います。

ソース表データを表示するための 2 つの方法があります。

 - DB2 コマンド行プロセッサ
 1. ソース・データベースで DB2 CLP をオープンします。
 2. サブスクライブされる表のすべてのレコード (例えば dsysample.VNMEDICALRECORD) を選択する SQL ステートメントを入力します。
 - DB2 UDB コントロール・センター

DB2 コントロール・センターを使用して、サブスクライブされる表をデータベースにある Tables フォルダーから見つけることもできます (例えば、VNURSE データベースにある表 dsysample.VNMEDICALRECORD)。次に、表を選択して右クリックし、「サンプル内容 (Sample Contents) を選択して表の内容をブラウズします。
- モバイル・デバイスに表示された表の内容を、データ・ソースの表の内容と比較します。

関連した概念:

- 99 ページの『IBM Sync の概要』
- 101 ページの『IBM Sync のメニュー・オプション』

関連したタスク:

- 100 ページの『IBM Sync for Palm OS の構成』

第 6 章 CLP アプリケーション

この章では CLP サンプル・アプリケーションについての情報を提供します。以下のトピックを扱います。

- 『CLP アプリケーションの概要』
- 106 ページの『CLP コマンド』
- 108 ページの『CLP を使用した SQL ステートメントの入力と実行』
- 109 ページの『CLP を使用したデータのインポートとエクスポート』

CLP アプリケーションの概要

コマンド行プロセッサ (CLP) はアプリケーション開発ツールであり、コマンド行インターフェースが備わったプラットフォームで DB2 Everyplace を使用するアプリケーションの例として用意されています。CLP はモバイル・デバイス上の DB2 Everyplace データベースで使用されます。これは同期サーバーでは使用しません。

CLP アプリケーションは、すべてのプラットフォームにおいて別個のツールになっています。

次のリストは、各プラットフォーム用の CLP アプリケーションがどのように開発されているのかを説明しています。

- Palm OS 用には、このアプリケーションは Metrowerks CodeWarrior for Palm Computing Platform を使用して C 言語で作成しています。
- QNX Neutrino 用には、QNX Neutrino Developers Kit を使用して、C 言語で作成しています。
- 組み込み Linux 用には、Lynuxworks の BlueCat Linux に組み込まれているツールを使用して、C 言語で作成しています。
- Windows CE 用には、Microsoft eMbedded Visual C++ 3.0 を使用して C 言語で作成しています。
- Windows NT および Windows 2000 用には、Microsoft Visual C++ バージョン 6 を使用して C++ 言語で作成しています。
- Symbian OS バージョン 6 用には、Microsoft Visual C++ バージョン 6 および Symbian C++ Software Developers Kit を使用して C++ 言語で作成しています。

関連したタスク:

- 109 ページの『CLP を使用したデータのインポートとエクスポート』

関連した解説:

- 106 ページの『CLP コマンド』

CLP コマンド

このアプリケーションは、DB2 Everyplace の表とデータを処理する簡単なコマンド行プロセッサ (CLP) です。アプリケーション開発者は、このコマンド行インターフェースから SQL ステートメントを直接、実行することができます。例えば、次のようになります。

```
SELECT * FROM PHONEBOOK
```

一部のプラットフォームでは、各ステートメントはセミコロンで終了しなければなりません。例えば、次のようになります。

```
SELECT * FROM PHONEBOOK;
```

また、コマンド行プロセッサは拡張コマンドもサポートします。

\$file [input file] [output file]

入力ファイルから SQL ステートメントを実行し、その結果を出力ファイルに書き込みます。このコマンドは Palm OS、Symbian OS、および Windows CE ではサポートされません。その他のすべてのプラットフォームに対しては、絶対パスを指定できます。

AUTOCOMMIT OFFION

トランザクションを自動コミット・モードに変更します (DB2 エンジンのデフォルト)。AUTOCOMMIT OFF は、トランザクションを手動モードに変更します。アプリケーションは、ロールバックするか、もしくは作業をコミットすることができます。

BLASTDB

データベースにあるすべてのユーザー表を除去します。

COMMIT WORK (or COMMIT)

直前の更新、削除、および挿入操作をすべてコミットし、新しいトランザクション有効範囲を開始します。

CONNECT TO arg1

この arg1 はデータベース・パスです

アプリケーションを現在の接続から自動的に切断し、ローカル・データベースに再接続します。これは、SQLConnect() CLI 呼び出しで指定されます。CLI-SQLConnect のパスの区切り文字は ¥ (円記号) または / (スラッシュ) です。どちらの区切り文字もすべてのプラットフォームで使用でき、ファイル・システムへのアクセス時に適切な区切り文字にマップされます。これにより、環境ごとにデータベースを異なるディレクトリーにおくことが可能となります。以下はその例です。

```
connect to c:¥temp ¥
create table t (a int)
insert into t values (10)
select *from t
```

CONNECT TO arg1 USER arg2 USING arg3

ここで、

arg1 データベース・パス

arg2 ユーザー
arg3 パスワード

アプリケーションを現在の接続から自動的に切断し、提供されたユーザー名およびパスワードを使用してアプリケーションをローカル・データベースに再接続します。この情報は、暗号化された表のアクセスおよび操作に必要です。

使用上の注意: ディレクトリー名にはスペースを含めることができます。例えば、C:¥System¥program files¥ は有効なディレクトリー構造です。ただし、ユーザーのマシンに存在するディレクトリーと同じ構造を使用しなければなりません。

DESCRIBE SELECT

SELECT ステートメントによって戻されたデータのタイプ、列、および名前の長さを記述します。例えば、次のようになります。

```
DESCRIBE SELECT * FROM PHONEBOOK
```

DISABLE APPLICATION SET DIRTY

コマンド行プロセッサによるダーティー・ビット設定を使用不可にします。

DISABLE LONG FILENAME

ファイルを 8.3 形式のファイル名で作成します。

DISABLE PHYSICAL DELETE

物理削除モードを使用不可にします (デフォルト)。

DISABLE READ DELETED

削除済みの行の読み取りを使用不可にします。

DISABLE REORG

表の再編成を使用不可にします。

ENABLE APPLICATION SET DIRTY

コマンド行プロセッサによるダーティー・ビット設定を使用可能にします。

ENABLE LONG FILENAME

ファイルを長いファイル名形式で作成します (デフォルト)。

ENABLE PHYSICAL DELETE

物理削除モードを使用可能にします。削除された行は読み取れなくなりません。

ENABLE READ DELETED

削除済みの行の読み取りを使用可能にします。

ENABLE REORG

表の再編成を自動的に使用可能にします (デフォルト)。

HELP 使用可能なすべてのコマンドをリストします。

LIST COLUMNS

データベースにあるすべてのユーザー表の列をリストします。

LIST INDEX

指定された表で作成されているすべての索引をリストします。

LIST TABLES

データベースにあるすべてのユーザー表をリストします。

ROLLBACK WORK (または ROLLBACK)

直前の更新、削除、および挿入操作をすべてロールバックし、新しいトランザクション有効範囲を開始します。

VERSION

DB2 Everyplace データベースのバージョン情報のストリングを印刷します。SQLGetInfo() 機能と同じストリングが戻されます。

関連したタスク:

- 109 ページの『CLP を使用したデータのインポートとエクスポート』

関連した概念:

- 105 ページの『CLP アプリケーションの概要』

CLP を使用した SQL ステートメントの入力と実行

QBE コマンド行プロセッサ (CLP) はサポートされなくなりました。SQL ステートメントの入力と実行には、スタンドアロンのコマンド行プロセッサをお勧めします。

手順:

SQL ステートメントを入力し実行するためには、以下のステップに従ってください。

1. 「**メニュー (MENU)**」アイコンをクリックし、「**ツール (Tools)**」メニューから「**CLP**」を選択します。「DB2 Everyplace CLP」ウィンドウがオープンします。
2. 照会フィールドに SQL ステートメントを指定します。例えば、VNPERSO 表の内容を選択するには、次のように入力します。

```
SELECT * FROM VNPERSO
```

3. 「**SQL を実行**」をクリックします。

DB2 Everyplace がサポートする SQL ステートメントの詳細については、「DB2 Everyplace アプリケーション開発ガイド」を参照してください。

関連したタスク:

- 109 ページの『CLP を使用したデータのインポートとエクスポート』

関連した概念:

- 105 ページの『CLP アプリケーションの概要』

関連した解説:

- 106 ページの『CLP コマンド』
- 99 ページの『IBM Sync の概要』

CLP を使用したデータのインポートとエクスポート

Palm OS、Symbian OS、Windows CE、Windows 32 ビット版プラットフォーム、Neutrino、および組み込み Linux 用の DB2 Everyplace コマンド行プロセッサは、ファイルから DB2 Everyplace へのデータのインポートおよび DB2 Everyplace データのファイルへのエクスポートをサポートします。Palm OS でのデータのインポートとエクスポートには、デバイス上の memo ファイルを使用します。

手順:

ファイルから DB2 Everyplace へのデータのインポート:

モバイル・デバイスにあるファイルのデータを DB2 Everyplace にインポートするには、次のように入力します。

```
IMPORT FROM file_name OF DEL INSERT INTO table_name [(column list)]
```

file_name は、データのインポート元ファイルの名前です。

Palm OS では、*file_name* は、データのインポート元である memo ファイルの名前と同じになります。このファイル名は memo ファイルの最初の行に指定しなければなりません。Palm memo には 4K バイトのテキストまでしか保管できないという制限があります。*table_name* は、インポート先となる既存の表の名前です。例えば、データを mydata.txt という名前のファイルから mytable という名前の既存の表にインポートするには、次のように入力します。

```
IMPORT FROM mydata.txt OF DEL INSERT INTO mytable
```

DB2 Everyplace からファイルへのデータのエクスポート:

データを DB2 Everyplace からファイルへエクスポートするには、次のように入力します。

```
EXPORT TO file_name OF DEL stmt
```

file_name は、データを書き込むファイルの名前です。*stmt* は、エクスポートするデータを選択するための SELECT ステートメントです。例えば、名前が mytable という表からすべてのデータを myfile.txt というファイルにエクスポートするには、次のように入力します。

```
EXPORT TO myfile.txt OF DEL SELECT * FROM mytable
```

Palm OS モバイル・デバイスでのデータのインポートとエクスポート:

Palm OS 用 DB2 Everyplace は、Windows 用の一連のコマンド行ツールと Palm OS アプリケーションを使用して、PDB ファイルとしてデータをインポートおよびエクスポートします。

インポート/エクスポート・ツールには以下の実行可能ファイルが組み込まれており、そのファイルは Windows ワークステーションにインストールされます。これらのファイルは DB2Everyplace¥Clients¥utilities にあります。

CSV2DB2e.exe

このファイルでは、コンマ区切りファイル (ファイル拡張子は .csv) からデータを DB2 Everyplace の表にインポートします。DB2e の表 (例: 名前が

PERSON) は、2 つのファイル、DSY_PERSON および DSY_iPERSON で表されます。DSY_PERSON ファイルにはデータが、DSY_iPERSON には索引情報が入っています。

DB2e2PDB.exe

このプログラムは、DB2 Everyplace の表を Palm OS PDB フォーマットに変換します。そして、ファイルをユーザーのディレクトリーにコピーして、インストールするファイルがあることを HotSync プログラムに通知します。システムに複数のユーザーが定義されている場合は、ユーザー・リストが表示され、そこから目的のユーザーを選択することができます。

PDB2DB2e.exe

PDB2DB2e.exe は、ユーザー・バックアップ域から Palm OS PDB ファイルを DB2 Everyplace 表に変換します。システムに複数のユーザーが定義されている場合は、ユーザー・リストが表示され、そこから目的のユーザーを選択することができます。

DB2e2CSV.exe

DB2e2CSV では、DB2 Everyplace の表を CSV ファイルにエクスポートします。また、DB2eSYSTABLES および DB2eSYSCOLUMNS という名前の DB2 Everyplace システム・カタログ・ファイルを利用します。

PalmImport.bat

PalmImport.bat は、CSV2DB2e.exe と DB2e2PDB.exe の操作を結合します。

PalmExport.bat

PalmExport.bat は、PDB2DB2e.exe と DB2e2CSV.exe の操作を結合します。

インポート/エクスポート・ツールには、次の Palm OS アプリケーションが組み込まれています。

DB2eImport.prc

このプログラムは、HotSync プログラムによって転送された DB2 Everyplace ファイルをローカル DB2 Everyplace システムに登録します。

Palm OS デバイスへのデータのインポートは、以下のようにして行います。

1. 同じ名前 (例えば、VNPERSO) の 2 つのファイルを、1 つは拡張子を .csv で、もう 1 つは .sch にして作成します。.csv ファイルにはデータが入り、.sch ファイルにはインポートする表のスキーマが入ります。ファイル名にブランク・スペースを含めることはできません。サンプルの .csv と .sch ファイルが DemoImport¥ フォルダに入っています。それらのファイルの名前は、VNPERSO.csv および VNPERSO.sch です。

表 20 に、サポートされるデータ・タイプと CSV ファイルにおけるその表記例をリストします。

表 20.

データ・タイプ	表記
integer (または int)	1234
smallint	1234
decimal(n,p)	12.34
char(n)	"John"

表 20. (続き)

データ・タイプ	表記
varchar(n)	"John"
date	yyyymmdd
time	"14.05.48"
timestamp	"2001-05-01-16.16.51.000000"

ある列に対してヌル値を指定するには、CSV ファイルのコンマの間に何も入れないでください。例えば、2 番目の列がヌルの 3 つの整数の列は、CSV ファイルでは 1,,3 と表記され、データベース内では 1, null, 3 となります。

2. 表のスキーマをパラメーターに指定して、インポート・ツール PalmImport.bat を開始します。スキーマは、関連付けられている .sch ファイルに入るはずで、次の構文を使用して、インポート・ツールを開始します。

```
PalmImport.bat path_name file_name
```

path_name は CSV ファイルへのパスで、*file_name* は CSV ファイル名 (英大文字、拡張子なし) です。CSV ファイル名は、二重引用符で囲んだり、スペースを含めたりすることはできません。以下はその例です。

```
PalmImport.bat DemoImport VNPERSO
```

インポートされた表は、次回の HotSync 操作の後で、インストールする Palm インストール・ツールに自動的に追加されます。

3. Palm インストール・ツールを使用して、DB2eImport.prc を Palm OS デバイスにインストールします。
4. HotSync 操作を実行してインポートされた表と DB2eImport.prc のインストールを完了させます。
5. DB2eImport プログラムを Palm OS デバイスで開始して、インポートを完了させます。

Palm OS デバイスからのデータのエクスポートは、以下のようにして行います。

1. Palm OS デバイスをバックアップするため、HotSync 操作を行います。HotSync 操作を開始する前には毎回バックアップを取り、Palm OS のユーザーのバックアップ・ディレクトリーから DB2 Everyplace ファイル (DSY で始まるファイル) を削除してください。Windows ワークステーションのバックアップ域は、通常、次のところにあります。

```
PalmDir%user_name%Backup
```

PalmDir は Palm OS ソフトウェアがインストールされているディレクトリーであり、*user_name* は Palm OS ユーザーのユーザー名です。

2. 次の構文でエクスポート・プログラム PalmExport.bat を開始します。

```
PalmExport.bat path_name file_name
```

path_name は出力パスであり、*file_name* は DB2 Everyplace の表の名前 (英大文字) です。DB2 Everyplace の表名は、二重引用符で囲んだり、スペースを含めたりすることはできません。例えば、次のようになります。

```
PalmExport.bat DemoExport VNPERSO
```

結果として得られるファイルは、ソース・ファイルと同じパスにあります。

エラーが発生すると、インポート/エクスポート・ツールは処理したレコード数を報告します。

インポート/エクスポート・ツールを使用したサンプルが DB2Everyplace¥Clients¥utilities に入っています。バッチ・ファイル PalmExport.bat および PalmImport.bat には、CSV2DB2e.exe と DB2e2CSV.exe ツールの使用方法の例が用意されています。

関連した概念:

- 105 ページの『CLP アプリケーションの概要』

関連した解説:

- 106 ページの『CLP コマンド』

第 7 章 Visiting Nurse (巡回医療サービス) サンプル・アプリケーション

この章では Visiting Nurse (巡回医療サービス) サンプル・アプリケーションについての情報を提供します。以下のトピックを扱います。

- 『Visiting Nurse (巡回医療サービス) サンプル・アプリケーションの概要』
- 114 ページの『Visiting Nurse (巡回医療サービス) アプリケーションの実行』
- 117 ページの『Visiting Nurse (巡回医療サービス) サンプル・アプリケーション表』

Visiting Nurse (巡回医療サービス) サンプル・アプリケーションの概要

Visiting Nurse (巡回医療サービス) アプリケーションは、DB2 Everyplace を使用するアプリケーションの例として提供されています。Palm OS 用には、このアプリケーションは Metrowerks CodeWarrior for Palm Computing Platform を使用して C 言語で作成しています。Windows CE 用には、Microsoft eMbedded Visual C++ 3 を使用して C 言語で作成しています。Symbian OS v6 用には、Microsoft Visual C++ バージョン 6 および Symbian C++ Software Developers Kit を使用して C++ 言語で作成しています。

このサンプル・アプリケーションは、自宅にいる患者を訪問看護する看護婦のために設計されています。この DB2 Everyplace アプリケーションがない場合、看護婦はメモ用紙にメモし、後でメモをオフィス内ワークステーションのデータベースに転記する必要があります。サーバーと初期同期すれば、訪問看護婦は以下のことを行えます。

- 患者についての一般的な情報 (名前、住所、電話番号、および病状など) にアクセスする。
- 患者の医療状況 (血圧、脈拍、体温、および体重など) を収集する。
- 新しい診療記録に自動的に時刻と日付を記録する。
- 緊急時に連絡すべき人のリストにアクセスする。

1 日の終わりに、訪問看護婦は、モバイル・デバイス上のデータを中央のデータベースと同期させることによって、以下の処理を行うことができます。

- 患者の状況に関して中央のデータベースを更新する
- 翌日に訪問すべき患者のリストを入手する

この例のデータベースには、以下の 5 つの表があります。

VNSCHEDULE

看護婦の訪問予約情報が入っています。この表には、患者 ID、訪問時刻などの情報が含まれています。

VNPERSON

患者に関するデータが入っています。この表には、名前、社会保障番号、住所、および電話番号などの情報が含まれています。社会保障番号が主キーとして使用されます。

VNMEDICALRECORD

患者の診療記録が入っています。この表には、血圧、脈拍、および体温などの情報が含まれています。診療記録 ID が主キーとして使用されます。

VNCONTACT

各患者の緊急時連絡先のリストが入っています。この表には、患者の社会保障番号、緊急時連絡先の名前、および患者との関係が入っています。

VNSIGNATURE

バイナリー・シグニチャー・データが入っています。この表は、NurseInit アプリケーションで作成されたときには空です。この表は Visiting Nurse Plus アプリケーションおよび DB2 Everyplace Mobile Application Builder で使用します。

関連したタスク:

- 『Visiting Nurse (巡回医療サービス) アプリケーションの実行』

関連した解説:

- 117 ページの『Visiting Nurse (巡回医療サービス) サンプル・アプリケーション表』

Visiting Nurse (巡回医療サービス) アプリケーションの実行

Visiting Nurse サンプル・アプリケーションはモバイル・デバイスで表示することができます。このセクションの例は、Visiting Nurse アプリケーションが Palm OS エミュレーターまたはモバイル・デバイスでどのように表示されるかを示しています。

手順:

Visiting Nurse (巡回医療サービス) アプリケーションを実行するには、次のようにします。

1. 「**Nurse**」アイコンをクリックして、Visiting Nurse サンプル・アプリケーションを開始してください。「スケジュール」ウィンドウがオープンし、当日に訪問する必要がある患者のリストを表示します。

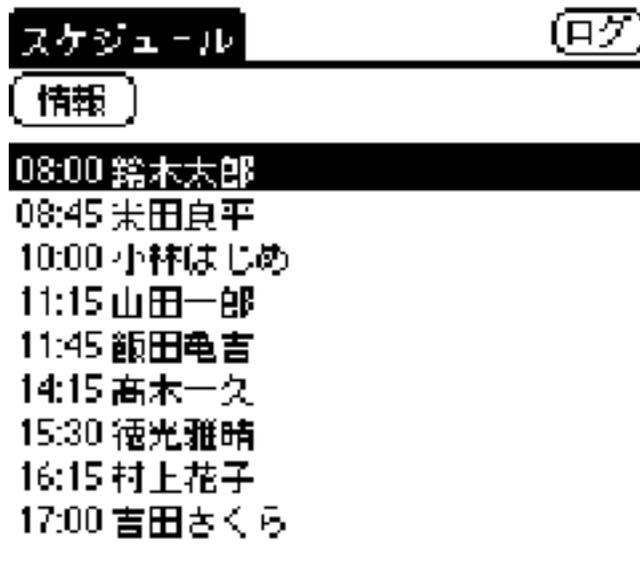


図1. 「スケジュール」ウィンドウ

2. リストから患者名を選択して、「情報」ボタンをクリックし、患者についての一般的な情報を表示します。

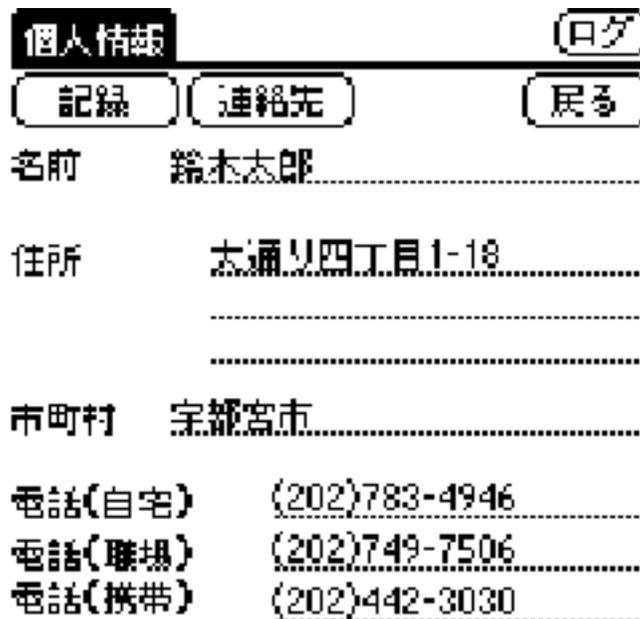


図2. 「個人情報」ウィンドウ

3. 新しい診療記録を入力します。
 - a. 「記録」ボタンをクリックします。「診療記録リスト」ウィンドウが開き、その患者に関して以前に作成されたすべてのレコードのリストを表示します。



図3. 「診療記録リスト」ウィンドウ

- b. 「追加」ボタンをクリックします。「診療記録」ウィンドウが開きます。



図4. 「診療記録」ウィンドウ

- c. 患者に関する重要な統計データを入力し、「保管」ボタンをクリックして診療記録を保管します。診療記録が、現在の日付とタイム・スタンプとともに保管されます。「戻る」ボタンをクリックして「個人情報」ウィンドウに戻ります。
4. 患者の緊急連絡先リストを表示します。

- a. 「連絡先」ボタンをクリックします。「緊急連絡先リスト (Emergency contact list)」ウィンドウが開き、患者の緊急連絡先のリストを表示します。
- b. リストにある名前を選択し、「情報」ボタンをクリックして、連絡先を表示します。

関連した概念:

- 113 ページの『Visiting Nurse (巡回医療サービス) サンプル・アプリケーションの概要』

関連した解説:

- 『Visiting Nurse (巡回医療サービス) サンプル・アプリケーション表』

Visiting Nurse (巡回医療サービス) サンプル・アプリケーション表

このトピックでは、Visiting Nurse (巡回医療サービス) の各サンプル・アプリケーション表について説明します。DB2 Everyplace を使用する Visiting Nurse (巡回医療サービス) アプリケーションの例は、113 ページの『Visiting Nurse (巡回医療サービス) サンプル・アプリケーションの概要』に示されています。

VNSCHEDULE

看護婦の訪問予約情報が入っています。この表には、患者 ID、訪問時刻などの情報が含まれています。表のスキーマは以下のとおりです。

```
CREATE TABLE VNSchedule (PatientID Char(9) NOT NULL,  
                          Time_C Time PRIMARY KEY)
```

VNPERSON

患者に関するデータが入っています。この表には、名前、社会保障番号、住所、および電話番号などの情報が含まれています。社会保障番号が主キーとして使用されます。表のスキーマは以下のとおりです。

```
CREATE TABLE VNPperson (ID Char(9) PRIMARY KEY,  
                        Name Varchar(40),  
                        Address Varchar(50),  
                        City Varchar(30),  
                        HomePhone Varchar(20),  
                        WorkPhone Varchar(20),  
                        MobilePhone Varchar(20))
```

VNMEDICALRECORD

患者の診療記録が入っています。この表には、血圧、脈拍、および体温などの情報が含まれています。診療記録 ID が主キーとして使用されます。表のスキーマは以下のとおりです。

```
CREATE TABLE VNMedicalRecord (RecordID Integer PRIMARY KEY,  
                               Date_C Date,  
                               Time_C Time,  
                               PatientID Char(9) NOT NULL,  
                               BloodPressure Char(7),  
                               PulseRate Smallint,  
                               Temperature Decimal(4,1),  
                               Weight Decimal(5,2),  
                               Comment Varchar(100))
```

VNCONTACT

各患者の緊急時連絡先のリストが入っています。この表には、患者の社会保障番号、緊急時連絡先の名前、および患者との関係が入っています。表のスキーマは以下のとおりです。

```
CREATE TABLE VNContact (PatientID Char(9) NOT NULL,  
                          ContactID Char(9) NOT NULL,  
                          Relationship Varchar(20),  
                          PRIMARY KEY (PatientID, ContactID))
```

VNSIGNATURE

バイナリー・シグニチャー・データが入っています。この表は、NurseInit アプリケーションで作成されたときには空です。この表は Visiting Nurse Plus アプリケーションおよび DB2 Everyplace Mobile Application Builder で使用します。表のスキーマは以下のとおりです。

```
CREATE TABLE VNSignature (RecordID Integer not null PRIMARY KEY,  
                           NurseName Varchar(40),  
                           Signature Blob(2000))
```

関連したタスク:

- 114 ページの『Visiting Nurse (巡回医療サービス) アプリケーションの実行』

関連した概念:

- 105 ページの『CLP アプリケーションの概要』

特記事項

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-0032
東京都港区六本木 3-2-31
IBM World Trade Asia Corporation
Licensing

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Canada Limited

Office of the Lab Director
1150 Eglinton Ave. East
North York, Ontario
M3C 1H7
CANADA

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができませんが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生した創作物には、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。

© (お客様の会社名) (西暦年). このコードの一部は、IBM Corp. のサンプル・プログラムから取られています。 © Copyright IBM Corp. _年を入れる_. All rights reserved.

この製品には、3Com およびその寄稿者により開発されたソフトウェアが含まれています:

Copyright (c) 1998 3Com/Palm Computing Division. All rights reserved.

ソースおよびバイナリー形式での再配布および使用は、変更の有無に拘らず、次の条件を満たす場合に許可されます。

1. ソース・コードを再配布する場合には、上記の著作権表示、この使用条件および以下の免責表示を含める必要があります。
2. バイナリー形式で再配布する場合には、上記の著作権表示、以下の使用条件および免責表示を、配布に際して提供する関連文書および資料に記載する必要があります。
3. このソフトウェアの機能および使用についての広告には、以下の表示を行う必要があります。「この製品には、3Com およびその寄稿者が開発したソフトウェアが含まれています。」
4. なお、3Com および寄稿者の名称は、事前の書面による承諾がある場合を除き、このソフトウェアをもとに開発した製品を保証または推奨する目的で使用することはできません。

3COM およびその寄稿者は、このソフトウェアを特定物として現存するままの状態を提供し、法律上の瑕疵担保責任、商品性の保証および特定目的適合性の保証を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負いません。起こりうる損害について予見の有無を問わず、「ソフトウェア」を使用したために生じる、直接的、間接的、付随的、特別、懲罰的、または結果的損害 (代替の製品またはサービスの調達、データまたは利益の喪失、事業の中断などを含み、他のいかなる場合も含む) については、それが契約、厳格な責任、不法行為 (過失の場合もそうでない場合も含む) など、いかなる責任の理論においても、3Com および寄稿者はその責任を負いません。

商標

アスタリスク (*) 付きの以下の用語は、IBM Corporation の商標です。

ACF/VTAM	IBM
AISPO	IMS
AIX	IMS/ESA
AIX/6000	iSeries
AIXwindows	LAN DistanceMVS
AnyNet	MVS/ESA
APPN	MVS/XA
AS/400	Net.Data
BookManager	OS/2
CICS	
C Set++	OS/390
C/370	OS/400
DATABASE 2	PowerPC
DataHub	QBIC
DataJoiner	QMF
DataPropagator	RACF RISC System/6000
DataRefresher	RS/6000
DB2DB2 Connect	S/370
DB2 Extenders	SP
DB2 OLAP Server	SQL/DS
DB2 Universal Database	SQL/400
Distributed Relational	System/370
Database Architecture	System/390
DRDA	SystemView
eNetwork	VisualAgeVM/ESA
Extended Services	VSE/ESA
FFST	VTAM
First Failure Support Technology	WebExplorer
	WIN-OS/2
	z/OS

以下は、それぞれ各社の商標または登録商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴ、ならびに Solaris は、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Tivoli および NetView は、Tivoli Systems Inc. の米国およびその他の国における商標です。

UNIX は、The Open Group がライセンスしている米国およびその他の国における登録商標です。

他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。

用語集

[ア行]

アドミニストレーター (MDAC). 同期オブジェクト作成したり、編集したり、それらの互いの関係を見るためのグラフィカル・インターフェース。また、モバイル・デバイス管理センターにより、個別のクライアントの同期状況やエラー・メッセージを見ることができる。

アプライ修飾子 (Apply qualifier). DataPropagator アプライ・プログラムの各インスタンスに固有のサブスクリプション定義を示す、文字ストリング。

一時表 (temporary table). SQL ステートメントの処理中に、中間結果を収容するために作成される表。

エンタープライズ・サーバー (enterprise server). ソース・サーバー を参照。

エンタープライズ・データベース (enterprise database). ソース・データベース を参照。

オブジェクト (object).

1. SQL を使用して作成または操作できるもの。例えば、表、視点、索引、またはパッケージ。
2. オブジェクト指向の設計またはプログラミングの場合、データおよびそのデータに関連する操作から構成される抽象的概念。

[カ行]

キー (key). 表、索引、または参照制約の記述の中で示されている 1 つの列または一連の順序付けされた列。

競合検出 (conflict detection). ユーザー・アプリケーションで更新された、ターゲット表内の古い行を検出するプロセス。競合が検出されると、競合を引き起こしたトランザクションはリジェクトされる。

クライアント (client). データベース・サーバーにアクセスする、または、それとやりとりを行うプログラム、あるいはユーザー。クライアントはアドミニストレーターを使用して定義する。

グループ (group). モバイル・データ同期の必要性が似通っているクライアントの集合。仕事をこなすためにグループ内のユーザーがアクセスする必要があるアプリケーションは何か、また、エンタープライズ・データのど

のサブセットにそれらのユーザーがアクセスする必要があるかなど、それぞれのグループごとに同期特性を定義する。

携帯情報端末 (personal digital assistant (PDA)). 個人的な計画および整理のための作業 (例えば、予定表作成やメモ作成) に使用でき、電話、ファックス、およびネットワーク機能を備えたハンドヘルド・デバイス。

結合 (join). リレーショナル演算の 1 つ。マッチング列値を基準にして 2 つまたはそれ以上の表からデータを検索することができる。

権限 (authorization). コンピューター・セキュリティに関して、コンピューター・システムとやりとりを行う、あるいはそれを使用するためにユーザーに与えられた権利。

構造化照会言語 (SQL) (Structured Query Language (SQL)). リレーショナル・データベース内のデータを定義し操作するために使用するプログラミング言語。

コントロール・センター (Control Center). データベース・オブジェクト (例えば、データベースや表) および、それらのお互いの関係を表示する、グラフィカル・インターフェース。コントロール・センターから、DBA ユーティリティ、Visual Explain、および、パフォーマンス・モニター・ツールが提供するタスクを実行することができる。

[サ行]

サブスクリプション (subscription). ソース・データベースにある情報をどのようにターゲット・データベースに複製するかの仕様。サブスクリプションにより、どのデータ・サブセットおよびファイルをソース・データベースからコピーできるかを定義できる。ソース・サーバーに保管されているファイル用のファイル・サブスクリプションと、ソース・データベースにある表のための表サブスクリプションの、2 つのタイプのサブスクリプションが作成可能。

サブスクリプション・セット (subscription set). レプリケーション・サブスクリプションが入っているアドミニストレーター・オブジェクト。レプリケーション・サブスクリプションに定義されているデータおよびファイルに、グループ・メンバーがアクセスできるようにするには、サブスクリプション・セットを作成して、それ

にサブスクリプションを割り当ててから、そのサブスクリプション・セットをグループに割り当てる。サブスクリプション・セット・オブジェクトは、アプリケーション・オブジェクトを置き換える。

持続 (persistent). セッション境界間で、通常はデータベース・システムまたはディレクトリーなどの不揮発性ストレージに保持されるデータに関する用語。

主キー (primary key). 表定義の一部をなす固有のキー。主キーは、参照制約定義のデフォルトの親キー。DB2 Everyplace 同期サーバー バージョン 7 では、各レプリケーション・ソースに唯一無二の基本キーが必要。

照会 (query). 特定の条件に基づいた情報をデータベースから要求すること。例えば、カスタマー表の中から残高が \$1000 を超えるすべてのカスタマーのリストを要求すること。

ソース表 (source table). ターゲット表にコピーするデータが入っている表。ソース表は、レプリケーション・ソース表でなければならない。ターゲット表 と対比。

ソース・サーバー (source server). レプリケーション・ソースがあるデータベースのロケーション。

ソース・データベース (source database). ターゲット・システムにコピーするデータが入っている、ソース・サーバーにあるデータベース。

[夕行]

ターゲット表 (target table). ソース表からデータがコピーされる表。中間層サーバーにあるミラー表も、モバイル・デバイス上の DB2 Everyplace 表も、ターゲットである。

ターゲット・データベース (target database). ソース・データベースからデータがコピーされる、モバイル・デバイス上にある DB2 Everyplace データベース。

タップ (tap). ハンドヘルド・デバイスと対話するためにスタイラスを使用すること。

中間層システム (mid-tier system). DB2 Everyplace 同期サーバーがインストールされているマシン。2 層同期構成では、中間層とソース・システムは同じマシンを指す。

データの同期 (data synchronization). モバイル・データの同期 を参照。

データベース管理システム (database management system (DBMS)). 中央制御、データ独立性、および複雑な物理構造などのサービスを提供することによってデータを管理し、アクセスや、保全性、リカバリー、並行制御、プライバシー、セキュリティの効率化が図れるコンピューター・プログラム。

データベース・サーバー (database server). データベースにデータベース・サービスを提供する機能単位。

データ・フィルター (data filter). フィルター を参照。

同期 (synchronization). モバイル・データの同期 を参照。

同期オブジェクト (synchronization object). お客様の環境における同期化処理についての情報が入っている、アドミニストレーター内にある管理可能な項目。同期オブジェクトには、グループ、クライアント、サブスクリプション・セット、サブスクリプション、ログの 5 つのタイプがある。

同期セッション (synchronization session). モバイル・ユーザーまたはクライアント が、前回に同期をとった後にソース・データのローカル・コピーに対して行った変更をサブミットし、(リモート・サーバーにある) ソース・データに対して行われた変更があれば、それを受け取るトランザクション。

動的ホスト構成プロトコル (DHCP). TCP/IP を使用するコンピューターの構成を自動化するためのインターネット・プロトコル。

特権 (privilege). 特定の 방법으로特定のデータベース・オブジェクトにアクセスするための権利。これらの権利は、SYSADM (システム管理者) 権限、または DBADM (データベース管理者) 権限を持つユーザー、あるいは、オブジェクトの作成者がコントロールする。特権には、表の作成、削除、および表からデータを選択する権利も含まれる。

[ナ行]

認証 (authentication). ユーザー ID とパスワードを管理制御データベースにある項目と比較して、同期サーバーを使用してデータの同期をとることをユーザーに許可しているかどうかを検証するプロセス。

[ハ行]

パーベイシブ・コンピューティング (pervasive computing (PVC)). 情報機器と呼ばれる特殊な機器を含むコンピューティング基本設備の使用。これにより、

ユーザーは広範囲のネットワークに基づくサービス (一般的にインターネットによって提供されるサービスを含む) にアクセスできる。このような情報機器としては、テレビ、自動車、電話、冷蔵庫、および電子レンジがある。パーベイシブ・コンピューティングにより、関連情報へのアクセスが便利になり、その情報に基づいた処置が行えるようになる。

バインド (bind). SQL において SQL プリコンパイラからの出力を、アクセス・プランと呼ばれる使用可能な構造に変換するためのプロセス。このプロセスの際、データへのアクセス・パスが選択され、ある種の許可検査が行われる。

ハンドヘルド・デバイス (handheld device). 携帯可能なコンピューティング・デバイス。ハンドヘルド・デバイスとしては、手のひらサイズの PC および携帯情報端末 (PDA) がある。

ビュー (view). 照会によって生成されるデータから構成される論理表。

フィルター (filter). 指定された基準に従って、データ、シグナル、物体を分離するデバイスまたはプログラム。

[マ行]

マスター・データベース (master database). ソース・データベース を参照。

ミラー・データベース (mirror database). 同期とレプリケーションに必要なデータを保管するために、同期サーバーが内部で使用するデータベース。

無線 LAN (wireless LAN). 無線の使用の場合、モバイル・ユーザーは無線接続を介してローカル・エリア・ネットワーク (LAN) に接続できる。LAN 接続用の無線テクノロジーとしては、スピード・スペクトル、マイクロ波、および赤外線がある。

モバイル (mobile). さまざまなロケーションへ頻繁に移動し、さまざまなタイプのネットワーク接続 (例えば、ダイヤルアップ、LAN、または無線) を使用するユーザーが、携帯用コンピューターまたはハンドヘルド・デバイス上で行うコンピューターを使った作業に関する用語。

モバイル・データの同期 (mobile data synchronization). モバイル・ユーザーまたはクライアントが、ソース・データのローカル・コピーに対して行った変更をサブミットし、前回の同期以降に (リモ-

ート・データベース内の) ソース・データに対して行われた変更があればそれを受け取る、2 ステップのプロセス。

[ラ行]

ラージ・オブジェクト (large object (LOB)). 連続したバイトで、長さは 2 ギガバイトまで可能。タイプとしては、BLOB (2 進)、CLOB (1 バイト文字または混合)、あるいは DBCLOB (2 バイト文字) の 3 つがある。

リフレッシュ (refresh). ユーザー表にある、関係するすべてのデータをターゲット表にコピーして、既存のデータを置き換えるプロセス。

リモート・アクセス・サービス (Remote Access Service (RAS)). 2 つのシステムの間接続を管理する Windows プログラム。

リモート・データベース (remote database). 使用中のコンピューター以外のコンピューターに物理的に存在するデータベース。ローカル・データベースとの対比。リモート・コンピューティング・デバイスは、据え付けで移動できないものである場合も、また、移動できるものの場合もある。

レプリケーション (replication). ソース・サーバーのデータベース・ログまたはジャーナルに保管されている変更点を取り出し、それらをターゲット・サーバーに適用するプロセス。

レプリケーション・ソース (replication source). レプリケーションのためのソースとして定義されるデータベース表。レプリケーション・ソースとしてデータベース表を定義した後、その表はコピー要求を受け入れることができる。

ローカル・データベース (local database). 使用中のコンピューターに物理的に存在するデータベース。リモート・データベース と対比。

ログ (log). 同期エラー・メッセージとそれらの説明が入っているアドミニストレーター・オブジェクト。

[数字]

2 進ラージ・オブジェクト (BLOB) (binary large object (BLOB)). 連結したバイトで、そのサイズの範囲は 0 バイトから 2 ギガバイトまで。このバイト・シーケンスには、関連するコード・ページおよび文字セットはない。イメージ、オーディオ、およびビデオの各オブジェクトは BLOB に保管される。

2 バイト文字セット (DBCS). 各文字が 2 バイトで表現される文字セット。

B

BLOB. 2 進ラージ・オブジェクト を参照。

D

DB2 DataPropagator. ソースからターゲットへの、データの自動的な複製を行う手段を提供するレプリケーション製品。モバイル・データの同期をとる際は、ミラー・データベースとリモート・データベースはソースとターゲットの両方の働きをする。DataPropagator は、クライアントの変更内容をミラーからリモート・データベースへ複製し、また、リモート・データベースからミラー・データベースへも変更内容を複製する。

DB2 コントロール・センター (DB2 Control Center). コントロール・センター を参照。

DBCS. 2 バイト文字セット (*double-byte character set*) を参照してください。

DHCP. 動的ホスト構成プロトコル を参照。

DPROP. DB2 DataPropagator を参照。

I

IBM Sync. DB2 Everyplace 同期サーバー・ソフトウェアのクライアント・コンポーネントを表すアイコンの名前。

L

LOB. ラージ・オブジェクト を参照。

M

MDAC. モバイル・デバイス管理センター を参照。

O

ODBC. *Open Database Connectivity* を参照。

Open Database Connectivity (ODBC). 呼び出し可能 SQL を使用してデータベース管理システムへのアクセスを可能にする API であり、SQL プリプロセッサを使用する必要がない。ODBC アーキテクチャーにより、ユーザーは、実行時にユーザーが選択したデータベース管理システムにアプリケーションをリンクする、デ

ータベース・ドライバーと呼ばれるモジュールを追加できる。アプリケーションは、サポートされているすべてのデータベース管理システムのモジュールに直接リンクする必要はない。

P

PDA. 携帯情報端末 を参照。

PVC. パーベイスブ・コンピューティング を参照。

Q

QBE. 例示照会プログラム を参照。

QBE (例示照会). DB2 Everyplace 表に保管されているデータをユーザーが動的に表示したり変更できるようにするアプリケーション。

R

RAS. リモート・アクセス・サービス を参照。

S

SQL. 構造化照会言語 を参照。

索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

アプリケーション
 サンプル 113
 コマンド行プロセッサ 105
 Visiting Nurse (巡回医療サービス) 117
アプリケーション, サンプル 95
アプリケーション・サーバーのクローン作成 76
 作成のためのセットアップ 74
インストール, 構成およびセットアップ要件 13
インストール, サポートされるオペレーティング・システム 12, 13
インストール, ソフトウェア要件 12, 13
インストール, ハードウェア要件 12, 13
エラー・メッセージ
 DB2 Everyplace Update Tool 52

[カ行]

組み込み Linux, インストール, ファイル 41
クローン 73
コマンド
 CLP 106
コマンド行プロセッサ 105

[サ行]

サーバーでの DB2 Everyplace Express のセットアップ
 ステップ 26, 29
サーバーでの DB2 Everyplace のセットアップ
 概要 17
 ステップ 17, 22
サーバーへの DB2 Everyplace Express のインストール
 ステップ 26, 29
サーバーへの DB2 Everyplace のインストール
 概要 17
 ステップ 17, 22

サーバー・グループ 73
サブレット
 テスト 56
サンプル・アプリケーション
 セットアップ 56
CLP 105
Visiting Nurse (巡回医療サービス) 113
 概要 113
 実行 114
 表 117
サンプル・アプリケーションの説明と場所 95
サンプル・データベース
 セットアップ 56
ソース・データベース
 マッピング 55

[タ行]

データのインポートとエクスポート 109
同期
 Palm OS セットアップ 83
同期クライアント
 ソフトウェアのアップグレード 48
同期サーバー
 サブレットのテスト 56
 WebSphere Application Server で使用する構成 58

[ハ行]

ハードウェア要件 4
複数サーバー環境
 計画の考慮事項およびヒント 74
 構成 72
 構成後のタスク 77

[マ行]

マイグレーション, バージョン 8.1.2 へのステップ 11
モバイル・デバイス
 インストール, DB2 Everyplace の 32
モバイル・デバイスでの DB2 Everyplace のセットアップ
 概要 32
 手作業で 34
 Install on Mobile Devices ツールを使用した 32

モバイル・デバイスへの DB2 Everyplace のインストール
 概要 32
 手作業で 34
 Install on Mobile Devices ツールを使用した 32

[ラ行]

レプリケーション, 使用可能化 55

C

CLP による照会 108

D

DB2 Everyplace
 インストール要件 12
DB2 Everyplace CLP 108
 コマンド 106
 データのインポートとエクスポート 109
DB2 Everyplace Express
 インストール要件 13
DB2 Everyplace Update Tool 48
 エラー・メッセージ 52
DB2 Everyplace サンプル・アプリケーション, テスト 78
DB2 UDB
 とのレプリケーションの使用可能化 55

I

IBM Sync
 サブスクリプション・セット・メニュー 101
 設定メニュー 102, 103
IBM Sync アプリケーション
 概要 99
 構成 100
 データの同期化 103
 メニュー・オプション 101
IBM Sync を使用したデータの同期化 103
Install on Mobile Devices ツール 32
ISync
 Symbian OS v6.0 デバイスでの構成 90

L

Linux

- インストール、DB2 Everyplace の 22, 29
- ハードウェア要件 13

M

Mobile Application Builder、ダウンロード

78

m-Router Connect

- デバイスでの構成 90
- ワークステーションでの構成 89

P

Palm OS

- DB2 Everyplace サンプル・アプリケーションのインストール 34
- DB2 Everyplace 同期ファイルのインストール 85
- DB2 Everyplace ライブラリーのインストール 34

Palm OS エミュレーター

- データの同期と検査 87
- 同期セットアップの概要 83
- 同期のためのセットアップ 84

Palm OS デバイス

- データの同期と検査 87
- 同期セットアップの概要 83
- 同期のためのセットアップ 84

PIM (Personal Information Manager)

- 前提条件 12

Q

QNX Neutrino、インストール、ファイル

41

S

SQL ステートメント

- CLP による実行 108

SQL ステートメントの実行 108

Symbian OS v6.0 デバイス

- 同期のためのセットアップと構成
 - データの同期化 91
 - デバイスでの ISync の構成 90
 - デバイスでの m-Router Connect の構成 90
- ワークステーションでの m-Router Connect の構成 89

Symbian OS バージョン 6.0 デバイス

- 同期のためのセットアップと構成

概要 88

Symbian OS バージョン 7 へのファイル

- のインストール 39

Symbian OS、インストール、ファイル

38

U

UNIX

- サンプルのデータベースとアプリケーションのセットアップ 56

- 同期サーバーのサープレットのテスト

56

- ハードウェア要件 12

V

Visiting Nurse (巡回医療サービス) アプリケーション

- 概要 113

- 実行 114

- 表 117

W

WebSphere Application Server

- 使用する同期サーバーの構成 58

Windows

- インストール、DB2 Everyplace の 17, 26

- サンプルのデータベースとアプリケーションのセットアップ 56

- 同期サーバーのサープレットのテスト

56

- ハードウェア要件 12, 13

- モバイル・デバイスへの DB2

- Everyplace のインストール 32

Windows 32 ビット版、インストール、ファイル 46

Windows CE、インストール、ファイル

36

弊社へのお問い合わせ

DB2 Everyplace 製品についてのお問い合わせや注文については、IBM 担当員または代理店にお申し付けください。

米国内では、次の番号をお願いします。

- 1-800-237-5511 (カスタマー・サポート)
- 1-888-426-4343 (サービスについての問い合わせ)

製品情報

米国内では、次の番号をお願いします。

- 1-800-IBM-CALL (1-800-426-2255) または 1-800-3IBM-OS2 (1-800-342-6672) (製品のご注文、お問い合わせ)
- 資料のご注文方法については、<http://www.infocreate.co.jp/> をご覧ください。(URL は、変更になる場合があります)

<http://www.ibm.com/software/data/db2/everyplace/>

DB2 Everyplace のワールド・ワイド・ウェブ (WWW) ページで、製品説明、講習会その他の最新の DB2 Everyplace 情報がご覧になれます。

<http://www.ibm.com/software/data/db2/everyplace/library.html>

この DB2 Everyplace Technical Library からは、よくある質問と回答をまとめた Q&A 集 (FAQ)、修正、資料、および DB2 Everyplace に関する最新の技術的な情報にアクセスできます。

注: この情報の提供は、英語版のみとなります。

<http://www.ibm.com/software/data/>

DB2 のワールド・ワイド・ウェブ (WWW) ページで、製品説明、講習会その他の最新の DB2 情報がご覧になれます。

<http://www.ibm.com/software/data/db2/library/>

この DB2 Product and Service Technical Library からは、よくある質問と回答をまとめた Q&A 集 (FAQ)、修正、資料、および DB2 に関する最新の技術的な情報にアクセスできます。

注: この情報の提供は、英語版のみとなります。

<http://www.infocreate.co.jp/>

資料のご注文方法については、この Web サイトをご覧ください。

<http://www.ibm.com/education/certify/>

IBM Web サイトの Professional Certification Program では、DB2 を含め、いろいろな IBM 製品についての認証テスト情報を提供しています。

<ftp.software.ibm.com>

無名 (anonymous) でログオンします。ディレクトリー /ps/products/db2 に、DB2 およびその他の多数の製品についてのデモ、修正、情報ならびにツールがあります。

comp.databases.ibm-db2、bit.listserv.db2-l

これらのインターネット・ニュースグループは、ユーザーが DB2 製品に関する経験などの情報交換の場となっています。

Compuserve では、GO IBMDB2

このコマンドを入力して IBM DB2 ファミリー・フォーラムにアクセスします。すべての DB2 製品が、これらのフォーラムでサポートされています。

米国外での IBM に対するお問い合わせは、*IBM Software Support Handbook* の付録 A を参照してください。この資料を見るには、<http://www.ibm.com/support/> にアクセスして、画面の下部にある IBM Software Support Handbook へのリンクを選択してください。

注: 国によっては、IBM 特約店は IBM サポート・センターではなく、独自のサポート・センターにお問い合わせいただく必要があります。



プログラム番号: 5724-D04

Printed in Japan

SC88-9478-01



日本アイ・ビー・エム株式会社
〒106-8711 東京都港区六本木3-2-12